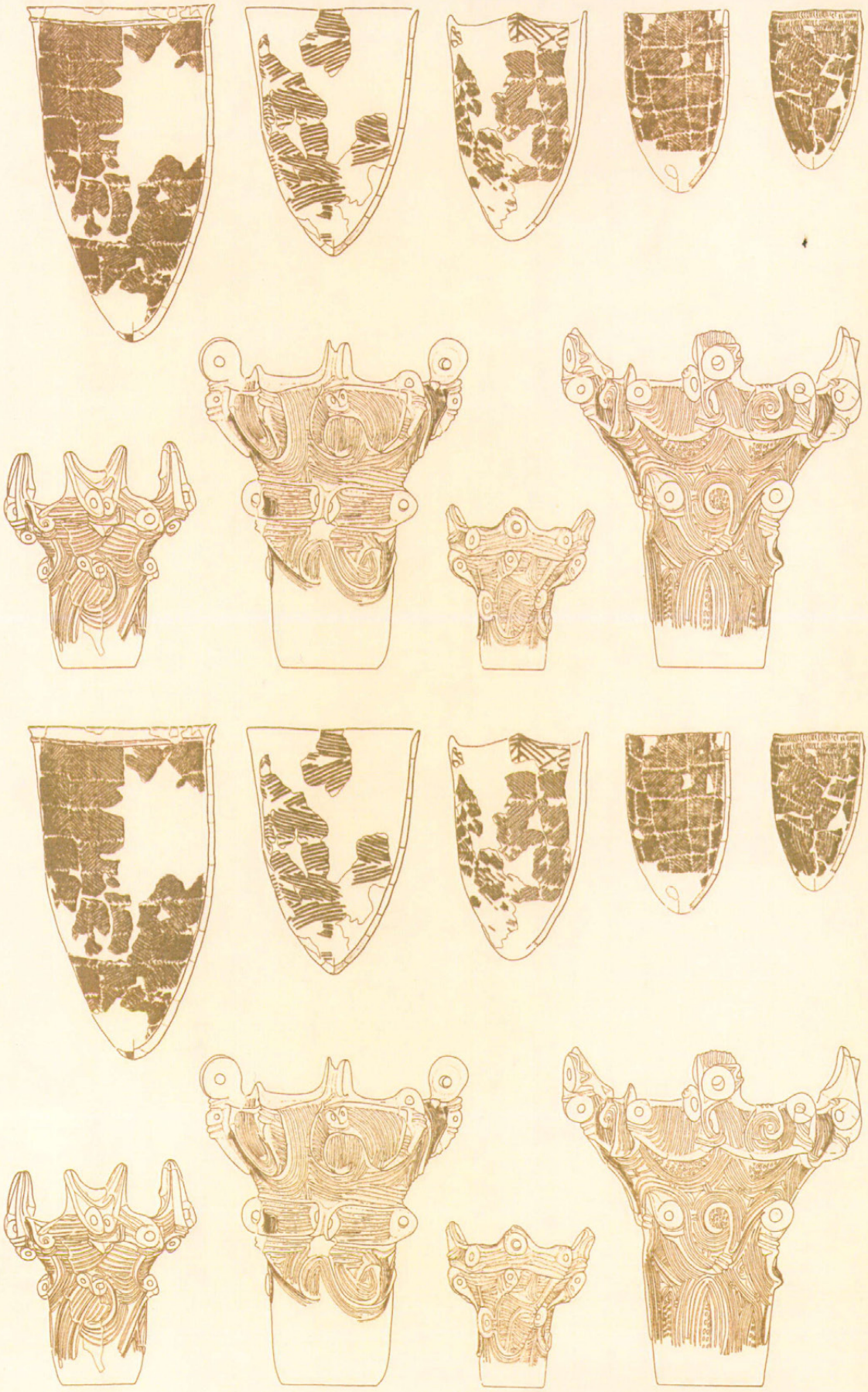
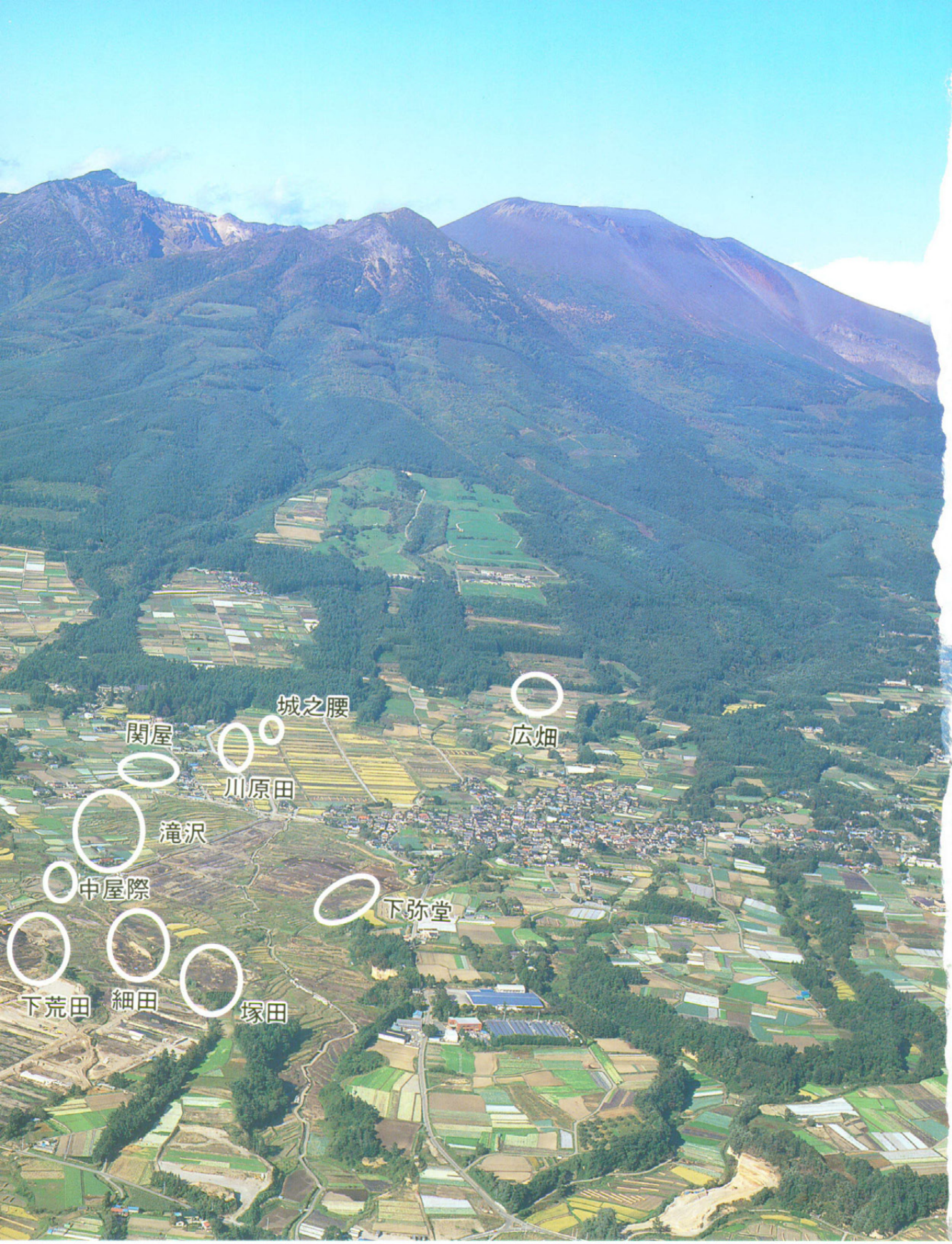
御代田の縄文土器



御代田町誌

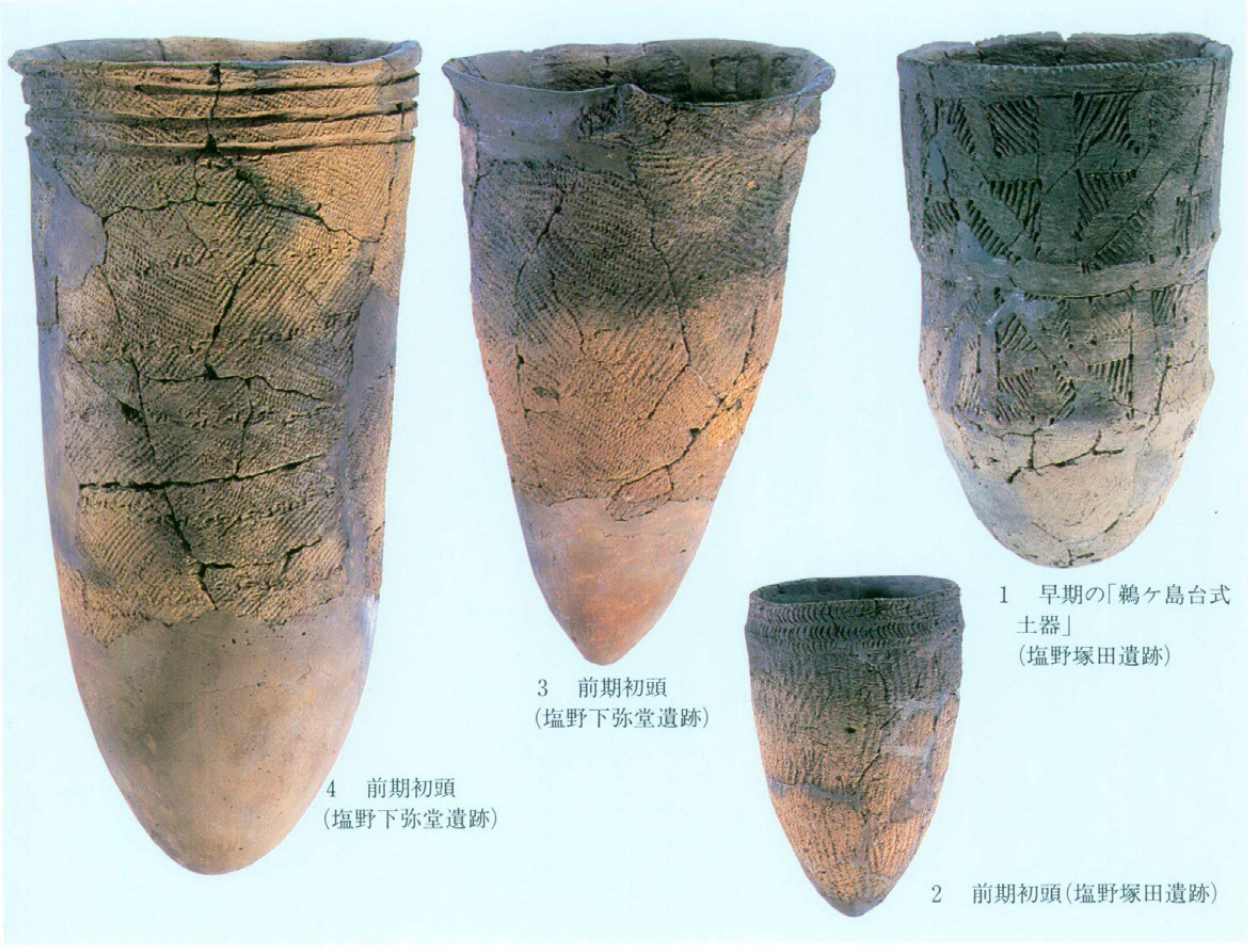
歴史編

上



1　浅間山南麓に広がる縄文時代遺跡

浅間山南麓では近年縄文遺跡の調査が進み、かつてこの地に個性あふれる力強い縄文文化が花開いていたことがわかってきた。縄文時代のムラは、標高800～900メートル前後、湧水に近く日当たりの良い南斜面に作られた。



1　早期の「鵜ケ島台式土器」
（塩野塚田遺跡）

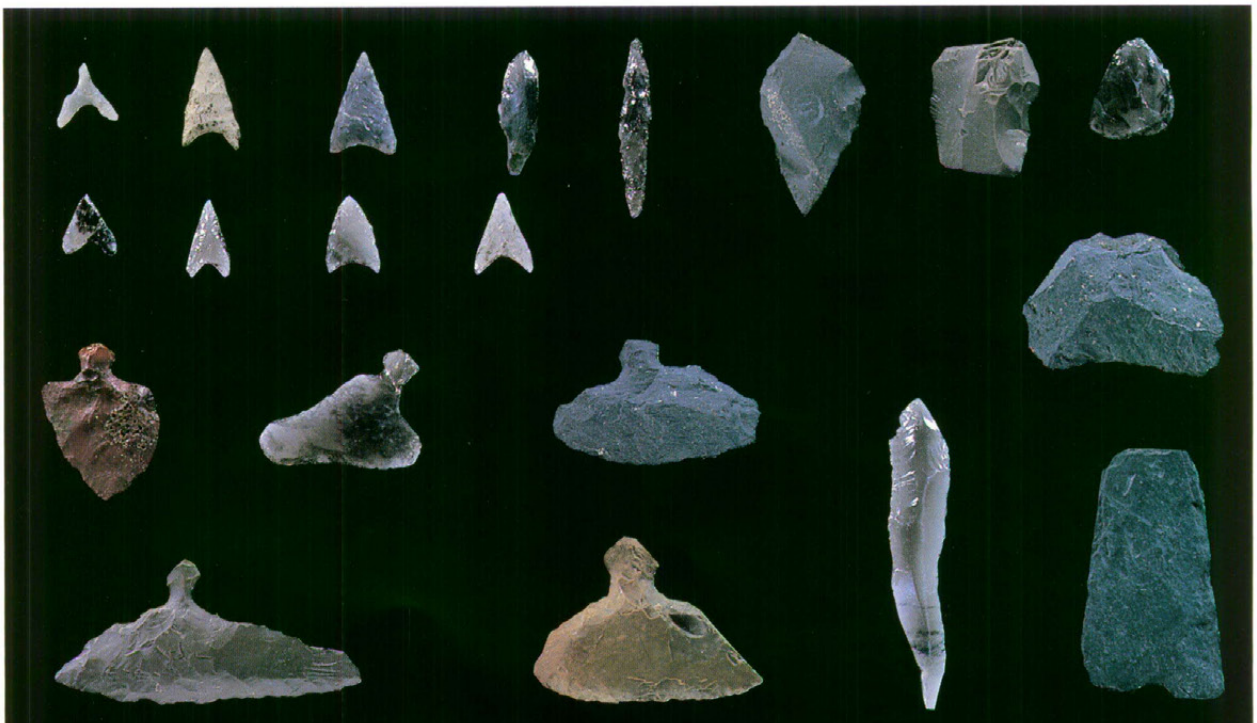
2　前期初頭（塩野塚田遺跡）

3　前期初頭
（塩野下弥堂遺跡）

4　前期初頭
（塩野下弥堂遺跡）

2　縄文時代の尖底土器

縄文時代の早期から前期初頭（8000～7000年前）にかけては、砲弾型をした尖底土器が作られた。



3　縄文人の道具

縄文前期の塚田遺跡からは、石鏃・錐・クサビ形石器・石匙・打製石斧などの道具類が発掘された。
石器は切れ味の良い黒曜石やチャートなどの石で作られていた。

4　川原田遺跡の中期縄文土器
今から4500年前の縄文中期は、最も豪華な文様をもつ土器が作られた時代である。　（撮影　小川忠博）
日本の縄文工芸を代表する焼町土器などの優品が塩野川原田遺跡から発掘された。

5　川原田遺跡の縄文集落
塩野真楽寺東の舌状台地からは、縄文中期を中心とする50軒あまりの住居が発掘された。
縄文時代の人びとは浅間山の豊かな自然から生活の糧を得て、この地に暮らしていた。

6　川原田遺跡の焼町土器
今から4500年前の縄文中期には、浅間山南麓でたくさんの焼町土器が作られた。（撮影　小川忠博）

7　焼町土器の文様展開

8　山椒魚（さんしょううお）状の文様（縄文中期）

9　抽象的な文様（縄文中期）

10　塩野川原田遺跡の竪穴住居（縄文中期中葉）
1メートル以上の深さがある。

11　豊昇宮平遺跡の敷石住居（縄文中期後葉）
鉄平石を敷きつめた住居

12　縄文時代の装飾品・祭祀遺物
ペンダント・耳飾り・土偶・石剣・顔面把手・耳形土製品などがある。
豊昇宮平遺跡、塩野川遺跡・遠沢遺跡の出土品

13　塩野細田遺跡の弥生時代のムラ

竪穴住居数軒からなるムラが細田遺跡から発掘された。今日の風景に映し出されているように、弥生の人びとは眼下の沢に水田を作っていたのだろうか。

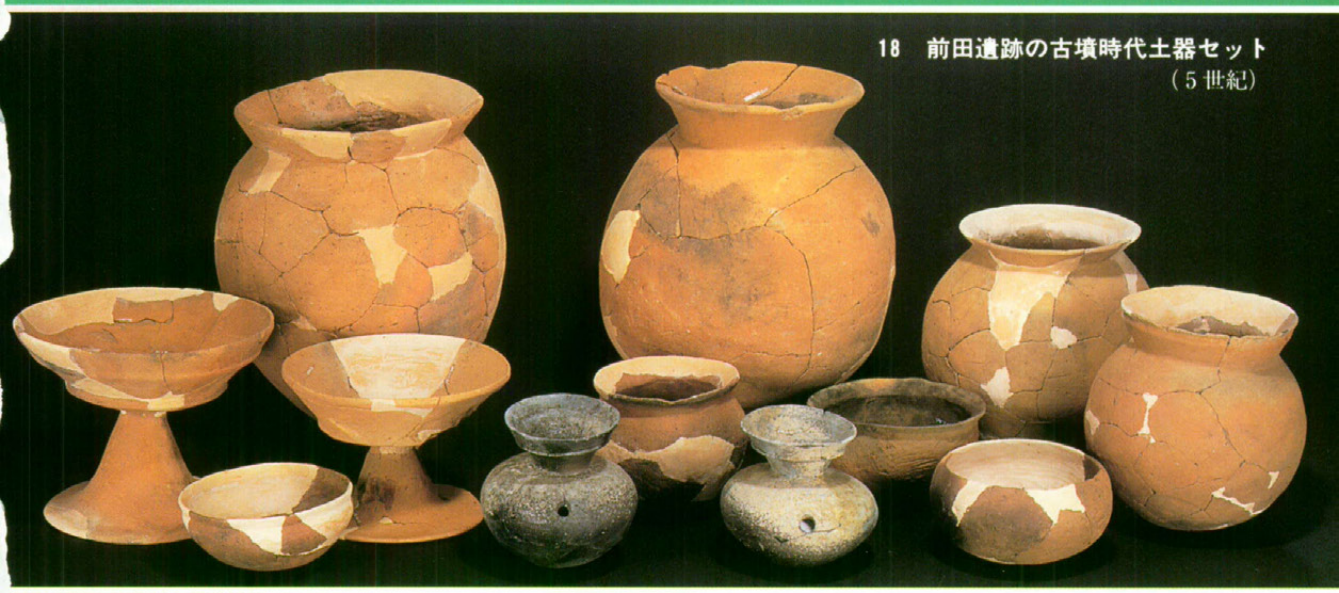
14　弥生後期の「赤い土器」

塩野細田遺跡の竪穴住居からは弥生後期の「赤い土器」が出土した。千曲川流域の後期弥生土器はベンガラなどで赤く彩色されているのが特徴である。縄文時代の土器と比べると装飾が少なく、実用的な食器であるといえる。

15　馬瀬口めがね塚１号墳
７世紀後半に作られた古墳で、町内に現存する数少ない古墳のひとつ。平成９年度に復元整備され、石室内を見ることができる。

16　めがね塚１号墳の石室
めがね塚１号墳の石室には、積み重ねられた石材の中に重さ８トン以上もの巨石が用いられていた。古代の土木技術の水準の高さがうかがえる。

17　前田遺跡の初期須恵器（5世紀）
町指定文化財



18　前田遺跡の古墳時代土器セット
（5世紀）

19　十三遺跡の奈良時代土器セット（8世紀）

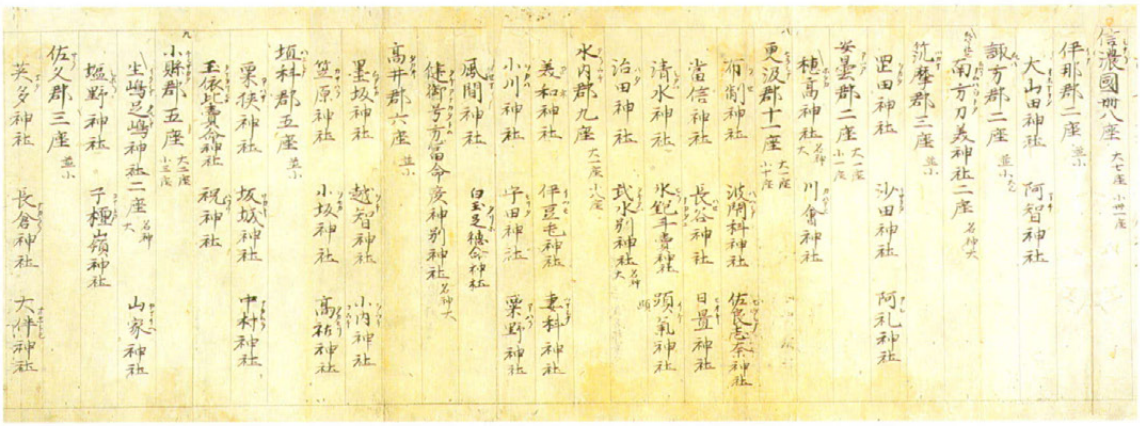
20　十三遺跡の奈良・平安時代のムラ
西屋敷地区の東側にあたる御代田町分から発掘された。

21　十三遺跡の奈良・平安時代のムラ
竪穴住居と掘立柱建物からなる。

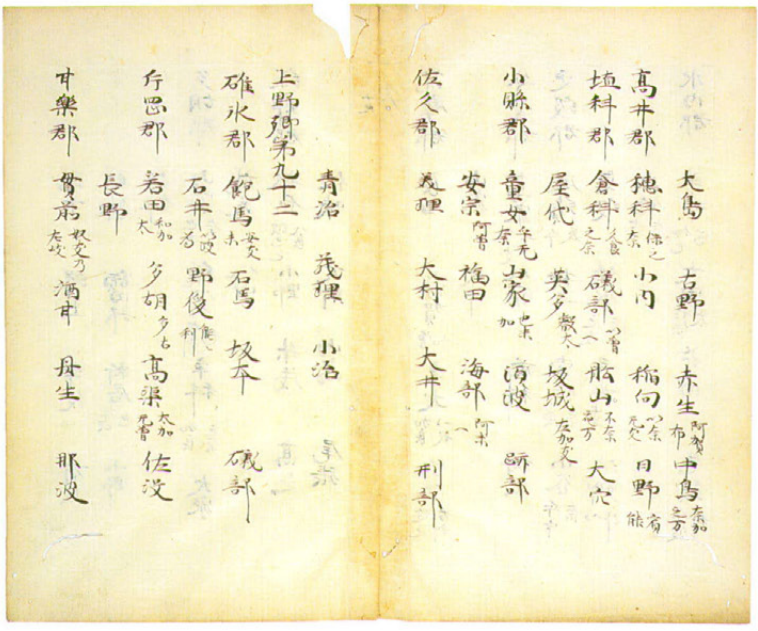
22　野火付遺跡の埋葬馬（9世紀）　町指定文化財
塩野牧馬とも長倉駅馬ともいわれる。

23　根岸遺跡の平安時代土器セット（9世紀末）

24 溝で囲まれた礎石建物（塩野川原田遺跡）
真楽寺の東にあり10世紀ごろの古代寺院と推定されている。



25 『延喜式』に記載された信濃国の神社（平安時代）
英多・長倉・大伴という佐久の三社もみえる。（天理大学附属天理図書館蔵）



26 『和名類聚抄』（高山寺本）にみえる佐久の郷
美理・大村・大井・刑部・青治・茂理・小治の7郷がみえる。（天理大学附属天理図書館蔵）

（撮影　山本宗補）

27　真楽寺の仁王尊

あうんの呼吸をみせ、口を開く阿形と口を結ぶ吽形。室町時代一三九五年、上野（群馬）の仏師刑部公鏡鑁（おさかべのきみきょうばん）の作である。建立費用は、佐久の武士や農民による「一結講」によって賄われた。

発刊のことば

御代田町誌刊行会長
御代田町長　柳澤　薫

浅間山。御代田町のシンボルでもあるこの火の山のふもとには、一万年の昔から人々の営みが続けられておりました。有史以来、浅間はいくたびとなく噴火を繰り返し、時には山麓に住む人々の生活に壊滅的な影響を及ぼし、また、いっぽうではこの地域独自の風土形成の基盤となっています。そうした浅間山麓の先人たちの歴史や暮らしのようすを、旧石器から縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代、中世とつづったのが本書であります。

まさに火の山を象徴するかのような躍動感あふれる「焼町土器」が塩野川原田遺跡から発掘されていますが、この土器は四五〇〇年前の縄文時代の浅間山麓の文化的水準の高さを私たちにみせてくれます。川原田の「焼町土器」は、日本を代表する優れた縄文工芸のひとつとして高い評価を得、マレーシアなどに海外出品されております。

二〇〇〇年前、高冷地である御代田になんとか稲作を根づかせようと奮闘した弥生人たちのムラのようすや、立派な石室をもつ古墳として復元保存されためがね塚古墳についても、本書にくわしく記載されています。

奈良・平安時代の浅間山麓には、朝廷の直営牧場「塩野牧」や「長倉牧」が置かれ、朝廷に献上する駿馬が生産・飼育されました。また、全国七道のひとつである東山道が碓氷峠へと抜け、「長倉駅」が設置されました。本書ではこうした古代の要所であった御代田について、豊富な発掘資料などを駆使し、新しい事実を解明しています。

一一〇八年に起こった浅間山の大噴火では、近年の雲仙普賢岳の三倍にもおよぶ火砕流が御代田・軽井沢を覆いま

したが、本書で取り上げられたこうした過去の大災害も今後の火山災害対策への道を教えてくれています。

本書は、監修者の桐原健先生をはじめ、執筆者・編纂委員・各方面のみなさまのご協力によって刊行の運びとなりました。こうした皆様に巻頭にあたり厚く御礼を申し上げます。

「温故知新」という言葉がありますが、雄大な浅間山麓に展開した古代の人々の暮らしと知恵が本書から読み取られ、明日の御代田町の礎となることを願ってやみません。

平成十年三月

監修のことば

御代田町誌歴史編上監修者
長野県考古学会会長　桐原　健

信越線を利用していた時、私にとっての「御代田」は通過駅だった。田切り地形の谷間で視野は限られているので印象は薄く、ここが浅間の裾野の北佐久郡御代田町であること程度は承知していたものの、それ以上の知識は有していなかった。

歴史の知識の乏しさも同程度で、一九五五年に刊行をみた『信濃史料』の「遺跡地名表」に一六遺跡・古墳一〇基が記載されているにもかかわらず、浮かんでくるのは旧伍賀村豊昇の宮平遺跡だけだった。もっともこれは致し方のないことでもあって、町教委より三二遺跡・古墳五基が存在するとの報告があった七二年の時点においても発掘調査を受けた遺跡は宮平の一遺跡だけなのである。ちなみに宮平の調査は、軽井沢に在住したことのある英国人医師で考古学者のNGマンローと東大考古学教室の八幡一郎氏が昭和初年に行なっただけで、後は六七年五月を待たねばならなかった。この後、七八年には塩野下藤塚・草越南畑・児玉池尻の三遺跡が発掘されているが、調査面積は小さく大方の知るところとはなっていない。

古代史の部門はどうだろう。明治十五年に県に提出した、御代田村の書き上げは「古昔大井郷。後、大井庄。又、長倉郷と云う。」との一項のみである。延喜の官道や信濃御牧の研究がたかまった大正末年以降にあっても、塩野牧は江戸時代以来の塩野村に所属し、官道は浅間山の山麓を通過していたということで納得してしまい、これを掘り下げ

ての調査研究は行なわれてはいない。要するに御代田の原始・古代は戦後三〇余年を経てもまだ眠り続けていた。

御代田町の遺跡が本格的に覚めたのは今からわずか一四年前のことで、一九八四年より八七年にかけて御代田・小諸・佐久にかかる鋳師屋遺跡群の大発掘による。町教委が担当したのは野火付・前田・十二・根岸の四遺跡で奈良・平安時代の大集落が発見された。続いて九〇年から九三年には浅間山山腹の塩野西遺跡群の調査が行なわれ、縄文前期・中期・そして弥生後期・平安集落の全貌が判明した。縄文中期の川原田遺跡から出土した焼町土器とよばれる土器は、国重要文化財クラスのもので、また前期の尖底土器もそれに劣らず優品が多い。このように現在、町内の遺跡は多様な問題を孕み、すべて学界の注目を浴びている。古代史も同様で、鋳師屋遺跡群が典型的な奈良時代集落として『長野県史』に紹介され、改めて御代田町内における東山道の道筋や長倉の駅家が検証され、塩野牧にかかわる施設の探索も進んでいる。また御代田の郷については、小沼郷に属したものとみられる。

御代田の遺跡を目覚めさせ、甦らしたのは当時二十代後半の若者たちで、そのかれらが本書の原始・古代・中世を執筆している。すなわち、本巻の特徴は若い考古学研究者によって記述されている点にある。考古学は戦後五〇年を経て、歴史学の補助学を脱して考古資料をもって歴史叙述ができる力量を備えた。また、考古資料には史料がもつ指名権は求められないけれども、土の中に遺されている土器・石器には真相を伝える決定権がある。当然その記述は、御代田の土地と結びついていた人間の歴史にウェイトが置かれている。この点は高く評価すべきであろう。

ただ、町民の理解を願いたい点が一つある。歴史の教科書は時代が新しくなるにつれて頁数が多くなる富士山型だが、町誌は原始の縄文時代に相当なスペースを割いている。これはモノを通して人の営みを描こうとする考古学の宿命なので、この部分を削除してしまうと単なるオハナシに堕する虞がある。やや難解な部分もあるが諒恕されたい。

歴史編上を一瞥して思うことだが、最近に調査を受けた御代田の遺跡は、時代や環境が異なってはいてもどれもが佐久の核的位置を占めている。本書が御代田町の明日の礎になることを深く願っている。

例　言

一、本書は御代田町誌・全七巻中の第四巻「歴史編上」―原始・古代・中世―である。

一、本書の記述範囲は御代田町を中心にした浅間山麓地域を主としているが、原始・古代・中世という性格上、佐久地域全域、あるいはさらに広い範囲におよんでいる場合がある。

一、本書は、「序章」と「第一編原始」「第二編古代」「第三編中世」の本編、遺跡地図を掲載した「付編」から構成され、時代ごとの歴史の流れが浮き彫りになるように努めた。編の冒頭には年表とあらましをつけ、時代の特色や概要がわかるようにした。

一、本書では、常用漢字および現代かなづかいを使用し、人名や簡単に表記できない特殊な用語には振り仮名をつけた。

一、数字は原則として漢数字を使用し、写真・図・表などの横組みの場合に限り算用数字を用いた。

一、写真・図・表などの番号は、各編ごとに一連番号を付した。

一、年号は日本年号を用い、文明十六（一四八四）年のように和暦には「十」を入れた。西暦は（　）で漢数字を並べた。

一、文中の著書・作品・資料名などは、『　』で示した。

一、参考文献は、各執筆の分担ごとに文末に載せた。

一、本文の写真・図・表の引用のもとになった、資料の所蔵者・提供者・出典はそれぞれの個所に示した。

一、度量衡は片仮名で略記することを原則にした。

一、文中の人名には、敬称を省略させていただいた。

一、執筆者氏名は、担当部分を目次に入れ、文章の責任を明確にした。巻末には執筆者・協力者・資料提供者・教示者・刊行会委員名などの名簿を示した。

一、索引は利用者の便を考えて、時代の特色ある内容、歴史理解上必要と思われる主要語句を選んで、五十音順に載せた。

御代田町誌　歴史編上　目次

題字　柳澤　薫

御代田町誌刊行会長　柳澤　薫

長野県考古学会会長　桐原　健

口絵　写真

発刊のことば

監修のことば

例言

序章　御代田町の原始・古代瞥見……3

一　御代田の縄文時代……（桐原　健）3

二　御代田の弥生時代……6

三　御代田の古墳時代……8

四　御代田の奈良・平安時代……10

五　御代田の中世……11

第一編　原　始

第一章　旧石器時代……（角張淳一）15

第一節　旧石器時代のあらまし……15

一　進化と文化の歴史……15

第二節　佐久地方の旧石器文化……21

一　後期旧石器時代の展開……21

第三節　旧石器時代の古環境と浅間山の噴火……26

第二章　縄文時代……（角張淳一）29

第一節　縄文時代のあらまし……29

第二節　縄文文化の黎明―草創期……31

第三節　縄文文化の胎動―早期……（水沢教子）38

一　早期という時代……38

二　縄文早期の遺構……42

三　早期の土器……46
第四節　縄文文化の形成―前期……（水沢教子）53
一　前期の遺跡……53
二　生活用具のいろいろ……57
三　集落のようす……69
第五節　縄文文化の爛熟―中期……（水沢教子）75
一　中期の遺跡……75
二　縄文中期中葉の土器……80
三　縄文中期後葉の土器……93
四　縄文中期の石器と生業……99
五　縄文中期の集落……107
六　住居跡のライフヒストリー……119
第六節　縄文文化の展開―後期……（本橋恵美子）126
一　後期の遺跡……126
二　生活用具……133
三　後期集落のようす……145
第七節　縄文文化の終焉―晩期……（中沢道彦）158
一　縄文晩期という時代……158
二　縄文晩期の器……164
三　御代田町周辺の晩期遺跡……173
四　晩期の生業……181
第八節　縄文時代の暮らし……193
一　道具の用途……（堤　隆）193
二　縄文時代の食生活……（角張淳一）198
三　縄文時代の住まい……（本橋恵美子）203
四　浅間山麓の縄文集落……224
第九節　縄文時代の地域間交流……（水沢教子）232
一　縄文社会における領域と交流……232
二　類似した土器が広域に広がる理由……235
三　縄文土器の胎土分析……242
四　石材の流通……246
第十節　ドクトル・マンローと宮平遺跡……（堤　隆）253

第二編　古代

第一章　弥生時代……（小山岳夫）257
第一節　弥生文化と浅間山麓……257
一　弥生時代のあらまし……257

二　稲作の起源と伝播……258
三　金属器の導入……259
四　弥生時代の始まり―早期前……262
五　地方分立の時代―中期……265
六　争乱の時代―後期……274
七　御代田の弥生集落……288
第二節　人々の暮らし……293
一　集落・耕地の拡大……293
二　衣食住……295
三　墓からみた弥生社会……300
第二章　古墳時代……（小山岳夫）……304
第一節　古墳がつくられた時代……304
一　古墳時代のあらまし……304
二　大和中心の古墳時代前期……305
三　河内への中心移動と渡来文化―中期……311
四　古墳造りの終わり―後期……316
第二節　浅間山麓の古墳社会と文化……321
一　佐久平における古墳の変遷……321
二　集落の拡散と拡大……331
三　生　産……345
四　暮らしのようす……347
第三章　奈良・平安時代……（堤　隆）……357
第一節　律令社会と佐久……357
一　信濃国佐久郡……357
二　浅間山麓の東山道……367
三　佐久の御牧……378
四　浅間山麓の古代馬……387
五　生産と流通……391
第二節　浅間山麓の古代のムラ……394
一　住まいのようす……394
二　ムラのようす……402
三　浅間山麓の古代のムラ……411
第三節　ムラの暮らし……423
一　暮らしのようす……423
二　古代の災害……441
三　古代の寺社と信仰……446
第四節　古代社会の変貌と佐久……454
一　律令社会の変貌……454
二　武士団のおこりと佐久……457

第三編　中　世

第一章　中　世……465

第一節　木曽義仲のころの御代田……（郷道哲章）465
一　牧と荘、郷と保……465
第二節　鎌倉幕府と御代田……473
一　鎌倉幕府と佐久武士……473
二　承久の乱と御代田……475
三　人々の動きと生活……（郷道・小山）478
第三節　南北朝の内乱から室町幕府へ……482
一　南北朝の内乱と滋野一族……482
二　大塔合戦と御代田……484
三　関東の争乱と御代田……487
四　人々の往来と信仰……（郷道・小山）489
第四節　群雄割拠の中の御代田……500
一　戦国時代前夜の御代田……500
二　武田氏と佐久武士の攻防……502
三　武田氏の佐久支配と御代田……506
四　北条・徳川氏のはざまで……（郷道・小山）508
第五節　中世の文化と信仰……523
一　鎌倉文化と信仰……（大井源寿）523
二　室町文化の広がりと仏教……（小山岳夫）536
三　華麗な桃山文化……540

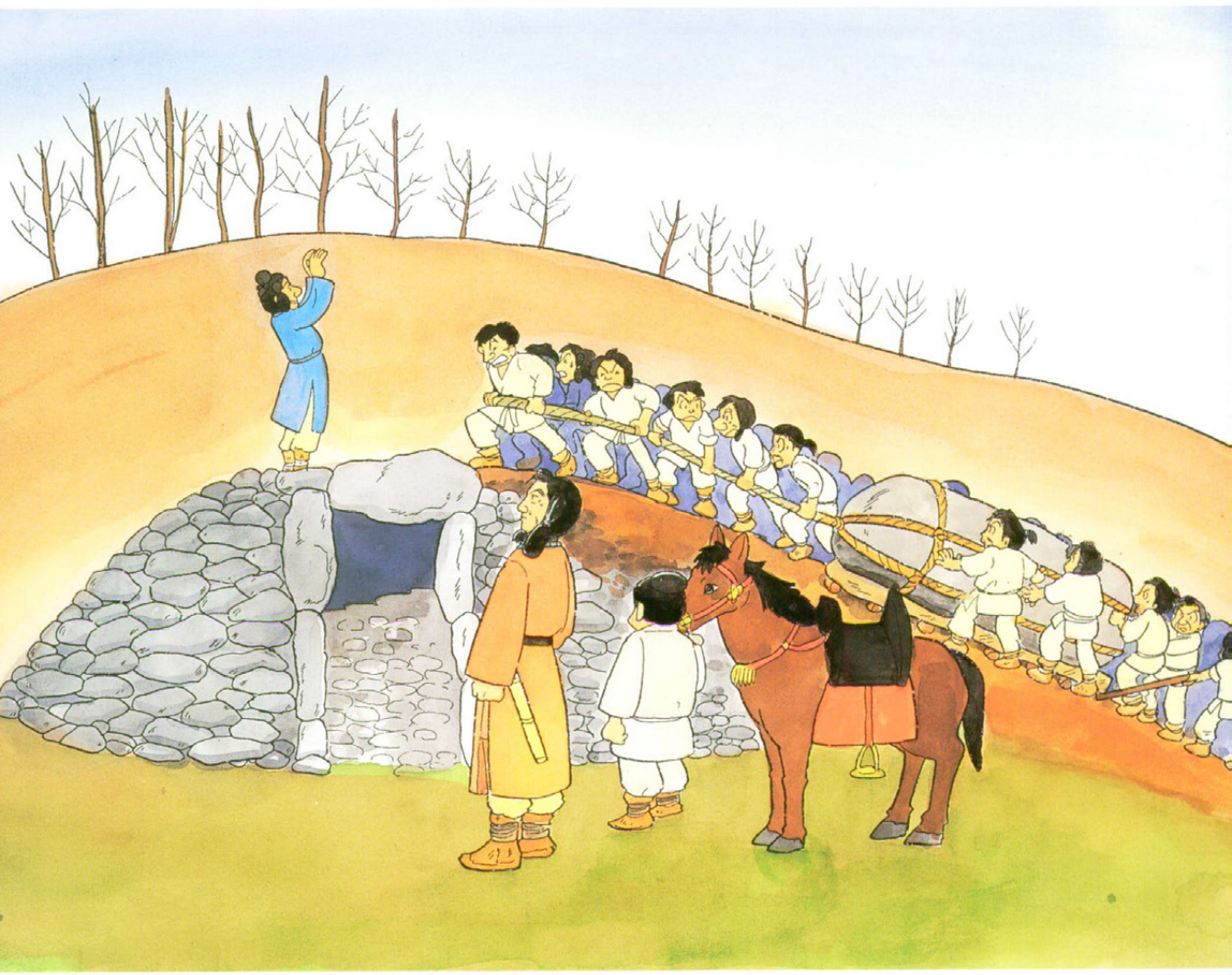
付編　御代田町の遺跡

索　引

御代田町誌『歴史編上』関係者名簿
執筆者名簿
刊行会名簿
教示者
資料提供者・機関名簿

あとがき

序章



めがね塚古墳の築造

季節は穀物の刈り入れが終わり、雪が降る前の晩秋。馬瀬口一帯の首長の墓作りに100人近くのムラ人が集まり、重さ8.2トンもの天井石を引っ張りあげている。石室上で手を振って指示をしているのは、古墳作り専門の技術者。古代牧場で飼育された馬とともに、古墳の主はムラ人の厚意を感謝の気持ちで受けとめている。

古墳時代も終わりに近い、７世紀中ごろのめがね塚１号古墳の築造風景を大胆に再現した。

序章　御代田町の原始・古代瞥見（べっけん）

一　御代田の縄文時代

長野県人はつねに海に憧れている。海の話には思わず聞き耳を立てる。それは時代を問わない。今を去ること七〇〇〇年前の縄文早期後半には沈線文土器・条痕文土器が盛行しているが、海の貝の腹縁を押引きすることでできるその文様を、当時の信州人はどのような感慨で見つめたことか。土器を搬んできた人、文様の飾りかた、さらには施文器具にまで強い好奇心を示したものと想像したい。

長野県は広い。ＪＲの「上り」でも信越線と中央西線とでは行き先は大きく異なる。佐久は東の関東地方との関係が強く、中信・南信には関西的色彩が濃くうかがわれるが、その気配はすでに縄文早期に現れている。佐久地方では押型文土器よりも、関東地方を中心とした田戸上層式土器が主体的に分布しており、貝殻腹縁で押された沈線文土器が塩野の塚田や下荒田の遺跡で見つかっている。関東寄りの傾向はこの後の時代においても見受けられ、佐久地方の地下水脈として現在にまで息づいている。

塚田や下弥堂遺跡の縄文前期初頭の住居跡や土坑から出土した土器は、砲弾型の尖底で口縁に隆帯がめぐり、胴部全面は羽状に構成された縄文でうめられている。器肉は厚い方で、頑丈で安心して使用することができる。これは広く県内に分布するが核は東信で、東海系の色彩が強い伊那谷には入っていない。若い時、関東の土器を教え込まれた筆者にとっては懐かしいものである。関東色を帯びる地下水脈はこの時期、地表に湧出した。同じ時期に伊那の中越や諏訪の阿久遺跡では、無文で薄手の尖底土器が流行している。中越式とよばれているこの東海的な土器を見慣れている者にとって、御代田町の関東的な尖底土器は異質に見える。

御代田町の大部分は浅間山の南斜面を占めている。このことで即座に連想されることは、同じ火山である八ケ岳西南斜面の諏訪郡原村と富士見町の景観である。火山に降った雨水は頂上より放射状に谷を刻み、地下に潜っては中腹に湧出して短い流れの谷を造っている。幾筋もの必従谷の間には長峯状の台地が形成されるが、長峯は途中で消え

写1　浅間山麓の御代田を鳥瞰する

ては、また下方に現れる。かくして生ずる舌状台地の縁辺は縄文集落を作る好適地で、ことに湧水を有する台地は縄文前・中期の大集落を載せている。

浅間山と八ヶ岳の西南斜面を重ねてみると、八ヶ岳の方が一回り大きいものの両者は全くの相似形で、山頂から刻されている長い沢が縄文人の大きなエリアを画している。中腹に発する湧泉周辺を集落の核に置いていることは共通しているので、このような視点から御代田の縄文文化を考えてみるのもよいだろう。

縄文研究のメッカとよばれている八ヶ岳山麓の井戸尻文化と比較をすることで御代田の縄文文化が持つ個性は浮き出してこないものか。地域が違っているのだから、土器のフェイスが異なるのは当然である。だが、生産用具の主体を占めている石器様相、文化階梯を反映しているとされる土器の構成、縄文人の心情を端的に表現している立石・埋甕・土偶・石棒などについてはどうだろう。

井戸尻のうちで中期中葉時の遺構からは、植物食摂取の優位さを示すといわれる打製石斧の出土が第一位で、ついで凹石・磨石も多い。石皿も目につく。また、罹災した藤内9号住居（井戸尻II期）にあっては打製石斧・凹石・石皿の多量出土がみられるいっぽうで、黒曜石剥片や石鏃の出土が注意された。いっぽう、御代田町川原田遺跡はどうだろう。ここでの石器組成は、打製石斧三・九㌫、石鏃二・八㌫、スクレーパー二・一㌫、石匙一・八㌫、磨石一・二㌫の順に並ぶ。打製石斧が優位な点は井戸尻と共通しているが、打製石斧一〇点を出土した住居跡は川原田の場合一軒にすぎず、平均すれば一軒に三・四点

程度である。磨石も同じで三点出土が最高である。凹石にいたっては、一軒の住居跡から一点が出土しているのみである。石皿も一点しか発見されていない。井戸尻遺跡の場合3号住居からは四三点、4号住居からは四〇点の打製石斧が出土している。つまり、石器構成においては両者は似通っているものの量においての格差は大きい。

縄文土器の中で主体を占める器形は深鉢で、煮沸機能を有しておりどんなバリエーションをとる深鉢にも火熱の痕跡はみられている。それが八ヶ岳山麓にあっては、胴回りの太さから石囲炉には掛かり得ず、中にモノを満たすと移動に困難をきたすという大型深鉢が存在し、さらには壺形・有孔鍔付形・有脚の深鉢・鉢形・大型鉢・高坏・吊手・器台といった煮沸以外の機能をもつバラエティのある土器が出現している。どの住居跡からも出土するというものではないが、一遺跡から一点くらいは発見されている。

ところが川原田遺跡では、四六軒の住居跡と多数の土坑のなかで深鉢以外の土器を出した住居は一三軒、土坑は三基である。器形は浅鉢が一三点・有脚の深鉢が五点・顔面把手の破片が一点・顔面表現のある土器が一点、蛇の造形のある把手の破片が一点、有孔鍔付土器の小破片が一点のみである。報告書にみられるのはこれだけで、有孔鍔付・壺・高坏・吊手土器・それから蛇の造形のある土器はみられていない。また、浅間山麓から八キロ離れた佐久市寄山遺跡群にあっては、中期の住居跡九〇軒より佐久在地の土器に混じって、八ヶ岳西南麓の影響を受けたとみられる土器が出土している。それにもかかわらず出土している深鉢以外の器形は、有孔鍔付二・両耳甕一・浅鉢三・有脚甕一・吊手土器二点にすぎない。顔面把手付土器はなく、デフォルメされた蛇がいる土器が一点だけある。貯蔵・供献機能をもつ器形は生活の安定による精神的余裕の所産だとされてきているので、同じ条件下にある浅間山西南斜面の塩野遺跡群で、八ヶ岳山麓同様の諸器形が出土していないからといって、それをすぐ文化の落差に求めることはできないが、両者の違いは重要であろう。

同じことは立石・埋甕施設でもいえる。八ヶ岳山麓・伊那谷・松本平では通有にみられる立石・埋甕は川原田遺跡ではみられない。寄山遺跡では各一施設存するだけである。いい得ることは、遺跡立地・石器の様相・集落規模などを勘案すれば、縄文中期の中部高地内には幾つかの地域性が認められ、井戸尻と川原田がそれぞれの地域の核であったということである。縄文文化の研究は、現在こうした地域性を描き出すところまできている。

長野県の縄文遺跡を時期別に並べると、中期に集中し、後期に入ると凋落してしまう。縄文の気候変動をみると中期後半から後期にかけてが寒の戻りで、現在よりも一・五度ほど低くなっている。縄文中期人がいかに高度な堅果採集民だったとしても、採集経済の段階に留まっている以上、気候の冷涼化は人口激減の最大要因となる。こういった解釈で信濃における縄文後期の遺跡減少を説明してきたが、しさいにうかがうと地域によっては中期末から後期にかけての遺跡がかなりみられる。その一つが千曲川流域で、敷石住居跡の発見数は多い。町内でも滝沢Ⅰや宮平遺跡で七軒ほど見つかっている。

このことを説明できる一葉の図を掲げておこう(図1)。明治二十二

年より一〇〇年間の平均的気温図で、千曲川流域は八ケ岳山麓よりも二度高い。こうした気温差の違いが人口動態にかかわっていることを強調しておきたい。

また、後期遺跡を発掘すると、まま埋葬遺構に遭遇する。墓だけを意識して発掘している訳ではないから、こうした埋葬遺構の多さは縄文社会に一大変化がおこったことを暗示すると考えるべきであろう。

二　御代田の弥生時代

御代田町には弥生後期から古墳時代初頭の三遺跡が所在する。塩野の細田遺跡・下荒田遺跡・塚田遺跡である。

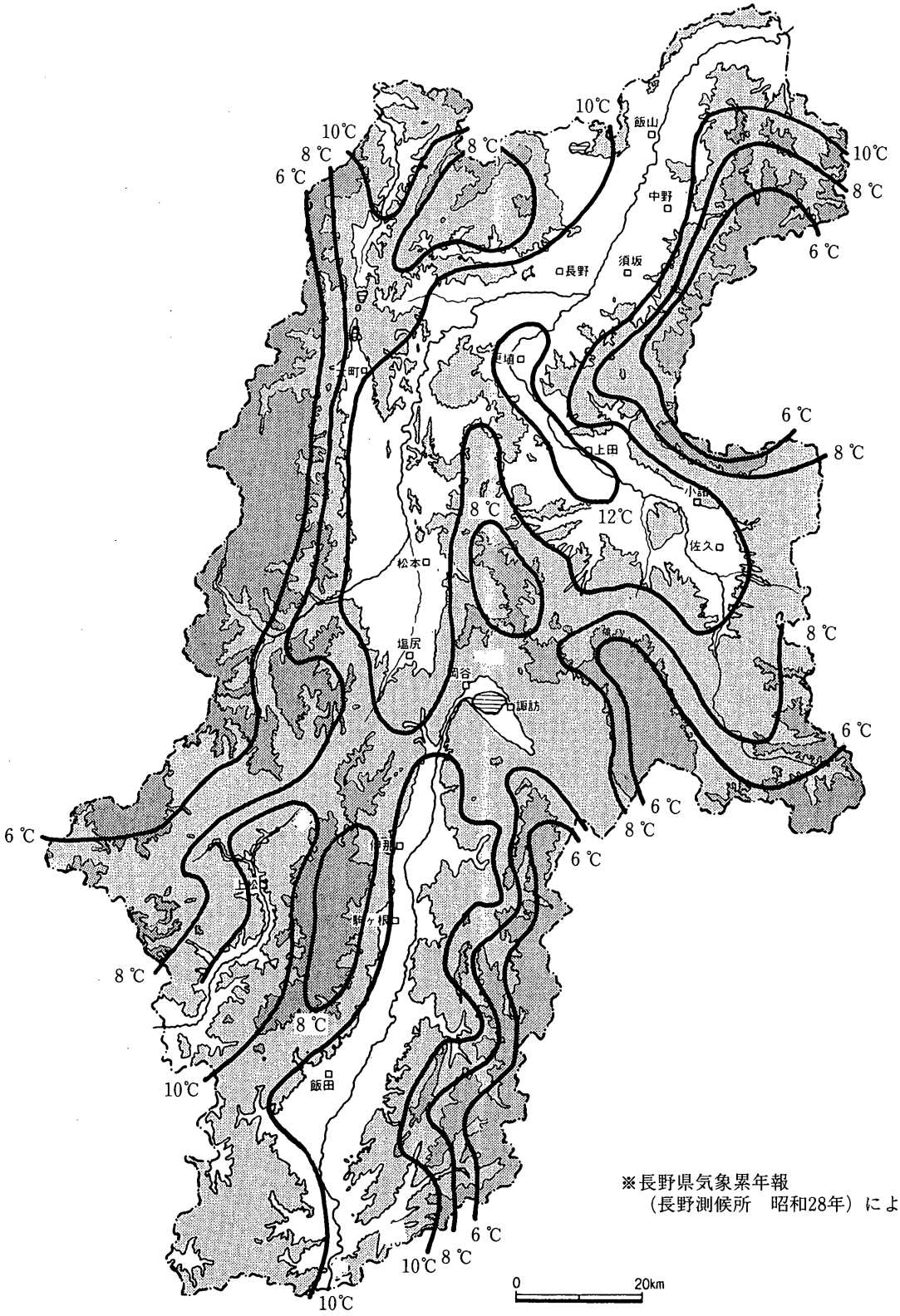
佐久平は弥生後期文化が栄えた地域の一つで、佐久市岩村田周辺が核地帯となっている。御代田町の三遺跡は岩村田から望んだ場合、水平距離で八・五㌔、標高差一〇〇㍍以上も離れた浅間山西南斜面で、平地の農民の目には山の村として映っていたことは確実である。住居や使用する什器に変わりはないが、相違は食生活とその生業で、米食と水稲農業を知っており、それに強い願望を抱いている人たちが標高八〇〇㍍地点に集落を営んでいたという点に問題がある。

律令時代、この地域には一郷が置かれているので、必従谷を流下する沢水を使っての水田経営が四〇〇年後に行なわれていたことは確かなので、その始まりを弥生時代後期にまでさかのぼらせることは許されるだろう。細田遺跡の5号住居から発見された一粒のコメは、佐久平の中心部からもたらされたものなのか、はたまた、山の田で作られたコメなのか。その判別は難しいが、後者の可能性がないとはいえない。反面、山田で穫れた米のみで一年間の生活ができるとの断言もできない。

御代田町の弥生遺跡では米以外の食料、水稲農耕以外の生業を考える必要があるだろう。直接証明するものはないが、推量できる資料は幾つかある。

この時代の竪穴住居の炉はいっぽうの梁の中央真下に設けられている。千曲川流域の炉は単なる地床炉で炉縁には何の施設もみられない。いっぽう、天竜川流域の地床炉には炉縁石が置かれ、火種を保つ火壺としての甕が埋められている。これらの施設は外縁地域の諏訪盆地や松本平の南半にもみられ、さらに佐久平にも入ってきている。弥生後期の天竜川流域にあっては石製農耕具が盛行し、畑作農業が段丘上で営まれていたが、塚田遺跡のH1号住居からは安山岩製のかなり大型な打製石斧が出土し石鍬と考えられている。畑作の形態は焼畑で主要な作物は粟と考えているが、裏付けの資料は見つかっていない。

畑作農耕民は狩猟民でもある。かれらが行なう狩猟は田畑を侵す鳥獣を駆除する受け身のそれでなく、隊を組んで遠く他国にまで行動するマタギ狩猟である。磨製石鏃が出土している。そして狩猟のほかに堅果の採集も考えなければならないだろう。ドングリを採集して水さらしし、煮沸してタンニンを除去する。磨石と石皿で磨砕する。塚田遺跡2号住居からは磨石、4号住居からは軽石製の凹石、下荒田Y2号住からは長さ一六㌢・幅九㌢の台石が発見されている。



※長野県気象累年報
（長野測候所　昭和28年）による

図1　長野県の年平均気温（明治22年～昭和27年）

三　御代田の古墳時代

御代田町内では現在のところ、前期古墳とよばれる古い古墳は未発見である。通常、前期古墳は弥生後期からの財と権力の蓄積があって築かれるのだから、弥生後期の細田遺跡や下荒田遺跡の小集落のあり方から考えれば、おそらく今後とて発見はないだろう。

浅間山山腹に現存する数基の古墳は、いずれも古墳時代終末期の築造にかかる。被葬者は在地の有力者だろうが、かれの後継者が古墳を築くにあたっては、外からの力による規制があったようである。塚田古墳群を取り上げてみると、八〇㍍四方のところに五基の古墳が築かれている。いずれも周湟をめぐらしていて墳丘径は一三～一四㍍。四基は円墳で同じ間合いをとっているが、最後に築かれた一辺一一㍍の方墳はその間に形を崩して築かれている。すなわち、かれら一族の墓域は規制を受けていた。4号墳の周湟内より馬歯と轡が出土している。古墳群の築造は七世紀に入っていて、この時期になると信濃では馬具の副葬はみられなくなる。それなのに4号墳では馬の殉殺（じゅんさつ）が見られた。小円墳に葬られていた人は、馬とかかわっていたのである。塚田古墳群の石室構造は判らないが、めがね塚1号墳の玄室は方形で、これに両袖の羨道が付く。側壁には磐石が用いられている。ここでも素環の轡が前庭部より出土している。玄室からは倒卵形鐔と単環の責金具が付いた直刀が発見された。柄頭はなかったが円頭が頭椎のはずで儀刀である。細田古墳からも柄頭のある大刀が金環・棗玉とともに出土している。以上の資料を飛び石状に並べてみると、馬を媒介として七世紀代に入り中央より儀刀を下賜された在地有力者が、その死にあたって決められた墓域に築かれた畿内色の濃い石室内蔵の円墳に葬られ、その際には愛馬の殉殺も行なわれたことがわかる。

ＪＲ信越線が通過しているあたりが、浅間山麓からの傾斜変換線となる。信越線の南側一帯が下前田原西屋敷で、標高は七六五㍍。以下南西方向に下り勾配で小海線のところで標高七〇〇㍍となる。下前田原の中の微高地が鋳師屋遺跡群で、集落の形成が始まるのは五世紀代。前田遺跡の竪穴住居内からは初期須恵器の優品が出土しており、遺跡群の北に臨んでは数基の古墳が築かれている。

その中の後原1号墳は、片袖式の横穴式石室を内蔵する円墳で、前庭部からは馬骨が発見されている。2号墳の石室は両袖式で、玄室側壁には胴張りがみられる。なお、二基とも墳麓に外護列石がめぐっている。石室の形状だけでいうならば、後原1号墳の方がめがね塚1号墳よりも先行する。今後、浅間山麓からは六世紀代にさかのぼる古墳が見つかるかもしれない。

逆な書き方になってしまったが、山麓の古墳には山腹築造の七世紀代古墳と一脈通ずるものがみられる。このことから山麓古墳を築造した集落では、農業以外の生業にも相当の比重がかけられており、加えて政治的性格もうかがわれている。遺跡群中では西端の宮ノ反地籍で、七世紀末ないし八世紀初頭と思われる館跡が発掘された。堀をめぐらした幅七〇㍍、奥行き六五㍍区画で、陸橋部に建てられた門をくぐると巨大な掘立柱建物が二棟、東西に並んでいる。中央権力の一端を背

室町時代の仁王尊（真楽寺）

めがね塚１号墳（馬瀬口）

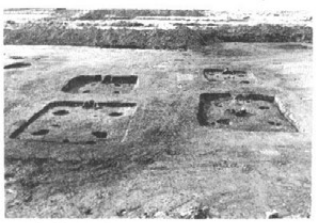
縄文中期のムラ
（川原田遺跡）

弥生後期の住居
（細田遺跡）

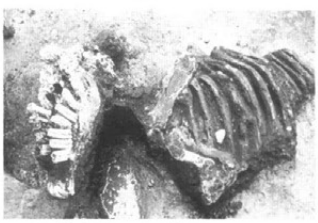
縄文中・後期のムラ（宮平遺跡）

縄文中期の敷石住居
（滝沢遺跡）

古墳時代初頭の住居
（塚田遺跡）



奈良時代のムラ（前田遺跡）



平安時代の埋葬馬
（野火付遺跡）

図２　御代田町の遺跡

負っている郷長クラスの居館と目されている。

四　御代田の奈良・平安時代

全国の郷名が掲載されている『倭名抄』の成立は承平年間（九三一～九三七）だが、この種の作業は個人のなしうるものでなく、民部省資料の転載と推察されている。原本は九世紀前半に編まれた『民部省図帳』とか『国郡図帳』だろう。佐久郡には八つの郷制の郷があり、その中の小沼郷は御代田町一帯に比定されている。郷名は真楽寺境内の湧泉に依っているが、主体は山麓に接する下前田原にあった可能性がある。郷の成立の要因には南方低地に展開する水田可耕地の広さや、駅家や官牧の存在に加えて、古墳時代から続いている歴史の長さを挙げておきたい。

延長五年に選進された『延喜式・兵部省』に、諸国駅伝馬の条がある。畿内寄りの駅家より起筆しているので、それをたどれば「延喜の官道」は復原できるが、二二五年前に施行された令制の道も同コースをたどっていたか、となると信濃の場合は即答できかねる。八世紀の九〇年代に国府は筑摩郡に移庁しているので、延喜の官道コースは筑摩郡を経由している。だが、それ以前のコースについての史料はないし、移庁前の国府所在地もわかっていない。ただ、碓氷坂を介して上野国坂本駅と対する長倉駅の位置だけは、駅制施行時より変わってはいないはずである。

軽井沢町の大部分と御代田町の一部は、天仁元（一一〇八）年の噴火による浅間山の火砕流で被覆されているので、考古資料による位置関係は、被害を免れた地域からの推察によらざるを得ない。地形や気候条件からすれば、駅家を軽井沢町内に比定することは難しいといわれている。

その位置は千曲川右岸の山麓線に沿って走る道と、佐久平東縁の山麓を南北に走る線とがクロスするところ、かたわらに官牧があり、古墳時代よりの歴史がある鋳師屋遺跡群と重なる地点だろう。厩牧令によれば「駅馬は中中戸をして養飼せしめよ」とあるので相当な規模の集落が必要である。鋳師屋遺跡群で発掘された竪穴住居は四〇〇軒、掘立柱建物は側柱建物が主体で、なかに廂（ひさし）付建物が一四棟、倉庫と思われる総柱の建物三〇軒が存在している。巡方などの帯金具、円面硯など特殊遺物が出土していて下級官人の存在が思われる。神功開宝・隆平永宝なども発見されている。

文献資料によると、天慶の乱がおこるや碓氷関は固められ、将門誅殺二か月後に解除されている。国境である山嶺には幾つもの峠がある。峠を越えて侵攻してくる将門の軍勢を迎撃するには、浅間山麓と湯川がもっとも接近する隘路を固めるのが最善の方策である。関の位置が軽井沢町の追分地籍だとすると、長倉駅の位置はその後方に擬せられる。もっとも、その時、長倉駅は機能していなければならない。鋳師屋遺跡群調査の所見によれば十世紀前半、遺跡群は集落としての体をなしてはいなかった。だが、浅間山西南斜面には十一世紀まで小集落の存在が確認されているので、未調査地域に集落は存在しているのではなかろうか。または、より西方に比定されている郡家所在郷が、駅

の業務を代行していたと見るべきか。

小沼郷にかかわるもう一つの施設は塩野の御牧である。御牧の成立は八世紀の六〇年代だが、信濃十六御牧の大半は古墳時代に始まる私牧に起源をもつ。塩野牧も同様で、古墳後期に馬を牧飼することで在地有力者は大和政権の直接掌握を受けていた。牧の規模の小さなことも塩野牧成立の古さを示している。これらの私牧が八世紀後半に入って御牧に編入される。

毎年、五歳駒を献上するには常時一〇〇疋を養飼せねばならず、管理には長帳各一、牧子二、その下に多勢の馬戸を必要とする。小沼郷の郷民は農業を営むほかに交通や牧馬業務に携わっていた。牧は一疋あたりに二町歩もの放牧場と、雌雄別・年齢別の繋飼場（つなぎかいば）とからなる。繋飼場は一見棚田を思わせる施設で、松本市中山埴原の古屋敷と千石地籍にあるそれは長野県史跡に指定されている。御代田町にあっては水田の営み得ない標高一〇〇〇㍍以上も高処の浅間山腹に同様な遺構が発見されている。これが塩野山遺跡で、土手は「駒飼の土堤」とよばれており、今後繋飼場を予測しての調査がのぞまれる。塩野山遺跡の下方、標高九二〇㍍地点に位置する広畑遺跡からは九世紀末の竪穴住居が発見され、青銅鈴二点が出土している。鈴の経は二・七㌢で馬鈴に擬してもおかしくない。

さて、浅間山斜面中腹に営まれていた川原田・城之腰・下荒田遺跡の報告書からは、縄文遺跡に平安期集落の重なっている様がうかがえる。このあたりの集落は九世紀後半から十世紀前半、なかには十一世紀にまで下るものもある。集落規模はさほど大きくはなく、核となる住居に規模・構造の劣る住居が数件ともなうという形をとっている。遺物内容は豊かで、核的住居からは灰釉陶器の長頸瓶や鉄製品・砥石が見つかっている。鉄製品の中では紡錘車の多いのが目立つ。川原田遺跡の4号住居は狭く、主柱穴もない竪穴住居だが、ここからは火熨斗（ひのし）一点が出土している。かれらの生業については、沢水を使っての棚田経営もなされたことだろうが、松本平の八伏山麓に展開している同時期の村落様相なども勘案して、信濃布の原料であるアオソ栽培も考えてみたい。紡錘車は績まれた繊維に撚りをかけ、火熨斗は織りあげた信濃布への最後の仕上げに使われたのではないだろうか。

五　御代田の中世

平安時代、天仁元（一一〇八）年、御代田町域をおそった浅間山の火砕流は、町域の約半分を覆いつくし、一面は焼け野原と化した。当時存在した塩野の牧や、それにかかわる多くの集落も壊滅的な被害を受けたに違いない。このため、御代田町域の鎌倉から室町時代までの歴史は、被災しなかった地域に点々と残っているに過ぎない。復活がはたされるのは、戦国時代に入ってからである。

鎌倉時代初め、町域の北部「塩野牧」は牧としての機能が希薄になり、単に「塩野」と記されるようになった。火砕流の被災が大きく影響したものと考えられる。町域南部小田井は大井荘に含まれていた。

天仁元年の被災をかろうじて免れた真楽寺周辺には建久四（一一九三）年源頼朝が浅間山北麓（現長野原町・鎌原村）で行なった巻狩り

にまつわる伝説が残された。その伝承地のひとつ、城之腰遺跡では鎌倉時代の小集落が発見されたことにより、当地に伝承が残る由来のあったことが証明された。今後、真楽寺周辺の各地で、鎌倉時代の遺構が発見されるかもしれない。

中世歌謡の一つ『宴曲抄』中の「善光寺修行」では、碓氷峠から善光寺にいたる道中に、御代田町豊昇の高根社付近を通過していたと考えられる地名が登場した。

室町時代にいたると、京都から奥羽への幹線道が御代田町域を通過し、さまざまな人物が往来した。その一人が上州世良田の仏師刑部公鏡鑁で、応永二（一三九五）年真楽寺に滞在、奉納する仁王像を三か月かけて製作した。仁王像の製作費は、御代田に限らず、佐久広域の武士（北佐久の盟主大井氏と考えられる人名もみられるという）・郷・農民が結集して捻出した。当時の佐久の人々が、真楽寺をいかに厚く信仰していたかがわかる。

室町時代の町域南部は、八条院の荘園大井荘の直営田で、野火付遺跡では、そことのかかわりが考えられるムラ跡が発見された。また、前藤部遺跡では、時代が下った十五世紀のムラ跡が見つかった。前藤部のムラは十五世紀前半には北佐久の盟主大井氏、後半には、国人平尾氏の傘下にあった可能性が高いという。野火付、前藤部どちらのムラにも共通するのは、住居が竪穴の土間式で、板敷き（フローリング）や畳の上での生活などしていなかったということである。当時佐久地方の庶民はまだ、かなり質素な生活をしていたことがうかがえる。

応仁の乱以降、戦乱の世の佐久は、大井氏の没落、国人層の成長にともない、群雄割拠の様相を呈した。佐久地方に乱立した多くの城館はこのころに築城された。天文一二（一五四三）年に、武田晴信は佐久侵略を始め、豊昇の長倉猿助の宮平城、小田井又六郎の小田井城などはこれに備えて築城された。小田井城のような大きな城が造られた背景には、平安時代の火砕流災害からようやく立ち直った、御代田町域の姿が彷彿される。

天文十六年には佐久の志賀氏と武田方の衝突となった。有名な小田井原合戦である。この合戦の主戦場は小田井周辺であった。

武田支配の後、中世末期の佐久は織田・北条・徳川の草刈り場となった。その状況は御代田とて変わりなかったものと思われる。

以上、浅間山麓に育まれた、縄文時代から中世までの歴史を瞥見した。

第一編 原始

焼町土器を作る

今から4500年前、浅間南麓に登場した焼町土器は、縄文土器工芸の極致ともいえる芸術性の高さをみせている。土器の文様や形は、集団や地域によって独自性がみられる。多くの先住民の場合、土器作りは女性の仕事である。塩野川原田遺跡では多くの焼町土器が発掘され、その素材となる粘土も見つかっている。

縄文の川原田ムラでの焼町土器作りの一コマを原風景にしてみた。

原始の概要

本編「原始」は、旧石器時代と縄文時代の二つの石器時代、約三万年前から二七〇〇年前までの狩猟採集社会をあつかった。

日本の旧石器時代は移動生活による狩猟採集の時代で、現在約六〇万年前までさかのぼることがわかっている。県内および佐久地方で発見されている旧石器時代遺跡は、今のところ三万年前までの後期旧石器時代の遺跡である。約二万五〇〇〇年前以降から一万年前までは浅間山の活動がきわめて活発な時期であり、浅間山麓は分厚い泥流や軽石流などに覆われた。それに埋もれたのか、火山活動の激しい浅間山麓に旧石器人が住まなかったのか、御代田からは旧石器時代の遺跡は発見されていない。

縄文時代は約一万二〇〇〇年前から始まり約一万年間続いており、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の五時期に時期区分がなされている。縄文草創期に土器や弓矢が発明され、移動生活から定住生活へと居住スタイルが変化していった。また、最近では狩猟採集だけでなく、簡単な栽培が行なわれていたこともわかってきた。

長野県は豊かな山の幸に恵まれたことなどから、縄文時代の集落遺跡が集中する地域である。とくに八ケ岳山麓と浅間山麓などではそれぞれ独自な文化が花開いた。御代田では草創期から晩期まですべての時期の遺跡があるが、とくに前期の塚田式土器や中期の焼町（やけまち）土器などはオリジナリティーあふれる土器として注目されている。後期には千曲川流域に敷石住居が目立って作られた。

年代	時代	時期	日本の主なできごと	御代田・佐久地方のできごと
六〇万年前	旧石器時代	前期	◆宮城県上高森に日本最古の人類（原人）が居住する	
一三万年前 三万年前		中期	◆岩手県ひようたん穴洞穴に人類が居住する	
一万二〇〇〇年前		後期	◆黒曜石の利用が始まる ◆ナイフ形石器が作られる ◆尖頭器が作られる ◆細石刃がつくられる	◆佐久市立科F遺跡に人が住む ◆浅間山が盛んに噴火を繰り返す ◆野辺山矢出川遺跡に人が住む
一万年前	縄文時代	草創期	◆土器の発明 ◆弓矢の発明 ◆岩陰での居住	◆塩野川原田遺跡で有舌尖頭器による狩り ◆塩野東荒神遺跡で微隆起線文土器の使用 ◆北相木村栃原岩陰遺跡に人が住む
六〇〇〇年前		早期	◆竪穴住居の構築 ◆尖底土器の使用	◆塩野川原田遺跡で押型文土器の使用 ◆塩野塚田遺跡で鵜ヶ島台式土器の使用
五〇〇〇年前		前期	◆小集落の形成 ◆平底土器の使用 ◆気候温暖期で海面が上昇、海岸線が内陸に入り込む ◆定住集落の定着	◆塩野下弥堂遺跡に住居数軒のムラ形成 ◆塩野塚田遺跡に住居数軒のムラ形成 ◆塩野城之腰遺跡に住居数軒のムラ形成
四〇〇〇年前		中期	◆関東中部地方の人口が激増 ◆豪華な装飾が土器を飾るようになり、縄文文化も最高潮に達する ◆打製石斧の多用 ◆敷石住居が出現する	◆滝沢遺跡に住居が作られる ◆川原田遺跡に住居のまとまったムラができ焼町土器が作られる ◆城之腰遺跡に住居数軒のムラ形成 ◆豊昇宮平遺跡に敷石住居が作られる
三〇〇〇年前		後期	◆気候の寒冷化によって中部地方の人口が激減 ◆配石遺構などが作られ、宗教的な遺物である土偶・石剣も多く見られる	◆滝沢遺跡に住居と墓が作られる ◆宮平遺跡に石棺墓が作られる
二三〇〇年前		晩期	◆集落が河川近くに立地する ◆抜歯の風習がさかんになる ◆西日本より稲作が伝わる	◆宮平遺跡にムラができる ◆馬瀬口居場遺跡付近にムラ？ができる ◆小諸市氷遺跡からモミ痕のある土器発見

第一章　旧石器時代

第一節　旧石器時代のあらまし

一　進化と文化の歴史

旧石器時代は、人間の祖先たちの活躍したもっとも古い時代で、今からおよそ四〇〇万年以上前から一万年前までの時代を総称する。この時代の歴史については、進化の歴史と文化の歴史という観点から眺めることができる。

進化の歴史とは、人間が生物としてどのように発生し、どのような経緯で進化をとげたのかという歩みである。もっぱら人類学の範囲で語られる歴史であり、研究対象は化石骨などである。

文化の歴史は、人間の作った石器や骨角器などの道具を分析することで明らかにされる歴史で研究対象は人工品である。

進化の歴史を明らかにする方法と、文化の歴史を明らかにする方法は異なるので、つぎにそれぞれの内容を明らかにしておくことにする。

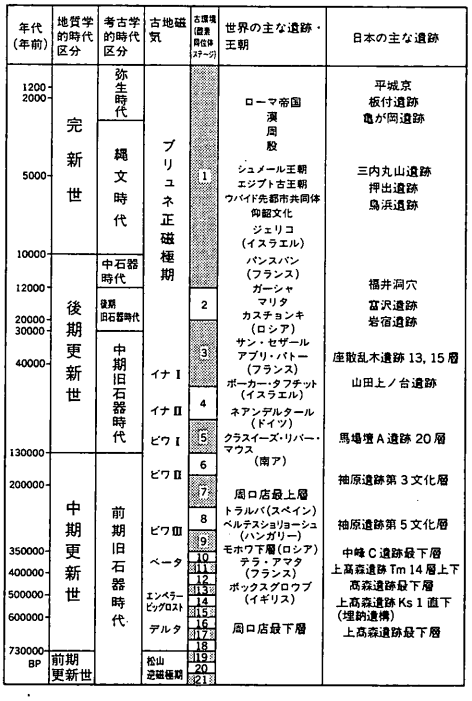


図１　日本を中心にした主な遺跡の年表
（『科学』67－５より）

進化の歴史

進化の歴史とは生物の身体的な変化の歴史をいう。人類に限らず生物は多種多様に進化する。進化は進化する生物が意図しているわけではなく、自然がその進化を決めている。そして生き残るか絶滅するかも自然が決定する。したがって進化の歴史を語るには、われわれがその生物の特徴をそのまま記述し分類することになる。

人類の進化をたどるための化石人骨の研究からは、過去に生存した人類の肉体や脳の発達などが明らかにされている。

これまで人類の進化については猿人から原人へ、そして旧人から新人へという一系列のわかりやすいモデルが提示されてきた。しかし最近の研究では人類の家系図はそう単純に語れないことがわかっている（図2）。少しくわしく説明すると、現代人が今の地球に広がったモデルには、二種類あることになる。一つは四〇〇万年前にアファール猿人が人類の祖先として登場してから、約二〇〇万年前くらいに各地域に旅立ち、それぞれの地域で進化をとげたとする「他地域進化説」。もう一つは二〇万年前のアフリカに現代人の直接的な祖先となる新人が現れて、かれらが世界各地に拡散したという「アフリカ起源説」である。

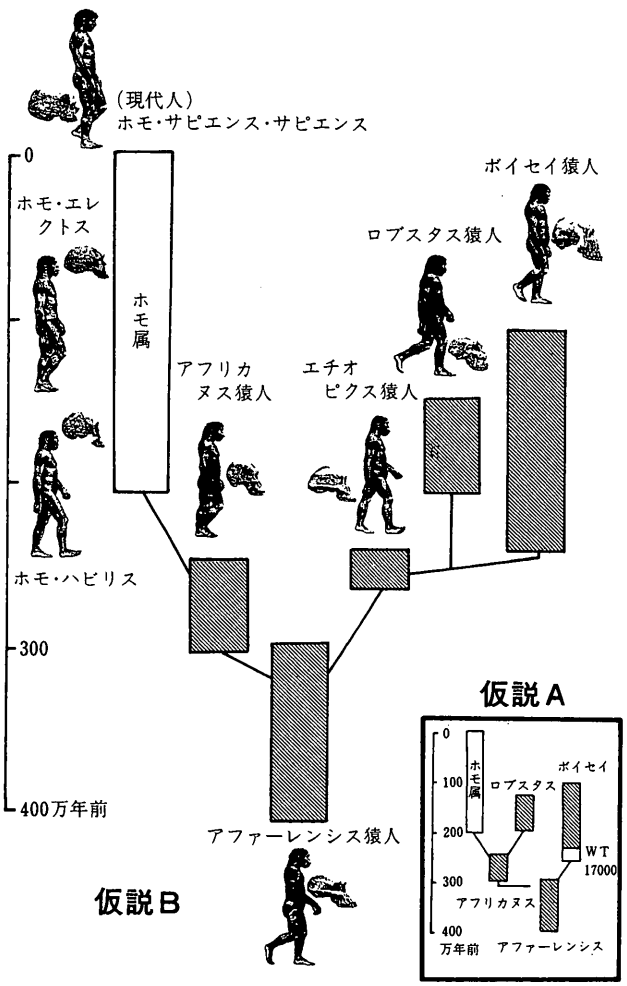


図２　人類進化に関する仮説

文化の歴史

文化の歴史は人工品の分析で明らかにされる。その方法は化石人骨の分析のような形質人類学的な方法とは違う。その理由は、人工品が製作者の意志のもとに作られているからである。

旧石器時代の人工品は、石器・木器・骨器・土製品・皮革製品など多種多様であったと想像される。実際にはヨーロッパでは石器のほかに前記の遺物が発見されることがある。日本列島では残念ながら酸性土壌のために石器以外はあまり残らない。したがってここでは石器の作られ方をおもに取り上げる。

しかし、石器の作られ方を記述することで文化を記述することになるのだろうか。石器以外にも作られたモノがあるのに、石器だけでは片寄った記述になってしまうのではないだろうか。少し専門的になるが、この点を明らかにしておかねばならない。

石器は石を打ち欠いて刃をつけた道具である。石を欠くには工夫と練習が必要である。石という素材は石で打ち欠くと石片が剝がれる。剝がれた石片を剝片（はくへん）、剝がれる本体を石核（せきかく）という。また石核を打ち欠く石をハンマーストーンという。きれいに剝片を剝がすには、ハンマーを石核の角にあてること、そしてハンマーのあたる角度が重要である。この条件をみたせば鋭い刃をもつきれいな剝片が簡単に取れる（図3）。条件を満たさないと剝片は取れない。そして石器づくりには、指導者がいた。指導者と同じように練習すればだれでも石器づくりは可能である。つまり石器づくりは、文化の中で学習されるということである。この点が文化を研究するうえでの大前提であり、きわめて重要なことである。

石は条件さえ整えば割れる、その逆はないとしたら石の道具の形はひとつに決まるのだろうか。実は石器の形は文化によって多様である。その理由を以下に述べる。

自然石からそのまま剝離した剝片と、石をさらに打ち欠いて剝離した剝片は、形も刃先の鋭さも違う。きれいな剝片を作るには、きれいな剝片を作る石核を、最初に作らなければならない。自然石から石核を作ること、これが石器の素材の形を決める重要な要素なのである。このように石核を準備すれば、目指す形の剝片がとれる。異なる形態の石核を準備することで、分厚い剝片・薄い剝片・大きな剝片・小さな剝片・刃の厚い剝片・刃の鋭い剝片などを自由自在に作ることができる。

そして、こうして作られた剝片にもう一度手を加えると、かなり立派な石器ができる。意図された剝片にもう一度手を加えることを二次

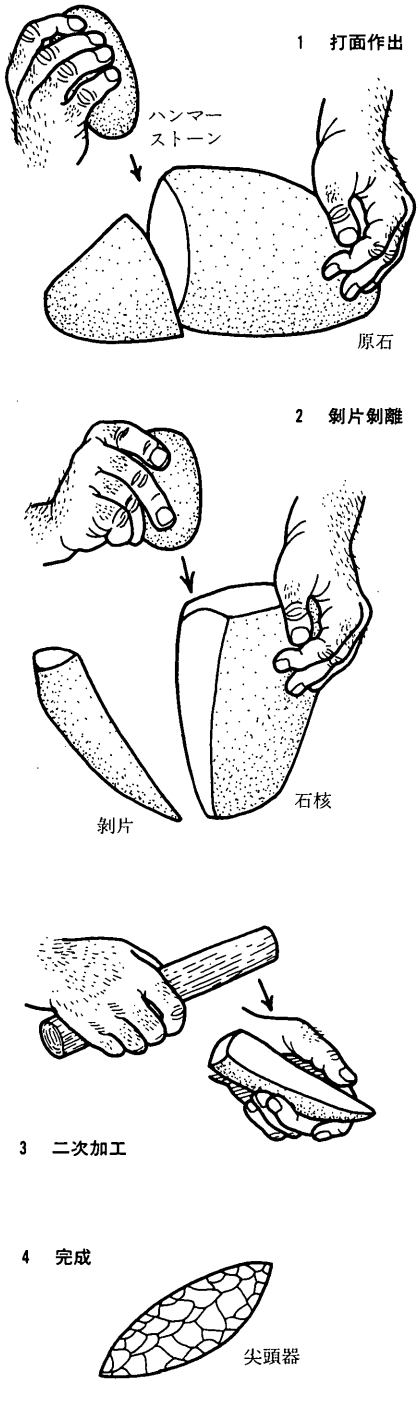


図3　石器製作の手順
原石から素材(剝片)をとり、二次加工を加えて、目的の石器が完成する

加工という。二次加工によって、剥片はさらに変形されて、何種類もの刃や形が作られることになる。ナイフ形石器や尖頭器・細石刃・削器・掻器・彫刻刀形石器などである。

このように石器は、あらかじめ決められた石核を作り、そこから決まった剥片をとり、その剥片にもう一度手を加えれば、立派な石器が作られるのである。

以上をまとめると、石を割る条件は普遍的な石器製作の条件だが、種類の違う石核を準備したり、数種類の二次加工を自由自在にすることで、形・大きさ・刃の違う石器を作ることができる。さらに説明を加えると、同じ動作をしなければ同じ石器はできないが、動作を変えることで石器は多様に作ることができる。そして動作の種類は文化の中で決まっており、石を割るという技術が、目指すモノを作るという技法で総合されているのが、人間の石器づくりの姿なのである。

石器は人間が作り出す。だからその作り方は文化のなかできまっている。ちょうど言語に文法があるのと同じように、石器は文化のなかで文法をもっている。考古学は研究対象を石器と限定するので、石器文法の構造を石器文化と定義する。このように対象を限定し、その製作構造を記述することで、石器からみた文化のあらましを知ることができる。

なお、東京都立大の小野昭教授によれば骨器の製作構造と石器の製作構造は同型であるという。したがって日本のように遺跡に骨器が残されていなくても石器の製作構造を明らかにすれば、骨器の範囲にまで対象を延長することができるようである。

旧石器時代は、石器の製作技法の記述によって長い年月を一覧することができるのである。

人類進化と石器文化の歴史　人類の進化は肉体と脳の進化である。初期の人類と進化した人類では、その肉体と脳構造が違う。したがって作られる道具の製作構造もその種類も違う。わたしたちの基準では推し量れない石器の製作技法が、古い形質の人類の石器製作に現れている。これから明らかにされなければならないことが多いが、ここではその石器文化について素描してみる。

猿人たちは親指の短い人類である。この肉体的特徴は石器づくりに大きな影響がある。親指が短いと、手にハンマーストーンをしっかりつかめない。また石核もしっかりつかめない。そこでハンマーストーンを垂直に打ち下ろす単純な動作しかできない。これでは剥片を剥がすこともままならない。石核を準備することはもちろん不可能である。石器づくりの技法の精緻化と人類の親指の進化は深い関係にある。日本列島にはまだこの時代の遺跡は発見されていない。

猿人から原人の段階になると、ハンマーストーンを持ち素材の石を自由自在に打ち欠くことができるようになる。日本列島でも宮城県の上高森遺跡で発見された六〇万年前の石器は、きれいに両面加工された石器である(図4)。この石器から原人がすでに形をイメージしながら石器づくりをしていたことがわかる。原人はアジアにも生息し、すでに完全な人類であった。しかし、その石器の製作技法の解明はこれからである。近い将来、日本の原人の石器文化が明らかにされること

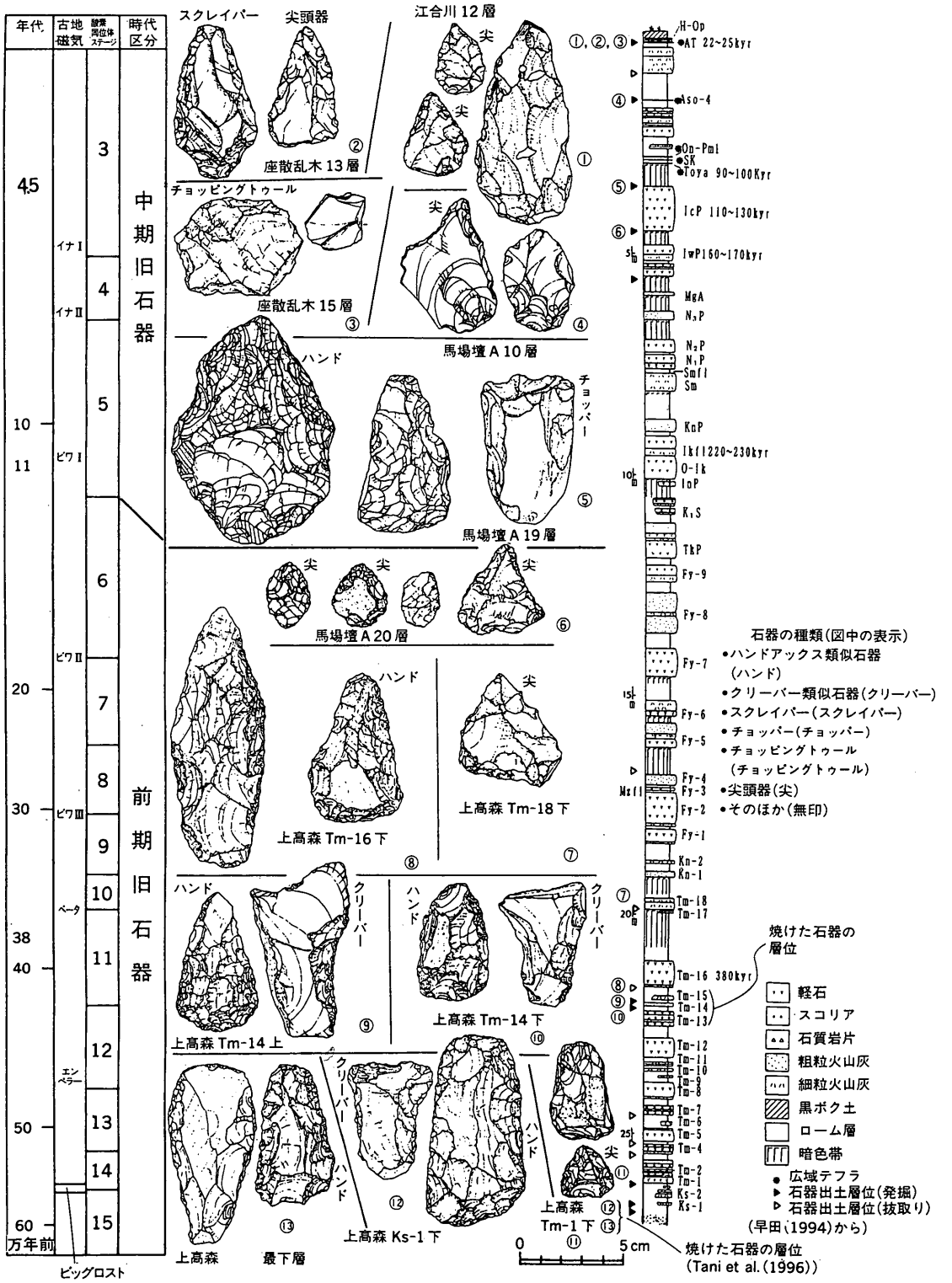


図４　前期・中期旧石器編年図（『科学』67－５より）

だろう。この猿人と原人の時代を前期旧石器時代という。

旧人段階の人類は、石核を準備し、多種類の企画された剝片石器を製作した。石器の形も意識的に尖らせた石器や鈍い刃、鋭い刃をつけた石器などがあり、わたしたちにもその製作の意図が少しは納得のいく形の石器がでてくる。この石器類は二〇万年前から約三万年くらい前の遺跡で、日本列島でも少しずつ見つかっている。長野県でも中野

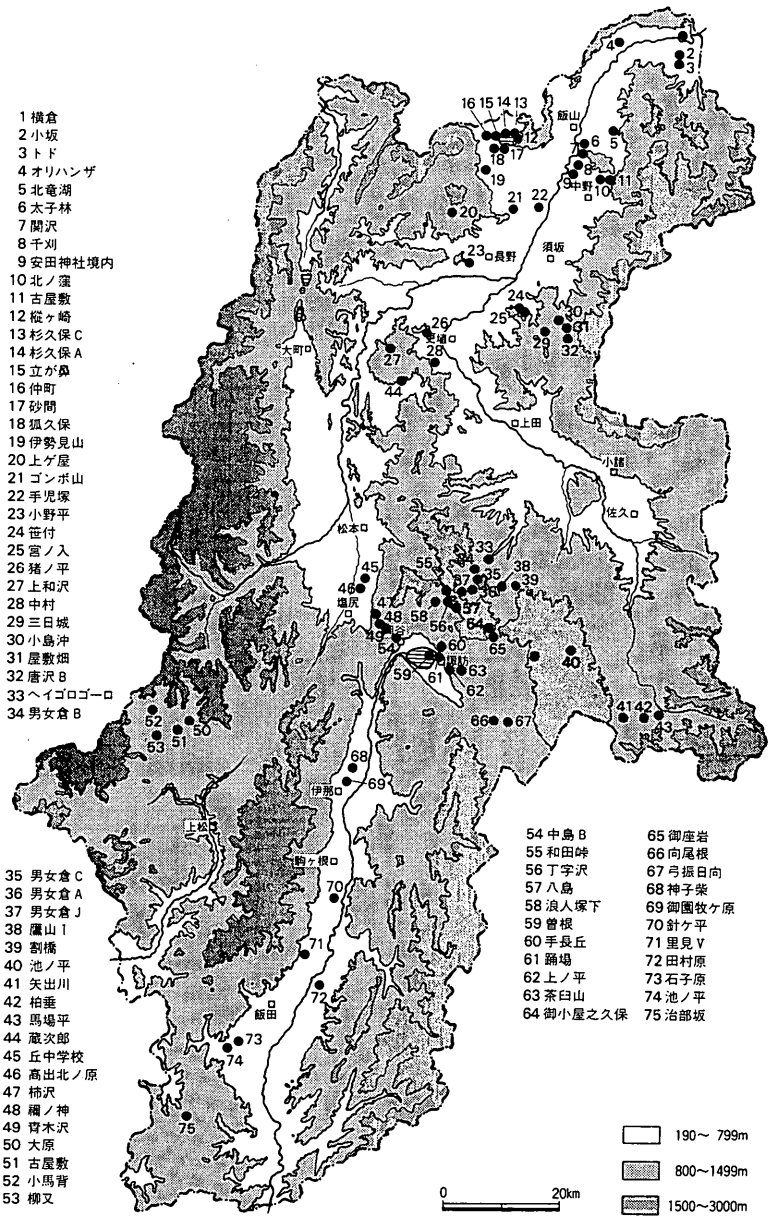


図５　長野県内の主な旧石器時代遺跡（『図説長野の歴史』より）

すようになる。この時代を後期旧石器時代という。長野県内では、この時代の遺跡が国内の各地域に比べかなり数多く見つかっている（図５）。

佐久地方の後期旧石器時代の遺跡としては、池ノ平遺跡（八千穂村）・立科Ｆ遺跡（佐久市）・柏垂（かしわだれ）遺跡（川上村）・矢出川（やでかわ）遺跡（南牧村）などが知られている。

市沢田鍋土（さわだなべつち）遺跡などの遺跡が発見された。この時代を中期旧石器時代という。

日本列島では新人（ホモ・サピエンス・サピエンス）段階の遺跡がもっとも多い。三万年前から約一万年くらい前までの新人の残した遺跡は、全国で五〇〇〇か所以上も発見されている。新人はわれわれと同じ肉体と脳構造をもつ人類である。すでに大脳皮質は新皮におおわれ、人類の特徴であるイメージを駆使する能力をもっている。石器づくりもいっそう複雑になり、狭い地域に異なる文化伝統を残

第二節　佐久地方の旧石器文化

旧石器時代の歴史はいわば匿名（とくめい）の歴史である。石器の製作技法を石器文化といいかえて記述しているので、広い範囲の地域と長い時間の変遷の記述なしではその歴史は語れない。幸い県内には全国でも旧石器時代の遺跡が多いので、多くの遺跡を引用することができるが、かならずしもこの地域だけの遺跡だけでなく、他地域の遺跡の説明も適宜加えることにする。日本列島の全体の歴史のなかで、私たちの郷土の遺跡がどのような重要性をもっているのかについて、時期を追ってみてみることにしたい。

一　後期旧石器時代の展開

三万年前の遺跡　後期旧石器時代は新人の時代である。この時代の重要課題は、どのようにして列島に後期旧石器文化が花開いたのかを解明することである。この時期の日本列島には大きくわけて三種類の石器の作り方があり、それぞれその中心の地域が異なることがわかってきた。

東北から関東・甲信越に広がる頁岩（けつがん）製の縦長剝片のナイフ形石器、本州・九州にひろがる黒曜石製の台形様石器（だいけいよう）、そして前記二者の地域に割り込むように、近畿・瀬戸内地方にひろがるサヌカイト製の横長剝片のナイフ形石器である。この三者はそれぞれ作り方も良く利用される石材の材質も違う。また興味あることにそれぞれの石器の特徴をもちあわせた石器（型式的雑種）が発見されている。

この三種類の石器づくりと地域の差をどのように解釈するのかが、今後の課題であるが、ここに二つの説を紹介しておく。

① 現在もっとも有力な説で、縦長剝片ナイフ形石器と台形様石器は、同じ文化のなかの作り分けられた石器であり、近畿・瀬戸内地方の横長ナイフ形石器とは違う文化伝統という説である。この説ではすでに三万年前に列島の文化に地域性があることを語っている。さらに、台形様石器とナイフ形石器が作り分けられる石器製作構造は、中期旧石器時代にみられ、中期旧石器時代から連続的に人類進化が列島内でおきたという説でもある。

② 石器づくりはそれぞれ異なる文化伝統の所産であるという説である。この三つのうち、台形様石器の文化がもっとも古く、そこに近畿地方に横長剝片文化が南方の大陸方面から渡来し、さらに相ついで北方の大陸方面から縦長剝片文化が渡来したという説である。

この二つの説はこれからの石器の分析によって明らかにされなければならない重要課題である。

佐久地方や長野県内には、この時代を研究するのにきわめて貴重な

遺跡が発見されている。これから紹介する佐久市立科Ｆ遺跡、同市八風山遺跡群、県内では野尻湖遺跡群の日向林Ｂ遺跡、諏訪市茶臼山遺跡、原村弓振日向遺跡などである。

立科Ｆ遺跡と八風山遺跡群　御代田町の南の佐久市前山で約三万年前の石器が発掘された。この遺跡が立科Ｆ遺跡である。石器の材質は和田峠の黒曜石がほとんどである。

立科Ｆ遺跡からは、鋭く割られた黒曜石の剥片に微細な加工で形態を整えた石器（台形様石器）、剥片の一部を急角度の加工で尖らせた石器（石錐）などが出土した（図６）。ここには石刃とよばれる縦長の剥片を剥離する技術はみられない。

いっぽう、御代田に接する八風山の付近で同じくらい古い遺跡が発掘された。この遺跡では縦に長く形態の整った石刃と、石刃の一部に刃潰し加工をした石器（縦長のナイフ形石器）が見つかった（図６）。材質はいずれも八風山のガラス質安山岩である。

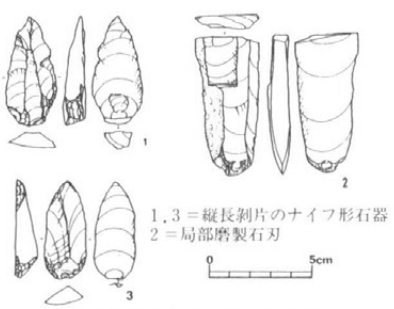
佐久地方で発見された二つの遺跡では石器の作り方も、その材質もまったく共通点をもたない。いっぽう、野尻湖遺跡群では、台形様石器とナイフ形石器の型式的雑種が発見されている。

さて、石器製作から少し離れて石器の使われ方も興味のある問題である。立科Ｆ遺跡では、石器の刃を顕微鏡で観察して、その刃こぼれのようすがくわしく研究された。出土した二一一点の人工品（石器）のうち三二点に対象物のわかる使用痕が観察できたのである。二七点が乾燥した皮を切るときに付く傷で、五点が皮や木を引っかくときにできる傷という結果がでた。立科Ｆ遺跡では、動物の皮の加工が行なわれていたことがわかったのである。立科Ｆ遺跡の石器はモノをつくる道具であったようだ。

八風山遺跡群と立科Ｆ遺跡の石器の違いは、さきの重要な問題点として述べたように、文化伝統の差なのか、同一文化の石器の作り分けなのかが今後の問題として残されている。

写１　八風山遺跡群の調査風景（『佐久市志』より）

立科下遺跡（佐久市）の台形様石器



八風山遺跡群（佐久市）の二万数千年前の石器

図６　佐久地方最古の石器

後期旧石器時代の開花　今から二万五〇〇〇年から一万六〇〇〇年前は、後期旧石器時代が開花した時期である。この時代は石刃技法と瀬戸内技法とよばれる技法で作られるナイフ形石器の時代である。台形様石器は二万年代後半にはいると、急速にその姿を消してしまう。そして東日本ではもっぱら石刃を利用した道具づくりがさかんになる。近畿・瀬戸内地方ではサヌカイトを利用した横長剝片文化が隆盛をきわめるようになる。この時期は、それぞれの地方で石器づくりがどのように変化したのかという課題があり、そして石刃文化と横長剝片文化が時期ごとにどのような関係を保っていたのかが問題にされている。

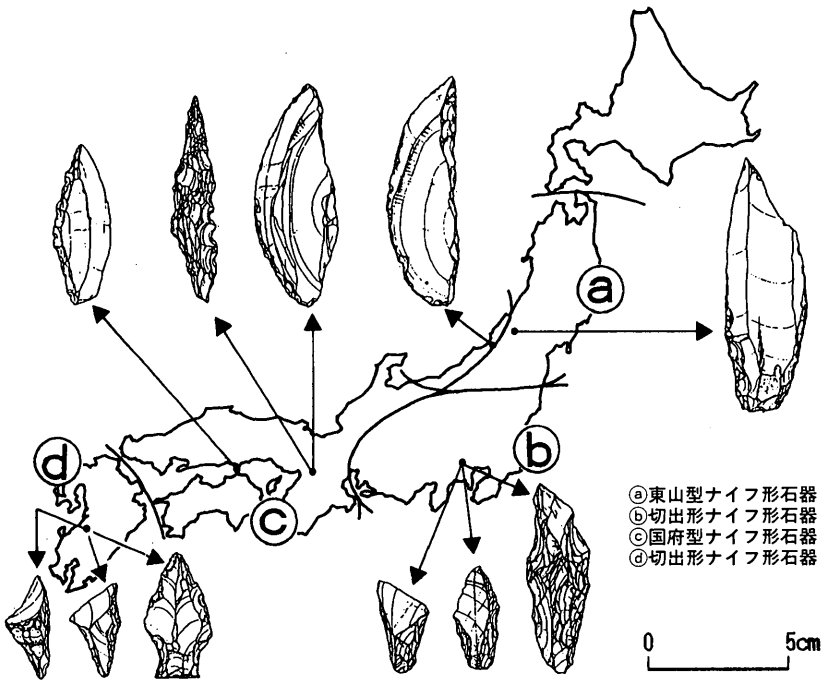


図7　ナイフ形石器（約1万8千年前）の地域性（『考古学キーワード』より）

石刃技法と瀬戸内技法の時間的変遷を知るのに良好な遺跡群がある。それは南関東の台地に残された遺跡である。場所的には現在の東京都多摩地区（武蔵野台地）、そこから南に下った神奈川県の大和市周辺（相模野台地）、埼玉県の浦和周辺（大宮台地）、千葉県の利根川流域（下総台地）の台地である。これらの台地には厚く堆積した火山灰のなかに石器が発見されるため、石器の新旧関係を火山灰によって推定できるという利点がある。新旧のわかる石器について、石器の製作技法を明らかにすれば、石器文化の内容の時間的変遷が理解できるのである。

長野県では多くの旧石器時代遺跡が発見されているものの、土壌の堆積がうすいために、その新旧関係は推測するほかはない。そこで南関東地方の石器の内容と県内の石器を比較することで、その新旧関係がわかるのである。つごうのよいことに、南関東には和田峠や霧が峰、男女倉（おめぐら）産の黒曜石の石器が大変多く見つかっている。この時期の南関東と長野県は同じ文化圏といってもよいほどである。

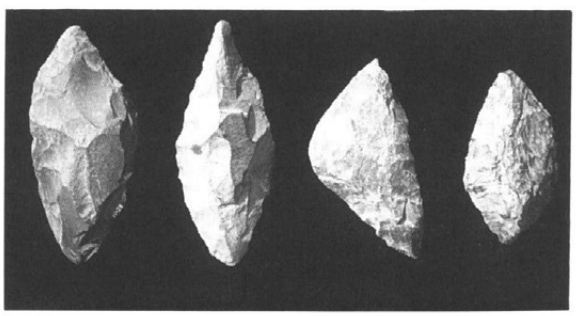
さて、石刃技法と瀬戸内技法によって剝離された剝片を素材に、それぞれ「ナイフ形石器」とよばれる特徴的な石器が製作されている。ナイフ形石器とは、剝片の鋭い側辺をそのまま残し、その側辺を活かすように周囲に成形加工をする石器である。石刃は縦に長く、その両

側辺が鋭い剥片。瀬戸内技法からは「翼状剥片（つばさじょうはくへん）」とよばれる横に長い剥片が剥離される。石刃と翼状剥片はそれぞれのナイフ形石器の素材になり、各々のナイフ形石器もお互い違う特徴をもっている（図7）。

ところが、男女倉遺跡群や南関東の台地では、一万八〇〇〇年前くらいには、石刃のナイフ形石器と瀬戸内系のナイフ形石器の特徴を合わせ持つ石器群が発見されている。おそらく、両方の文化が混じりあってできた石器であろう。

このように、台地の層序からいえる時間の変遷の比較と、石器の内容による比較によって、関東と県内の石器文化は、石刃文化の時代と瀬戸内地域の影響を強く受けた時代が交互に重なるように存在したことがわかってきた。およそ二万五〇〇〇年くらいから一万六〇〇〇年くらいの間がその時期にあたる。

佐久地方には石刃技法によるナイフ形石器をもつ川上村三沢遺跡がある。ナイフ形石器は八ヶ岳産の黒曜石や地元でとれるチャートとよばれる石で作られていた。野尻湖周辺の信濃町上野原遺跡では瀬戸内技法によるナイフ形石器が多数発見されている。黒曜石原産地周囲の男女倉遺跡群は黒曜石の瀬戸内系の石器群が、諏訪側では石刃石器群が発見されている。今後は、これらの石器群から、石刃文化と瀬戸内技法文化の関係がどのような関係であったのかが追求されねばならない。



写2　馬場平遺跡（川上村）の尖頭器（由井茂也氏蔵）

石槍（いしやり）が使われた時代

今から一万六〇〇〇年から一万三〇〇〇年前は石槍文化の時代である。

一万六〇〇〇年前の石刃文化のつぎに、突然に黒曜石の石槍文化が県内に出現する。それまでのナイフ形石器に代わって、両面加工の石槍がなぜ出現したのか、その原因を探る必要がある。ナイフ形石器と石槍は加工の仕方がまったく違う。この違いを文化の発展や道具の進化、それとも狩猟動物の変化という視点でみればたやすいが、はたして「技術の変化」について、これら現代的な解釈がゆるされるのだろうか。石槍のほうが、実はナイフ形石器よりもはるかに作りにくく、失敗が多い。しかもナイフ形石器は石槍と比較すれば、大きさもプロポーションもそれほどの違いはないのである。

「技術」と「技法」がなぜ変化するのか。それが考古学で歴史を語るときに重要な要素であろう。そして、時代によって、変化の内容や変化の要因は違うと予想できる。ナイフ形石器から石槍へなぜ変化したのか、しかも素材は両者とも石刃である。このことがこの時代の大きな研究課題として残されている。

これまでの研究の積み重ねから、石槍の広がりは、和田峠近辺ばかりでなく、隣県の群馬県武井遺跡、静

岡県の愛鷹山麓、武蔵野台地でも同じ作り方の石槍が発見されている。しかし中部・関東地方を離れると、これと同じ石槍は発見されないようである。石槍文化は関東甲信越の狭い地域の中で発展しているのかもしれない。

佐久や上小地方の尖頭器の遺跡では、川上村の馬場平遺跡や柏垂遺跡、和田村の男女倉遺跡群などがある。

細石刃の時代

今から一万三〇〇〇年から一万二〇〇〇年前には、これまでとまったく違う技術で石刃を剝がす技術が出現した。押圧剝離という技術によって、シカの角などの先を石に押しつけて、薄い剝片を押し剝ぐのである。この技術では大きな石刃はできないものの、剝刀の刃のような鋭く薄い石器＝細石刃がつくられるようになった。剝がされた細石刃は植刃器とよばれる骨製の軸につけられ、ナイフや槍先などの刃として使用された。

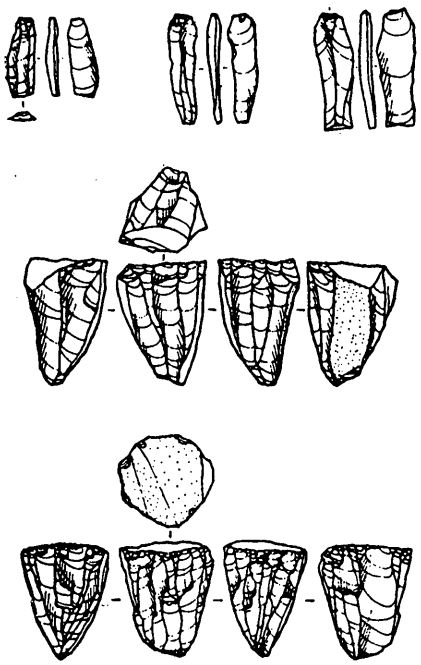


図8　矢出川遺跡（南牧村）の細石刃（上一段）**と細石刃石核**（下二段）（実物の1/2）

細石刃技術は、入手にコストのかかる黒曜石などの石材を効率よく剝離するのに都合のよい技術であった。

この時代の遺跡は国内で一〇〇〇か所以上発見されているが、佐久地方の南牧村矢出川遺跡（国指定史跡）は、全国ではじめて細石刃の発見された遺跡として著名である。

細石刃は薄く小形の石刃だが、興味あることに、細石刃をつくりだす石核が大きく二種類にわかれる。それはちょうど舟をひっくり返したような舟底形の細石刃石核と、石刃石核をそのまま小さくしたような細石刃石核である。舟底形の細石刃石核はさらに細かく区分すると数種類の技法があることが知られている。そして代表的な技法が、北海道の白滝遺跡で発見された「湧別技法」である。この技法では大きくてずんぐりした両面加工の槍先のような石器を、縦に長く割って舟の形のような石核にしている。縦に割った平坦な部分が舟の甲板で、もとの槍の尖った稜線の側辺が舟のへさきから舟底である。

湧別技法にも数種類があるようだが、このような細石刃石核は日本海からシベリア方面に広く発見されている。「湧別技法」をもつ石器文化は、北方狩猟民の石器文化であるようだ。

いっぽう、石刃石核をそのまま小さくした細石刃石核は、矢出川遺跡、静岡県休場遺跡、長崎県の野岳遺跡などで発見されている。この細石刃石核は関東以西の本州太平洋側や九州に多く発見されている。この石器文化は、中国大陸にその源流があるのかもしれない。

第三節　旧石器時代の古環境と浅間山の噴火

氷期と間氷期　旧石器時代は、一般に氷河期というイメージがある が、地球は、地軸の回転運動の変異の結果、気候が変化し、寒冷な氷期と比較的温暖な間氷期が交互に訪れている。実際、過去一〇〇万年間におよそ一〇万年のサイクルで氷期と間氷期が訪れたことが、最近のグリーンランドの氷床の分析結果などからわかってきている。

日本列島には、最古の遺跡として約六〇万年前の原人段階の遺跡が見つかっている。日本列島に最初に出現した原人たちは、氷期の氷河の形成による海面低下のおり、陸地化した海峡部分を越え、大陸から日本列島に到着したのだろう。

さて、このような氷期には、かつて大型の動物も列島内に生息していた。わずかであるが、洞窟や野尻湖などの湖底遺跡に残された動物の化石骨からつぎのようなことがわかってきている。

氷期の動物たち　氷期の動物たちについてみておこう。今から四万年から二万五〇〇〇年以前には、大型のオオカミ、ヒグマ、トラ、ヒョウ、ナウマンゾウ、ヤベオオツノジカなどが本州固有の動物として生息していた。ナウマンゾウやオオツノジカは野尻湖の湖底遺跡などから数多く発掘されている。これにウマ、ヘラジカ、オーロックス（原牛）、バイソン（野牛）などの草原に生息する大型有蹄類（ゆうているい）が加わった。

二万五〇〇〇年から一万五〇〇〇年前になるとヒョウが絶滅し、ナウマンゾウなども絶滅にむかった。

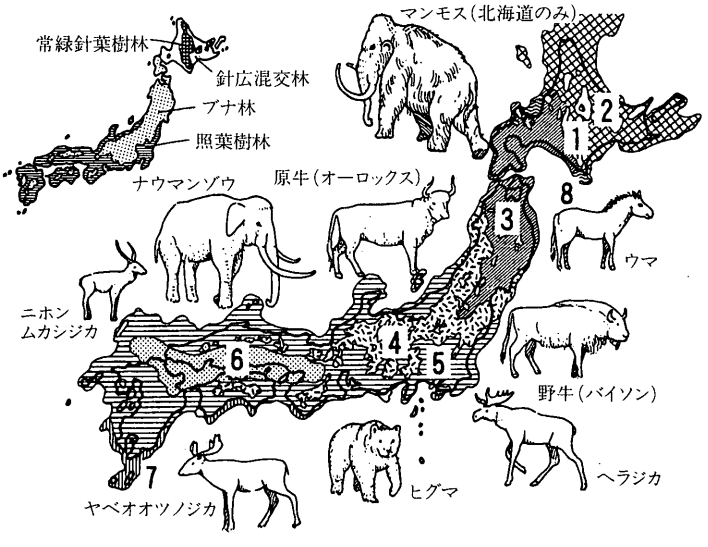


図９　現在の植生（左上）**と２万年前の植生・動物相**
１.氷河・高山の植生　２.グイマツ・ハイマツを主とする疎林・草原　３.グイマツが主の亜寒帯針葉樹林　４.グイマツをともなわない亜寒帯針葉樹林　５.ブナをともなう落葉広葉樹林　６.ブナをともなわない落葉広葉樹林　７.暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）　８.草原
（『考古学キーワード』より）

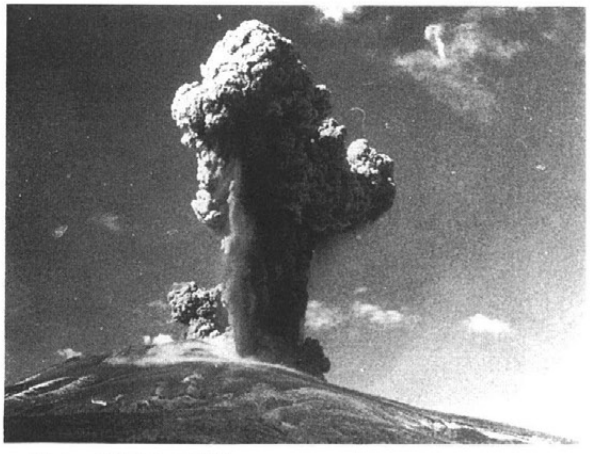
現在の動物相に近くなったのが一万五〇〇〇年前から一万年前の時期である。この時期までに大型有蹄類（ウマ、ヘラジカ、バイソンなど）は完全に絶滅した。

旧石器時代の気候は、このような動物相や花粉の分析から、冷涼な気候に針葉樹の森や草原・湿地帯の広がる風景が想像される。ちょうど現在のシベリアが旧石器時代に近いイメージであろう。

このような氷河期は、火山活動の活発な時期でもあった。御代田町からみえる雄大な浅間山も、現在とは比較にならないほどの活発な火山活動をしている。浅間山は大噴火を繰り返し、その火山灰は隣県にも降り積もっている。ここで、火山灰や火砕流の軌跡から浅間山の火山の履歴を記述してみる。

浅間火山の活発な活動　浅間山の活動履歴は、古い順に、黒斑（くろふ）期、仏岩期、軽石流期、前掛期の四時期がある。

黒斑期は浅間山が大きな成層火山となった時期である。浅間山は約一五万年前以降、三万年以前から活発な火山活動をはじめていることがわかっているが、そのほかの詳細は不明である。しかし、この時期に浅間山は標高二八〇〇㍍もの高さがあったといわれる。今から二万五〇〇〇年ほど前は、列島内で大噴火のあいつぐ時代であった。当時の鹿児島県の大噴火は、現在の鹿児島湾をつくったほどである。この噴火と相前後して浅間山も噴火を繰り返している。最初に軽石を大量に出す噴火があり、その後数千年をへて、ふたたび小噴火をくりかえすようになる。最初の噴火の軽石は「室田（むろた）軽石」、その後の噴火で降り積もった火山灰層は「浅間―板鼻（いたばな）黄色軽石群（As-BP Group）」とよばれている。その年代は二万一〇〇〇年から一万八〇〇〇年前である。そして「浅間―板鼻黄色軽石群」を降灰させた噴火は浅間山の山体をくずす岩屑なだれ（高速の地すべり）を引きおこし、現



写３　浅間山の噴火

写４　久保沢（上宿付近）の浅間第１軽石流

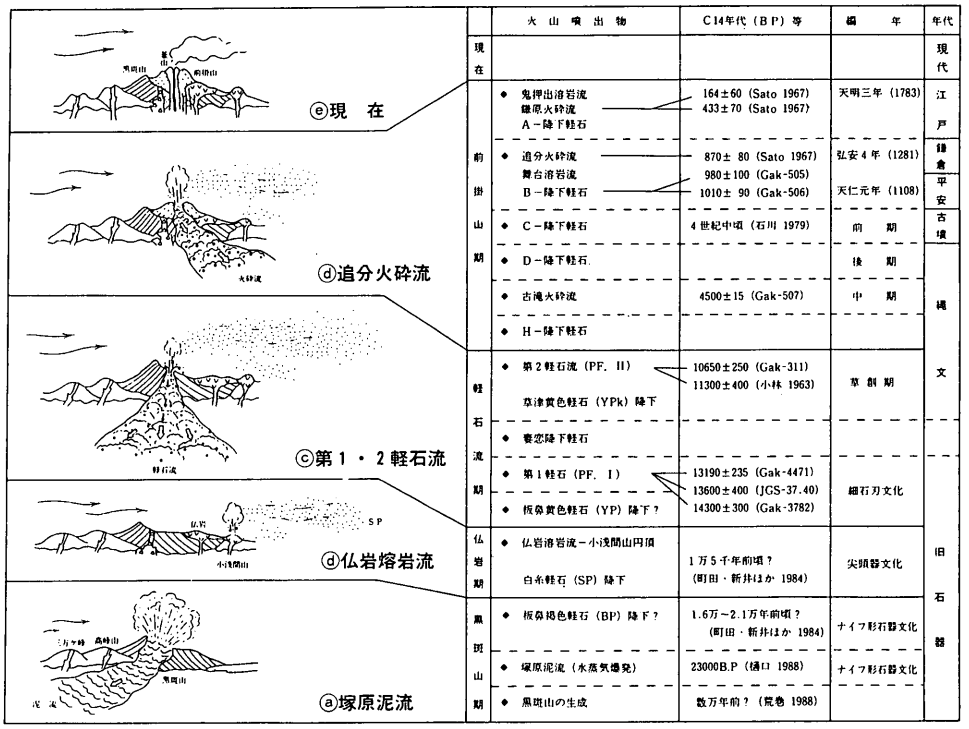


図10　浅間火山の編年（荒牧1968・樋口1988に準拠して作成）

在の浅間山の姿にちかくなっている。この岩屑なだれのなごりが、佐久市の塚原に残る流山である。

一万八〇〇〇年前には大量の軽石を出す噴火があった。この軽石噴火の時期を仏岩期とよぶ。この時期の地層には白糸軽石（SP）とよばれる特徴的な軽石がみられる。

仏岩期の後、一万七〇〇〇年から一万一〇〇〇年はふたたび軽石噴火が激しくなった。この時期を軽石流期とよぶ。この時期には大窪沢（おおくぼさわ）第一軽石（一万七〇〇〇年前）、同第二軽石（一万六〇〇〇年前）、板鼻黄色軽石（AsYP）（一万四〇〇〇年前）、草津軽石（As-YPk）（一万三～四〇〇〇年前）、総社軽石（As-Sj）（一万一〇〇〇年前）などが噴出している。また、一万四〇〇〇～一万三〇〇〇年前には小諸第一軽石流が、一万二〇〇〇～一万一〇〇〇年前には小諸第二軽石流が、佐久平北部をおおった。御代田町のいたるところには「田切り地形」として侵食された高さ一〇㍍以上の崖がみられるが、この崖を作るのが第一軽石流などの堆積物である。

軽石流期のあと、約一万年前に、山頂部に新しい成層火山ができた。こうしてできた山が前掛山で、現在まで数百年に一度の割合で噴火を繰り返している。

さて、このように激しい噴火を繰り返す浅間山の周辺に人類は居住し得たのだろうか。現在では厚い軽石層におおわれた古い地層まで調査のメスが加えられることは少ない。御代田町から軽井沢町にかけての浅間山麓に旧石器時代遺跡があったのか、それはいまのところ謎である。

第二章　縄文時代

第一節　縄文時代のあらまし

縄文時代のあらまし

今から約一万二〇〇〇年前、旧石器時代は終わりを告げ、土器や弓矢の製作・定住生活などを特徴とする狩猟・漁労・採集社会である縄文時代が始まった。約一万年間続いた縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の五時期に時期区分されている。さらに各時期は、前半・後半の二時期、前葉・中葉・後葉の三時期、初頭・前葉・中葉・後葉・末葉の五時期に細分されることがある。

氷河期であった旧石器時代の終わりには、地球的規模で気候の急激な温暖化がおこった。グリーンランドの氷層に刻まれたこのころの気候変動からは、今から一万一六五〇年前にはわずか五〇年間で年平均気温が七度上昇したことが読み取れるという。近ごろ問題視されている地球温暖化現象は西暦二〇五〇年までに年平均気温が一度上昇するという予測であるから、旧石器時代末には想像しがたいような規模での温暖化が進行したことがわかる。その温暖化の後、寒暖の振幅はあったが、全般を通じて現在とほぼ変わりない気候環境のなかで育まれたのが縄文文化である。

縄文時代の人々のおもな生業活動は、狩猟と採集そして漁労であった。狩猟の対象となったのはシカやイノシシなどの中型獣・小型獣・鳥など、採集はドングリ・トチ・ハシバミなどの木の実やワラビ・ゼンマイそのほかの根茎類や植物類、漁労としては沿岸部では内湾の海洋漁労、内陸部では河川漁労がなされるようになった。東日本の河川では産卵のため遡上するサケの漁なども行なわれていたものと考えられる。従来、縄文時代には農耕や栽培が行なわれていなかったという説が有力であったが、近年では青森県三内丸山遺跡などの最新発掘例

から、クリの管理栽培やヒョウタン・リョクトウなどの簡単な栽培がされていたとみられている。

この時代には、多彩な紋様を施した縄文土器が作られ、時期ごとに特徴のある変遷をみせている（図11）。また、打製石器や磨製石器など狩猟具や工具類がたくさん作られた。当時の人々は自然に対する信仰なども強かったようである。当時の信仰を表す代表的な遺物として、土偶や石棒などがある。

縄文時代のムラは、いくつかの竪穴住居に住む血縁集団によって構成され、ムラムラは婚姻網によってつながっていた。また、黒曜石などの物流ネットワークもあって、地域間の交易もさかんに行なわれていたらしい。

こうした縄文時代は今から約二七〇〇年前に終わりを告げ、稲作や金属器に代表される新しい時代、弥生時代が到来する。

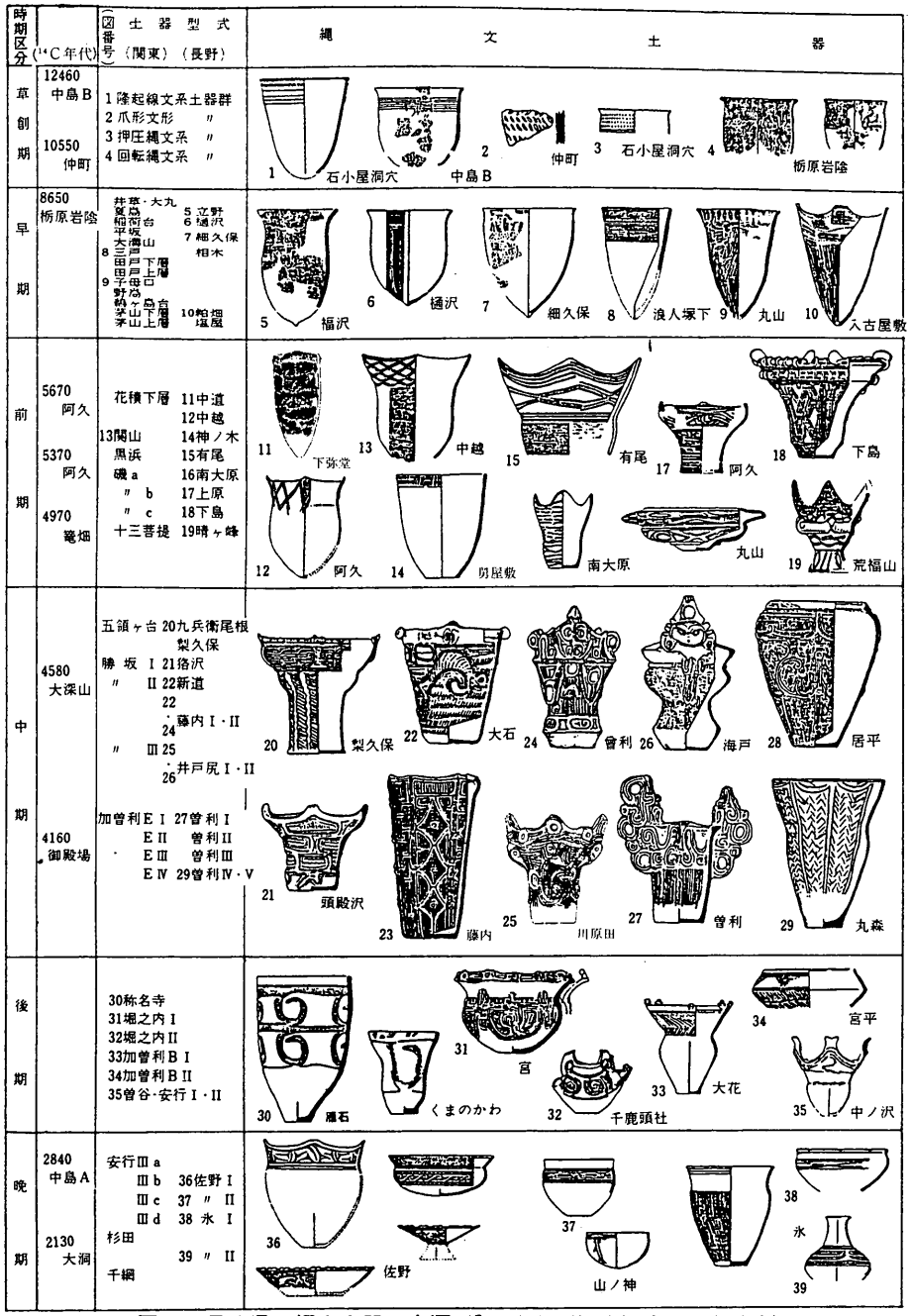


図11　長野県の縄文土器の変遷（『図説長野県の歴史』を一部改変）

第二節　縄文文化の黎明―草創期

草創期のあらまし　旧石器時代は土器登場とともに終焉を告げる。縄文時代の始まりである。約一万二千年前に日本列島に最古の土器が出現し、旧石器時代とはまったく違う文化が花開き始めた。縄文時代の幕開けである。しかし、旧石器時代から、縄文時代へと一挙に変革したとはいえない。旧石器時代から縄文時代への移り変わりの時代の遺跡を発掘すると、きわめて複雑な文物の姿がある。ここではその複雑な諸様相をかいま見ることにする。

日本で一番古い縄文土器はどれか。東京大学の山内清男博士の視点から縄文草創期の研究は始まった。昭和八年ごろのことである。そして昭和三十五年ごろまでに、東京都稲荷台遺跡、横須賀市の夏島貝塚、山形県日向洞窟遺跡、新潟県卯の木遺跡、同県小瀬ケ沢洞窟遺跡、群馬県西鹿田遺跡などが発見された。この間に関東では撚糸文土器（撚り紐を土器の器面に転がす土器）がもっとも古いことがわかる。そして日向洞窟その他の関東以外で発見される土器は、縄を押しつける押圧縄文土器で撚糸文土器よりも古いことがわかりつつあった。

写5　新潟県小瀬ケ沢洞窟（縄文草創期）

さらにその後、長崎県福井洞穴遺跡の調査で隆起線文土器、爪形文土器文、押型文土器の順に新しくなることがわかった。また、福井洞穴では細石刃と土器が一緒に出土することがわかってきた。いっぽう関東地方でも、神奈川県の上野遺跡で旧石器時代の細石刃や石槍と土器が一緒に出土し、茨城県後野遺跡では舟底形の細石刃石核が無文土器と一緒に、青森県大平山元Ⅰ遺跡でも刃部磨製石斧などと一緒に無文土器がでている。近年では鹿児島県の薩摩火山灰（約一万二〇〇〇年前）の下から、隆起線文土器や石鏃、石皿、磨製石斧など、縄文時代に通常みられる道具のセットが出土している。

このようにみてくると、縄文時代の始まりを追究すればするほど、新しい事実がふえ、そのたびに従来の考えを根本的に変更せざるをえなくなってきている。極端なことをいえば、一〇年前の有力仮説と現

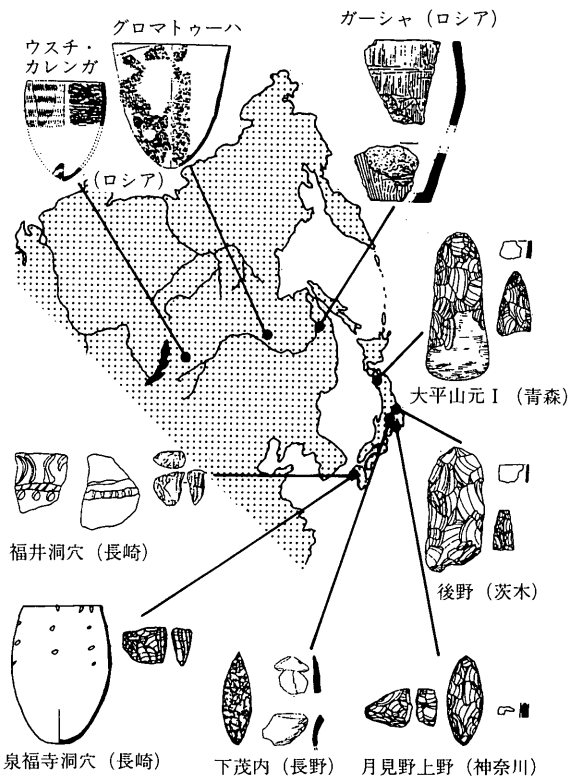


図12　最古の土器が出土した遺跡

在の有力仮説はまったく違うようになってきている。

ここでは人工遺物の整理と理化学年代の問題を紹介することで、旧石器時代から縄文時代へ変化するときの問題点を明らかにしておく。

土器の発生と変化　土器はかなり複雑な工程を踏んで製作されるものである。縄文土器も粘土の精製からはじまり、焼成まで複雑な工程を経ている。土器の製作技術を考える上でやっかいなのは、焼かれると消えてしまう製作の痕跡があることである。たとえば、土器の粘土の状態とか、乾燥の具合などはいったん焼かれてしまうと残りにくくなる。しかも、焼かれて消えてしまう製作痕跡こそが、土器づくりの重要な技術である場合が多い。そこで、焼かれた土器片から理解できる製作の痕跡は、まず文様のつけ方と文様の視覚の効果、それから、土器の粘土の状態などである。ここでは縄文草創期の土器の文様について概観する。

土器文様は、施文具（模様をつける工具）と施文具の使い方できまる。施文具を土器づくりの、どの工程で使うのかは重要な技術であるが、それは今後の研究課題である。

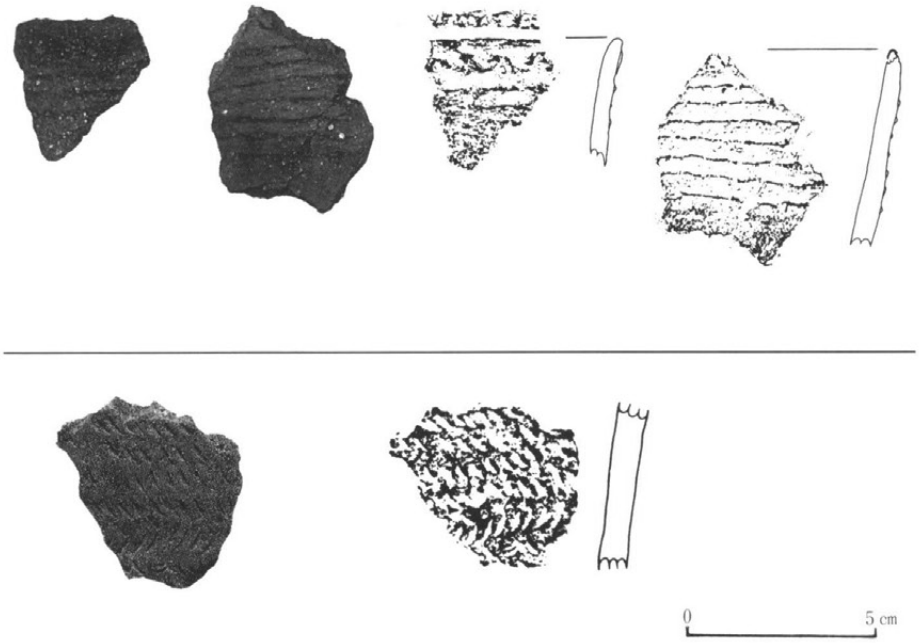
御代田の草創期土器　国内最古の縄文草創期の土器には隆起線文土器や爪形文土器などいくつかの種類がある。ここではその特徴にふれながら、御代田で発掘された最古の土器についてみてみる。

①　隆線文系土器　土器の口の周囲（口縁部）に粘土の紐の文様のある土器を隆線文系土器という。粘土を粒々にして土器の器面に貼り付けるのを豆粒文土器、巻き付ける紐が太いものを隆帯文、紐が細いものを隆起線文、クシのような工具で口縁部の粘土を引きつり、ミミズばれのような文様を施すものを微隆起線文土器といい、この順に新しくなるといわれている。県内では、須坂市石小屋洞窟遺跡がある。町内では微隆起線文土器が東荒神遺跡で二片出土している（図12）。

②　爪形文土器　土器の器面に人の爪や工具で「ハ」の字などの文様をつける土器を爪形文土器という。県内では諏訪湖底の曽根遺跡が著名である。町内からは御代田地区根岸遺跡で一片が出土している。

③　円孔文土器　土器の口縁部に、細い丸棒の先端で穴をきざむ土器である。穴は器面を貫通する場合と、途中で止まる場合がある。新潟県の壬遺跡がよく知られている。

④　多縄文系土器　縄の文様をつけた土器である。この様相は複雑で、縄の種類も撚り紐、撚り紐を数条に合わせたもの（縄）、右と左の撚りの違う撚り紐を合わせたもの（正反の合）、棒に撚り紐を巻き付けたもの（絡状体）など、施文具の内容が多種類におよぶ。さらに、これらの施文具の用いかたも、押しつける（押圧）、連続的に転がす（回転）、力をいれたり緩めたりを交互にしながら転がす（半置反転）、紐の先端で突く（刺突）など多様である。須坂市石小屋洞穴遺跡、新潟県室谷洞窟遺跡、福井県鳥浜貝塚などでこの土器が出土している。



写6・図13　御代田町域出土の縄文草創期の土器
（上）東荒神遺跡の微隆起線土器　（下）根岸遺跡の爪形文土器（1／2）

⑤　無文土器　土器に文様がみられないもの。この場合出土した土器が完全に復元されても文様がない場合と、土器片に文様がない場合がある。縄文時代草創期の土器で完全に復元される土器はきわめてまれであるので、後者の意味である。これら文様の見えない土器は、青森県大平山元遺跡、茨城県後野遺跡で出土している。近隣では佐久市下茂内遺跡（写6）のものがよく知られている。

写7　下茂内（佐久市）遺跡の日本最古の土器
（1／2）

土器の発生

土器はどのように発明されたのか。さまざまな学説があるが、代表的な説をあげてみよう。西アジアの土器の場合、パンの発明とともにあるといわれる。それはパンづくりの工程と土器づくりの工程が同型であるからである。いっぽう東アジアの土器づくりはそれとは違う。なによりもパンがない。

国学院大学の小林達雄教授は東アジアの土器づくりに興味ある学説をだしている。縄文草創期の土器の形には方形平底や円形丸底の不安定な形態の土器がすくなくない。さきに紹介した隆起線文系土器の種類で豆粒文土器には方形平底や円形丸底の土器がある。また石小屋洞

穴遺跡の土器も復元されると円形丸底である。このように「うつわ」として不安定な形態の土器が初期の土器の姿であることこそ、土器の発明の秘密のカギであると小林教授は考えた。その結果、そのような不安定な入れ物は、民俗例で編み籠や樹皮籠に見いだされた。たしかに、土器文様も縄を押しつけたり、撚紐であったり、その器面を飾る装飾は植物の蔓で編んだ籠を思わせる。小林教授の説は籠から土器が発生したというもので、現在この説が有力である。

つぎに、土器は一か所で発明されて周辺に広がったのか、それとも複数の箇所で発明されたのかという問題がある。一般的な土器の発生は複数の文化から発明されたと考えるほうが、納得できる。文化は個別的で個性的であるからだ。西アジアには西アジアの、東アジアには東アジアの歴史と環境があり、それぞれの事情において土器が発生したものと考えられている。

そして縄文土器の系統とその起源、そして文化の交流を土器の製作技法をとおして先史時代の歴史が解明されることになる。

縄文草創期の石器　縄文草創期の石器は、旧石器時代の終末と交差して複雑な姿をみせている。ここではその複雑な様相のいくつかを石器の技術・技法と形態から整理することにする。

①　細石刃石器群　細石刃は旧石器時代の最終末に位置するものもあるが、細石刃のなかには土器と一緒に出土するものもある。土器と一緒に出土する細石刃石核は本州以北では北方系細石刃石器群（舟底形の細石刃石核）で、九州は舟底形とそのほかの石核が共存する。県内

写8　下茂内遺跡（佐久市）の縄文草創期の石槍　（1／2）　（『下茂内遺跡』より）

右槍は遺跡の眼下の香坂川で採れるガラス質黒色安山岩を使って作られた。下茂内遺跡は石槍を作る石器作りのアトリエで、ここで作られた石槍は各地の集落に流通した。

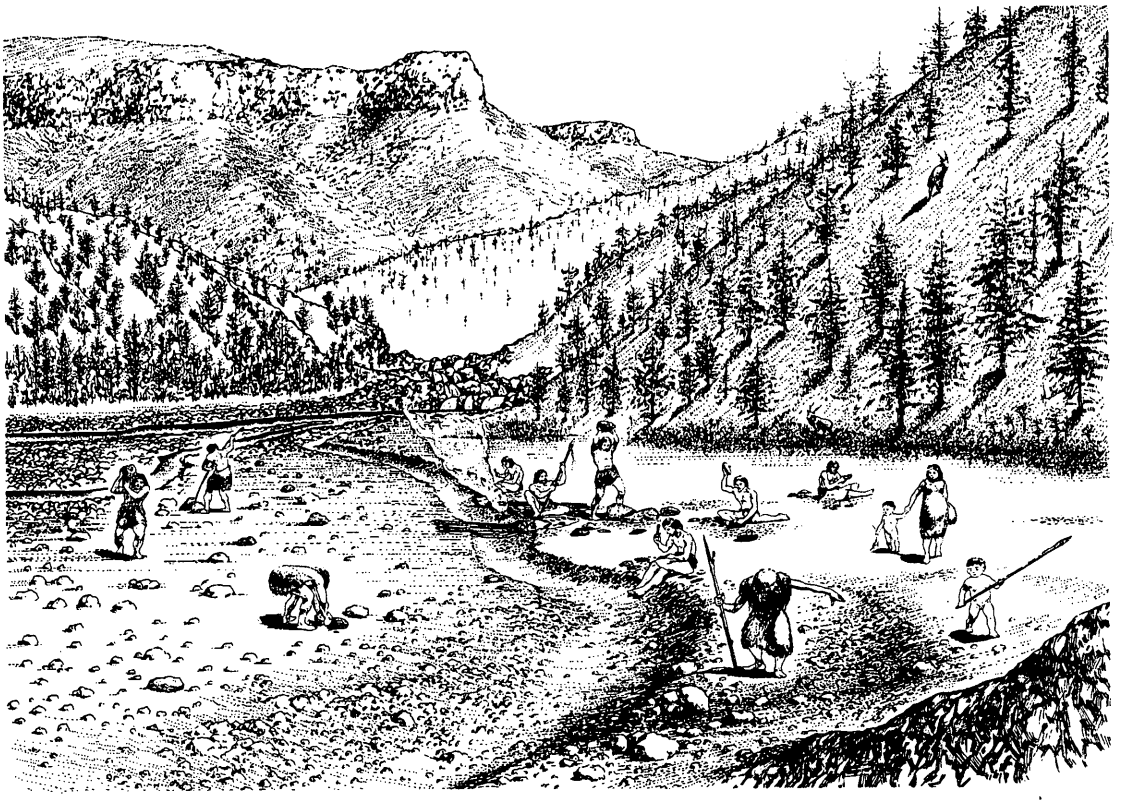


図14　下茂内遺跡の原風景
ガラス質安山岩の原石のある香坂川の河原で尖頭器（石槍）が作られている（『下茂内遺跡』より）

で南牧村の中ッ原遺跡群、県外では新潟県荒屋遺跡、埼玉県白草遺跡がある。

② 神子柴・長者久保文化（石器群）　芸術的な美しさをもつ長大な石槍と重厚な刃部磨製石斧を特徴として、石刃、彫刻刀形石器などがともなう。上伊那郡南箕輪村で発見された神子柴遺跡と青森県の長者久保遺跡から、この文化の名称が付けられた。これらの石器群はちょうど細石刃石器群の終末と交差する年代観が与えられている。近年神子柴遺跡では細石刃石核を製作した剝片が再発見されており、文化の交差した状況がうかがえる。県内には佐久市の下茂内遺跡、菅平の唐沢B遺跡などがある。

ここで佐久市下茂内遺跡については、重要なので詳述しよう。上信越道八風山のサービスエリアから、大量の石槍が発掘された。八風山にあるガラス質安山岩を利用して一〇㌢を超える大形の石槍が発掘されたのである。発掘された遺跡をおおっていたのは大窪沢第二軽石（一万六千年前）である。そしてここでは無文の土器片も発掘された。下茂内遺跡を時代区分のどこに位置させるのか、またその石器群の系譜をどこにおくのかは、論争されたままであるが、ここでは石槍の大きさ、形と土器の存在から神子柴遺跡と同様な位置にあると推定した。下茂内遺跡で製作された大量の石槍が、ほかの遺跡に残されているのか、これもこの時代を理解する重要な情報である。

③ 石槍石器群　神子柴遺跡の石槍よりも小形で、旧石器時代の伝統をひく石槍である。神子柴遺跡の石槍が優に一〇㌢を超えるのに

写9　御代田町最古の石器
塩野　川原田遺跡のガラス質安山岩製有舌尖頭器（実物大）

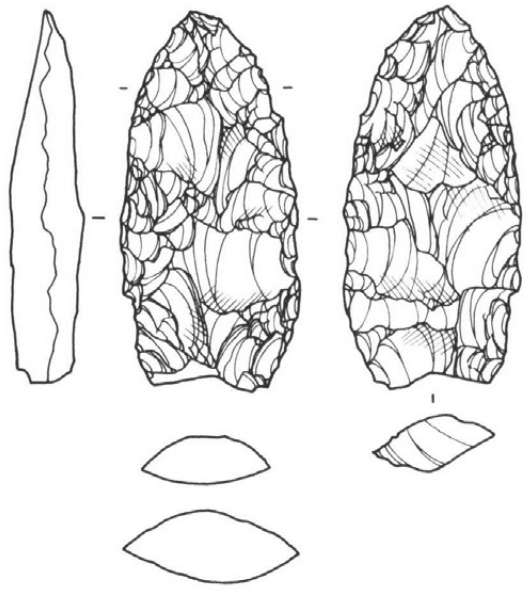


図15　御代田町最古の石器
豊昇　宮平遺跡の黒曜石製木葉形尖頭器（実物大）（大井源寿氏蔵）

たいして、こちらは五センチ内外できれいな木の葉形である。岡谷市の中島B遺跡や、町内では宮平遺跡で黒曜石の石槍が採集されている（図15）。

④　石鏃石器群　南九州とくに鹿児島県内で発見されている薩摩火山灰層（一万二〇〇〇年前）の下から出土する石器群。押圧剝離で作られた三角形の石鏃や、縄文時代にふつうにみられる茎のない石鏃などがある。

⑤　有舌尖頭器石器群　石槍にかえしのついた石器、もしくは石鏃に茎のついた石器でこの時期のものを有舌尖頭器とよぶ。県内では木曽郡開田村柳又遺跡から出土した「柳又型有舌尖頭器」が著名である。町内の川原田遺跡からも八風山のガラス質安山岩で作られたものが出土している。

縄文時代の年代　縄文時代の理化学的な方法による年代は炭素同位体が利用できるために、多くの年代測定がだされている。また近年は火山灰の年代測定から、遺跡をおおう火山灰の年代法も定着してきている。また、湖沼堆積物を顕微鏡で観察すると樹木の年輪のような縞（年縞）が観察でき、これも年代に対応する。さらに発掘された樹木の年輪を現代からさかのぼらせて暦年代をだす方法も開発された。そこで、近年の年代測定の成果を紹介しておきたい。

樹木の年輪は一年ごとにきざまれるので、暦年代に一致させることが可能である。いっぽう炭素同位体は炭化物を資料としている。この両者をくみあわせれば、炭素同位体から推定された年代と実際の暦年代のズレがわかる。より古い樹木をつかって、この誤差を測定しつづけた結果、現在は数万年までのズレを補正できる炭素同位体の年代測定が可能になっている。それを縄文時代にあてはめてみると、従来の年代との差が生じてきた。それは縄文時代草創期の九州の年代が従来の一万二〇〇〇年前から一万五〇〇〇年前とでてしまう。おそらく本州の草創期の年代も同じように繰り上がる可能性がある。この事実と考古学の遺物研究から導かれる事実は、何を語っているのだろうか。

縄文時代のはじまり　これまでみてきた土器、石器、理化学年代から縄文草創期の様相の一部をみてみたい。県内には縄文草創期の重要遺跡が数多くある。とくに石器群については資料が豊富なので、そこから記す。旧石器時代（土器をもたない時代）から縄文時代（土器をもつ時代）への変化は、石器の変化としても現れている。ナイフ形石器から石槍へ、さらに細石刃へとめまぐるしく変化する旧石器時代の終末の姿よりも、より複雑なようすがみえるのである。

まず、旧石器時代から続く石器製作伝統には、細石刃石器群と石槍石器群がある。細石刃石器群には無文土器が、石槍石器群には岡谷市中島B遺跡で隆起線文土器が一緒に出土する。いっぽう神子柴・長者久保石器群には無文土器がともなうようである。有舌尖頭器には横浜市花見山遺跡で隆起線文土器がともなう。石鏃は南九州ではそれだけ出土するが、本州ではかならず有舌尖頭器とともにあるようだ。

さて、ここで文化の系列を北方系、南方系、在来系（旧石器以来の伝統）にわけて整理してみる。

北方系は舟底形の細石刃石核と無文土器、神子柴・長者久保石器群と無文土器の組み合わせである（佐久市下茂内遺跡）。そして舟底形細石刃石核と神子柴石器群は、ともに細石刃石核の剝片をもっている。

南方系は、石鏃と隆起線文土器の組み合わせである（鹿児島県上ノ原遺跡）。

在来系は、石槍と隆起線文土器（中島B遺跡）、有舌尖頭器と隆起線文土器（横浜市花見山遺跡）の組み合わせである。

そして、理化学年代を照合してみると以下のような仮説がたてられる。南九州から石鏃と隆起線文土器の文化がしだいに北上する。そのときに本州では在来文化と北方系文化が融合した神子柴・長者久保遺跡文化が花開いている。そこで二つの文化は混じりあい、その結果が複雑な土器文様と有舌尖頭器（石槍と石鏃の双方の特徴をもった石器）である。

単純に記述するとこのような仮説もたてられるが、問題は提起されたばかりである。縄文時代つまり日本列島で土器が最初に作られた時代は、どのような歴史のもとに始まったのだろうか。私たちがモノから歴史を描く、それはモノの作られ方の変化（技術の変化）と意匠の変化（技術を統合する技法の変化）の二つが、くわしく語られなければならない。ともすれば大ざっぱな解釈が真説のようにみえるが、本当に語らなければならないのは、モノの技術と技法のくわしい変化だけである。そこから新しい歴史観を創造するのが、現代に生きる者のつとめであろう。

〈引用・参考文献〉

安蒜政雄編　一九九七　『考古学キーワード』

梶原　洋　一九九七　「考古学からみた日本列島最古の人類と文化」『科学』67—5

北川浩之　一九九四　「^{14}C年代が正確な年代に直結した」『科学朝日』11—33

長野県埋蔵文化財センター　一九九二　『下茂内遺跡』

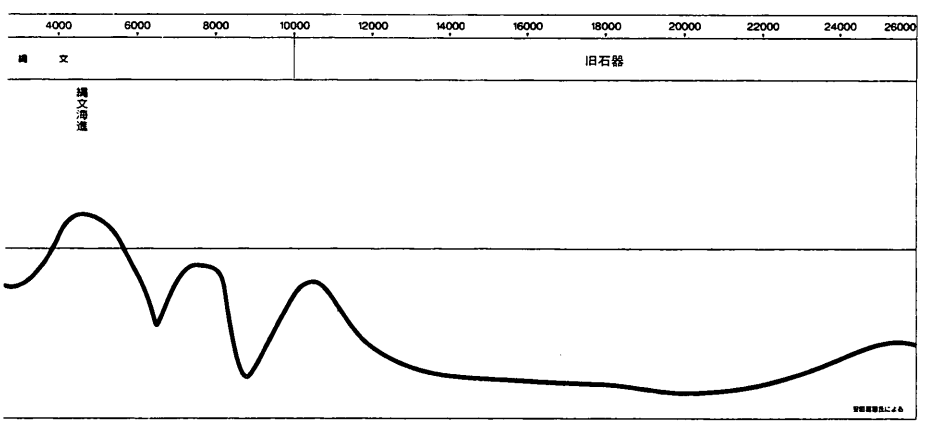
第三節　縄文文化の胎動―早期

一　早期という時代

あらまし　とんがり底の土器、すなわち尖底の「土器を搬ぶ人々」の道は、我々の生活からははるかに遠い、ちょうど獣たちの通い続けた「かもしかみち」を継承したものであったと藤森栄一は述べている。「縄文時代早期」とは、はじめはこのような尖底・丸底の土器が使われた時代をさした縄文時代の土器型式上の区分であった。その後、全国の発掘調査による資料の蓄積から、この時期は社会文化面からも縄文時代を特徴づける要素である狩猟・漁労・採集といった経済活動、それらに支えられての定住、資源の効率的な利用によるさまざまなランクの工芸品の製作、集落をつなぐ交易ネットワークが少しずつ顕在化してくる段階にあたっていることがわかってきた。

最近南九州では、草創期から早期前半にかけて竪穴住居とともに煙道付き炉穴や集石を含む大規模な集落が相次いで見つかり、これらはさきに述べたような本州の縄文文化に先行する定住集落群であることが明らかになってきた。しかしこの地域はやがて、約六三〇〇年前におこった鬼界カルデラの大爆発によって壊滅的打撃を受けることになる。このときに噴出したテフラは御代田町西駒込遺跡や軽井沢町でも確認されており、そのエネルギーの凄まじさを裏付けている。このような九州での定住施設の形成には、温暖化にともなう落葉広葉樹に少し照葉樹が混じるような縄文的植生の拡大によって、植物質食料への依存度が高まったことが大きくかかわってくるようである。

それでは縄文人の生活を変えていった環境の変化とはどんなものだったのだろうか。また、九州と同じく活火山を背後に控えたこの時期の郷土の人々はどのような生活を送っていたのだろうか。



の結氷期、作物の出来ぐあい、古文書の記録などから、古い時代の気候が復原される。

早期の環境と貝塚　縄文時代のなかでも早期はもっとも長く、炭素14年代からは一万年前から六〇〇〇年前までの約四〇〇〇年間続いたとされる。早期の始まる一万年前以降は地質学的な区分では完新世とよばれ、最終氷期（第四亜氷期）が終わって地球規模での温暖化[注1]が進む時期（後氷期）にあたる。その温暖化にともなって北半球の氷床や北極の氷が溶けたため海水面が上昇していく。多摩川・鶴見川低地の貝の種類の調査からは、約九〇〇〇年前ごろから七五〇〇年前ごろにかけて海水面が一気に約二八㍍も上昇していることがわかった。このような海面の上昇にともなって、海水が内陸の奥へ奥へと浸入し、早期末から前期の初頭には現在の栃木県藤岡市付近まで達するようになった。海岸線は約五〇㌔も内陸へ移動したのである。このような海の拡大は縄文海進とよばれる。いっぽう日本海側はそれにともなって対馬海流の流入が始まり、環境が大きく変化する。日本海深海の浮遊性有孔虫の組成や有孔虫の殻に含まれる酸素の同位体比から推測される古水温は、早期の半ば（約八〇〇〇年前）には最終氷期前半～一万七〇〇〇年前ころよりも五～九度ほど上昇して一七～一八度を示すことがわかっている。

貝は内湾の地理的な環境や塩分に応じて住む場所を選ぶ。人々はこの古東京湾周辺でさまざまな種類の魚貝を取り分け、周辺に貝塚を残すようになった。古東京湾の湾口では砂泥底干潟性のアサリ・ハマグリのような鹹水性の貝による貝塚が、外縁部では群馬県板倉町のヤマトシジミを主体とした貝塚のように汽水・淡水産貝の貝塚が残っている。このように温暖化と海の拡大は、海辺の人々の生活に手に入りやすい資源の増加をもたらしたわけである。

海から離れた内陸部でも、この時期、水産資源と動物・植物の獲得にもっとも有利な場所に居を構えるようになった。北相木村の栃原岩陰遺跡では、眼下に見下ろす相木川から得られたと推測されるサケ科魚類の骨・カワシンジュ貝・ヤマトシジミ・カラス貝のほか、ニホンジカ・イノシシ・アナグマ・タヌキ・キツネをはじめとする獣骨も豊富に出土している。また三河湾以南の内湾の干潮帯に生息するハイガイや、サメの歯も出土しており、すでにこの時期に海岸部

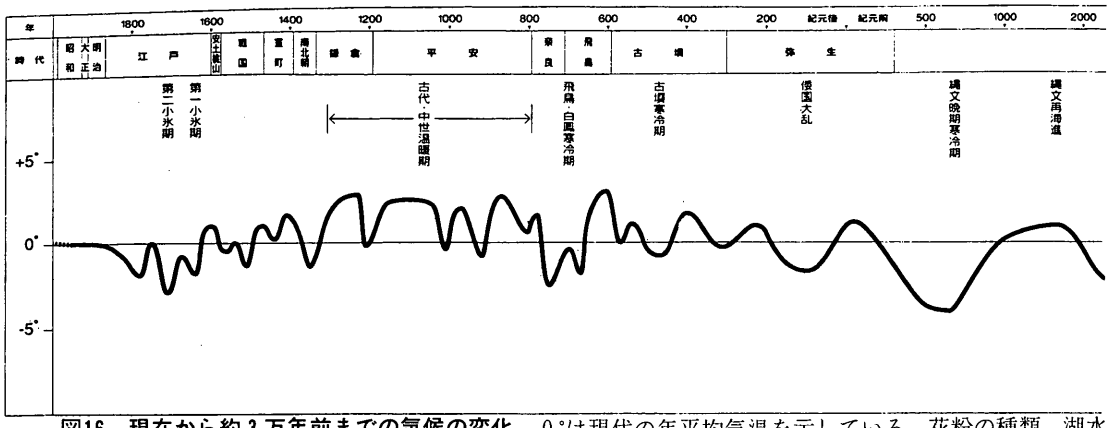


図16　現在から約3万年前までの気候の変化　0°は現代の年平均気温を示している。花粉の種類、湖水（『信濃の風土と歴史』②を一部改変）

写10　北相木村栃原岩陰遺跡
栃原岩陰遺跡からは8000～9000年前の12体の縄文人骨が出土した。このうち2体は復顔され、当時の縄文人がどんな顔をしていたのか、知ることができた。

からの人の移動もしくは物資の流れがあった可能性が示唆されている。

植物質食料の利用　このような気候の温暖化は、植生の変化をももたらした。早期前半ころの東日本は亜寒帯針葉樹林（トウヒ属、モミ属、ツガ属など）が衰退し、現在御代田町の標高一一〇〇㍍から一八〇〇㍍付近に分布するミズナラ・ブナなどの冷温帯落葉広葉樹林に覆われるようになる（図17）。鳥浜貝塚ではこの段階でブナ・トチノキ・オニグルミ・ヒシ・クリ・サルナシ・マタタビ・イヌザンショウの種実が多く検出された。県内では大町市クマンバⅡ遺跡で早期～前期初頭のオニグルミ・コナラ属（ドングリ類）・トチノキの種実が出土している。さて、トチノキの種実にはサポニンやアロイン、コナラ属の種実にはタンニンといういわゆるアクが含まれているため、渋くてそのままでは食べられない。食べるためには水さらし・加熱によるアク抜きが必要である。トチノキの種実は飛騨地方をはじめとする山村での食料源として最近まで作られ、ミズナラの種実を加工したナランゴシ餅、シダミ餅は信越地方で報告されている。ただし、それぞれ口に入るまでにはかなり手間がかかる。たとえば種実をすりつぶすための石皿や磨石や灰とともに煮詰めるための鍋は、この作業には欠かすことのできない道具であろう。そして従来石槍・石鏃・石錐・掻器・削器などが主体であった縄文人の道具箱に、台石状の石皿や磨石が加わってくるのはまさに草創期の終わりから早期の初めころにあたる。さらに堅果類を割るための道具と考えられる凹石も登場する。また、特殊磨石とよばれる多面体で複数の摩耗面が見られるやや細長い磨石が、押型文土器にともなう。

現在この時期にアク抜きの行なわれた実例はまだ見つかっていないが、このような石器組成の変化から早期の人々が森を拠点として植物質食料に依存し始めたようすがうかがえる。やがて早期末から前期にかけてもっとも温暖な時期にはコナラ属・クリなど現在の塩野地区の自然林と同様の植生の森が広がっていた可能性が高く、植物利用はさらに進んでゆく。

植物の加工はマードックの全世界の民族例（図30）からも、先のトチ餅作りの聞き取り調査のようすを概観しても女性の担う労働であった可能性が高い。子供を産み育てる者にとくに負担のかかる頻繁な移

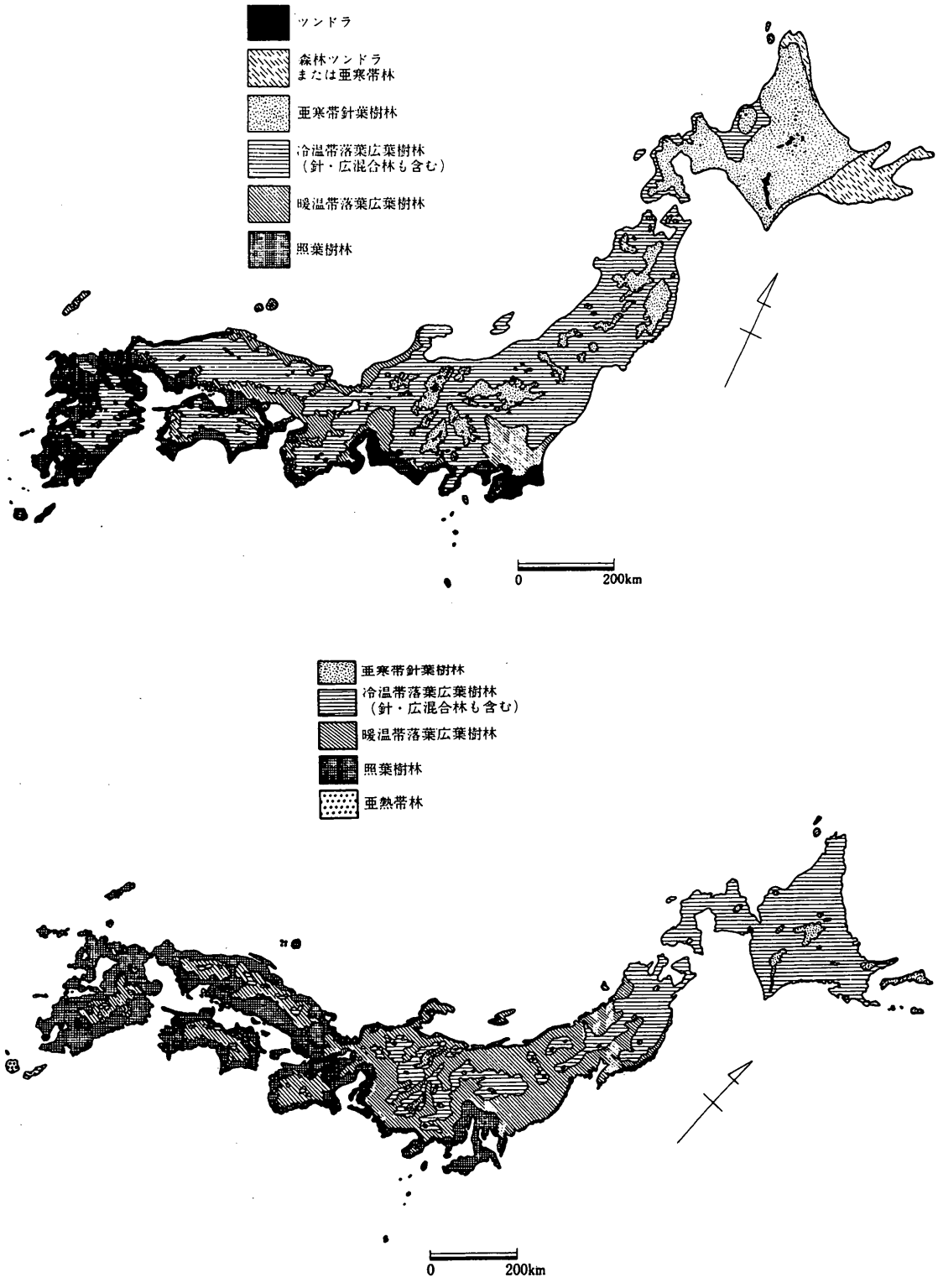


図17　縄文早前期の日本の古植生　(上)縄文時代早期前半（9000年前ごろ）　(下)縄文時代前期（6000年前ごろ）　（『環境考古学事始』より）

動からの解放は、自然と生活のゆとりにつながる。縄文女性たちはこの新たに生み出された時間を食生活の革新や、食生活に密接につながる土器製作の工夫に振り向けていったのだろう。ただし広域的な資源調達から、狭い範囲で工夫を凝らした（複雑で多工程な）資源への関与へという流れはなにも女性のみではなく、旧石器時代から縄文時代への人間社会全体の動きとしてとらえられる。

二　縄文早期の遺構

早期の居住形態の変遷　本州では、縄文早期は定型的な竪穴住居が作られ始める時期にあたる。とくに関東地方では、撚糸文土器が使われていた早期前半に主柱穴を有するタイプと小型の壁柱穴を有するタイプが出現する。武蔵野台地では撚糸文期になって拠点集落を中心に集落の集合や分散がおこるとされている。県内では、草創期に続く古い段階には栃原岩陰遺跡や真田町唐沢岩陰遺跡・須坂市石小屋洞窟・高山村湯倉洞窟など、洞穴や岩陰が生活の場となっている場合が多い。居住空間は小規模ながら、周辺の十分な食糧資源に支えられて、ある程度の継続的・回帰的な居住が可能になったのだろう。

木曽郡大桑村のお宮の森裏遺跡では、草創期末もしくは早期初頭の表裏縄文土器の時期の竪穴式住居跡が九棟調査された。これらは、直径が平均約五㍍とやや大型ではあるが、住居の掘り込みが浅く、不規則に配置された柱穴も直径二〇～三〇㌢程度で、炉がなかった（図18）。

押型文土器が出土する遺跡は佐久地方では二五遺跡を数え、望月町新水B遺跡・佐久町後平遺跡などでは竪穴住居が確認されている。新水B遺跡では、押型文期から沈線文期におよぶ住居跡が四棟みられ、それらの形はいずれも楕円気味の隅丸方形で、柱穴は五〇㌢と深いものもあるが規則性に乏しい。やはり、住居内には炉はないが、住居外に炉址四基が確認され、それぞれの住居にともなうものと推定されている。炉址は深さ二〇㌢ほどで、内部には拳大の焼け石が残っており、火床も認められた（図19）。

早期後葉条痕文系土器の時期になると坂北村向六区遺跡・茅野市駒形遺跡、飯島町カゴ田遺跡などのように屋内に地床炉をもつものも登場する。平面形はやはり円形や不正円形が多いが、柱穴は小型で規則性のない配置のものに加え、茅野市高風呂遺跡例のように四本の壁柱穴が確認された例もある。

いずれにしてもこのような住居跡は後述する前期のものに比べて明らかに構造的に貧弱で規則性を欠く。また、集落全体を概観しても一つの空間を長期的・効率的に利用するために頑丈でなおかつ多種類の施設を作り、その場所を拠点として多様な技術系を展開したような前期以降のものとは明らかに異なる。しかしながら、手狭で落盤の危険をともなう岩陰を生活拠点の一つとしているような形態から、竪穴住居によりウエイトをおくようになった点は居住形態上の大きな画期と考えられる。

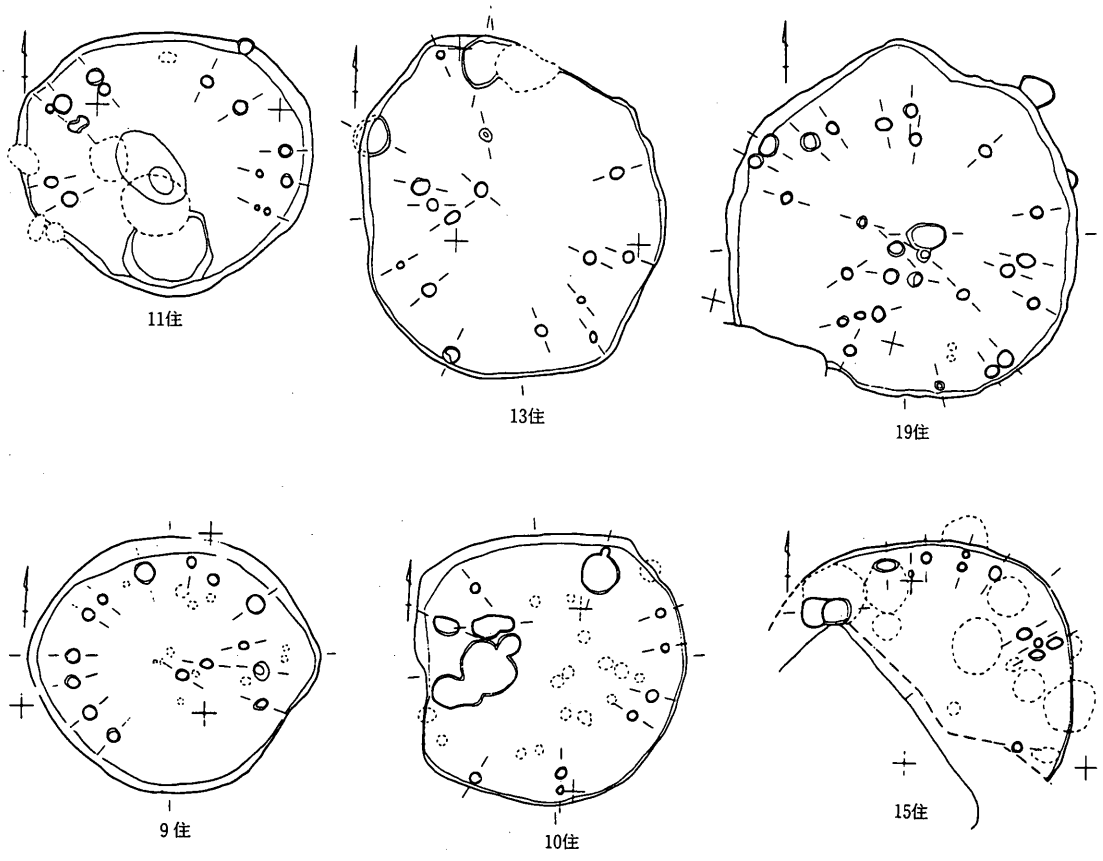


図18　上松町お宮の森裏遺跡の竪穴住居跡（同報告書より引用）

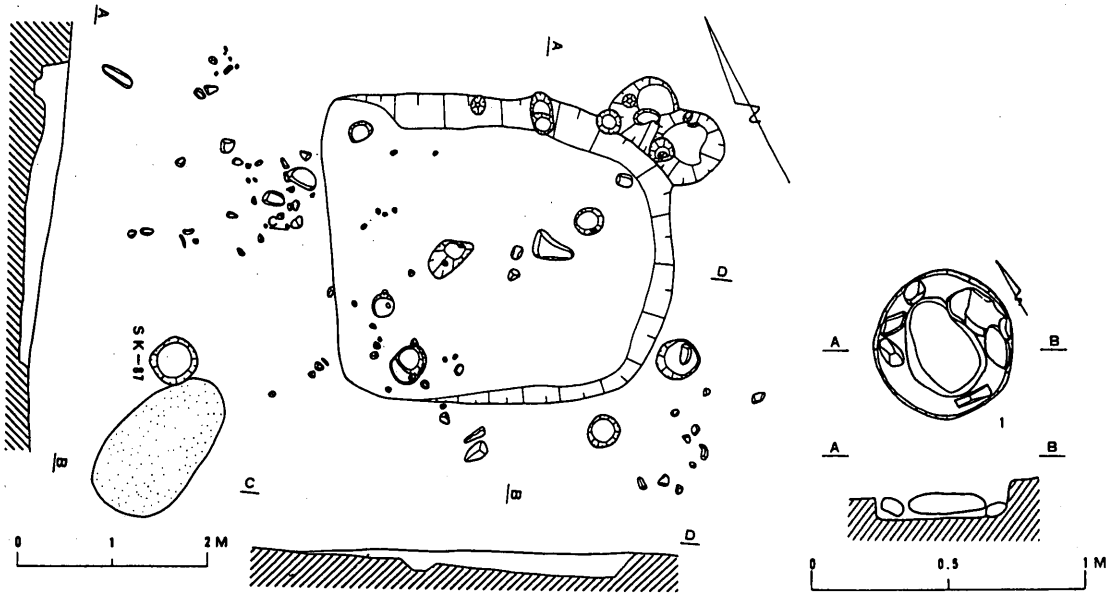


図19　望月町新水B遺跡第5号住居跡(右)と第1号炉跡（同報告書より引用）

御代田町の早期遺跡　御代田町内の縄文早期の遺跡では、塚田遺跡（大字塩野）・下荒田遺跡（同）・東荒神遺跡（同）・城之腰遺跡（同）・川原田遺跡（同）（図20）が発掘調査されている。塚田遺跡では押型文土器が二〇点と共伴する縄文土器三点、沈線文土器八点、「早期第Ⅲ群土器」九点、早期後半条痕文系土器群四七点などが出土し、充実した内容を誇っている。下荒田遺跡では後半の沈線文系土器

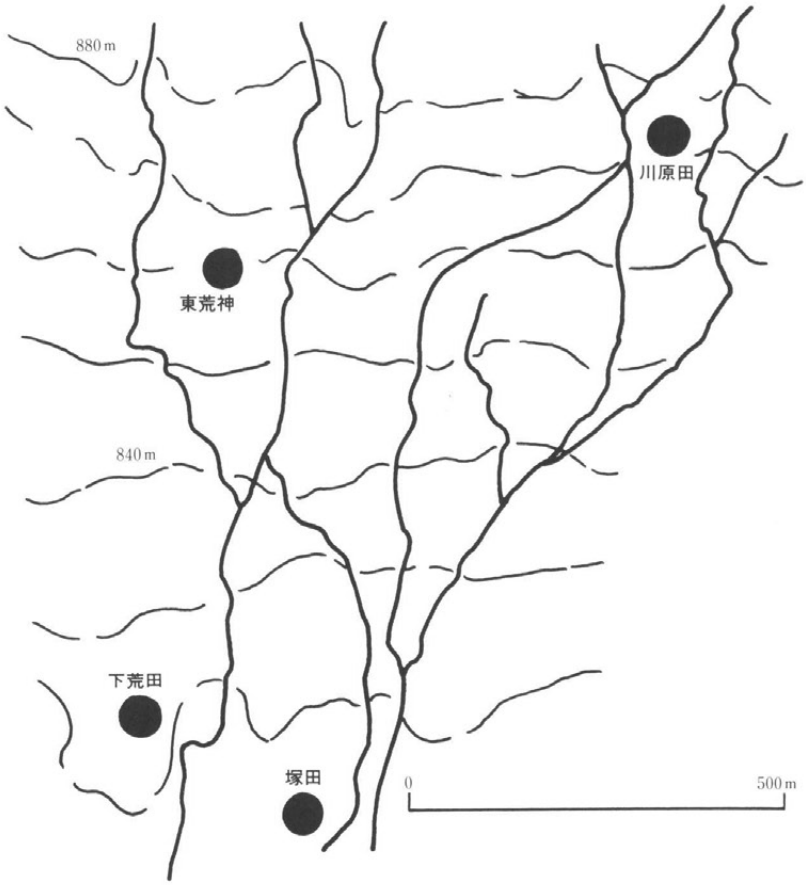
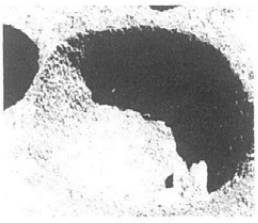
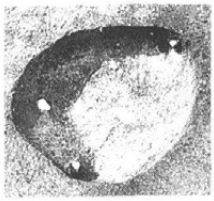


図20　御代田町縄文早期遺跡の位置

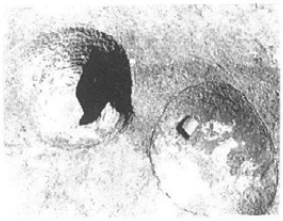


D－143号土坑



D－17号土坑

D－14・15号土坑



D－110・111号土坑

写11　塚田遺跡縄文早期の土坑群（――の土坑が早期）

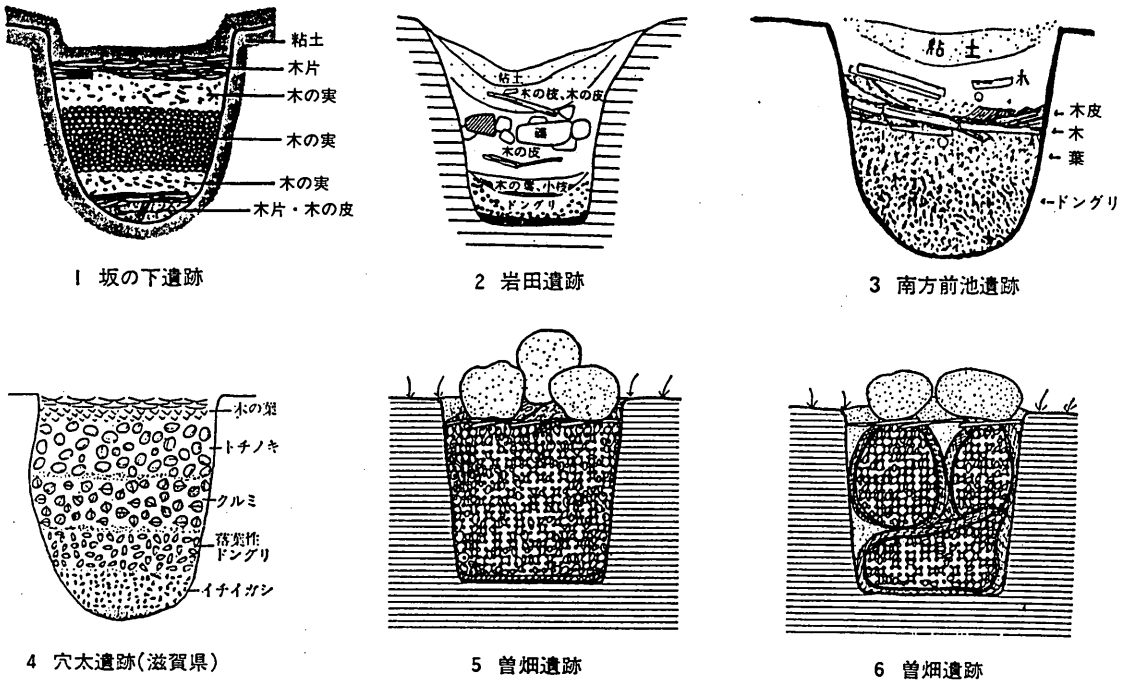


図21　貯蔵穴断面模式図（『季刊考古学』44号より）

のうち田戸上層式後半～末に並行する土器一〇〇点と、鵜ケ島台式土器五点、絡条体圧痕文土器三点などが出土している。東荒神遺跡・城之腰遺跡からは楕円押型文の破片が出土している。川原田遺跡では押型文土器一〇点、沈線文系土器のうち田戸上層後半～末に並行する土器一点、早期末の絡条体圧痕文土器四〇点、早期末の沈線文土器三点などが出土した。

塚田遺跡の土坑　御代田町で確認されている縄文早期の遺構は塚田遺跡の四基の土坑だけである(写11)。これらは直径一㍍前後、深さは五〇㌢程度のすり鉢型でとくに焼けた部分などはみられない。周辺には前期初頭もしくは時期が特定できない類似した規模・形態をもつ土坑が一五五基検出されている。ではこのような土坑はどのように使われていたのであろうか。縄文早期の土坑で特徴的なものとしては新水B遺跡例のような焼け石をともなった炉穴や、猪・鹿などを捕獲するための陥し穴、墓坑などがあげられる。このほかの土坑は貯蔵穴である可能性が高い。

縄文人が利用した堅果類でもっとも多いものはクリ・クルミ・トチの木・コナラ属の果実である。コナラ属は食用一〇種類の内での差はあるものの、一〇〇㌘あたり二四〇～二八〇㌔㌍、クリは一八〇㌔㌍、トチの木は三六九㌔㌍であり、現在の主食である穀類に勝るとも劣らないエネルギー源になったと考えられる。そのため秋の三～四か月の間に拾った木の実をできる限り長く貯蔵し、冬の間の食料にするためには貯蔵穴が必要である。貯蔵穴は、縄文中期の長岡市中道遺跡のトチ棚

や長野県籐内遺跡のクリ棚など住居の梁を利用した吊り棚と並んで、食料を計画的に利用するための縄文人たちの工夫の一つなのである。

さて、塚田遺跡にはすり鉢状の土坑が多いが、前期初頭の土器をともなうものにはバケツ形やフラスコ形土坑がある。ここでの貯蔵の方法を実際に木の実が残っていることの多い低湿地型貯蔵穴（図21）から推測すると、まず木の実を詰め込み、その上を木の葉や樹皮でおおい、さらにその上から粘土や石をかぶせて蓋をするようである。さらに塚田遺跡ではそのほかに、D17号土坑では鵜ヶ島台式土器、D15・D111・D143号土坑ではそれぞれ「早期第Ⅲ群土器」の完形品が土坑の底部から発見された。これは土器自体に使用後に埋納されるような、特殊な意味が付与されていた可能性もあるが、土器の内容物が埋納もしくは保存される必要があったと考えられる。例をあげると、熊本県曽畑遺跡では木の実が籠または編み物に入れられて、津島岡大遺跡では土器に入れられて埋められていたとされる。いずれにしても、塚田遺跡の早期後半の土坑が貯蔵穴であるとすると、すでにこの時期から計画的に資源を利用しようとした姿勢が見られ、それが前期初頭の土坑群へと継続されていったと考えられる。そしてこのような計画性と土坑群が遺跡全体のなかではやや中央北側に近接していることから、痕跡こそ見つかっていないものの簡単なテント式の住居跡が土坑周辺に作られていた可能性もある。

三　早期の土器

縄文早期になると土器の文様が多様化し、地域ごとの違いも現れる。ただし土器文様を図像としてとらえた場合、縄文早期の土器においてはモチーフの特徴よりも、施文具の素材の違いが文様の多様性を生んでいる。それでは塩野西遺跡群から多く出土した土器型式を古い順に見ていくことにしよう。

押型文土器

早期を土器の文様の変化を基準に区分すると、まず縄文草創期の終わりから早期の初頭にかけて数段階の変遷をとげる表裏縄文土器の時期がある。表裏縄文土器を作っていた人々は、関東地方の撚糸文土器の人々と接触し、やがて押型文土器を生み出す。こうして中部高地の縄文早期前半を代表する尖底土器である押型文土器が誕生するわけである。押型文土器がもっとも盛行するのは中部地方から近畿地方にかけての関東以西である。押型文土器の前半期には関東地方では撚糸文土器が、東北地方では鋸歯文・菱形文を縦に刻んだ日計式押型文土器が作られ、後半には貝殻沈線文系土器が作られる。このように本州は異質な三つの文化で塗り分けられているが、けっして排他的ではない。なぜなら押型文土器が主体になる地域でも撚糸文土器が一緒に出土し、その逆もみられる。また、押型文土器を作った人々が多く作った特殊磨石が撚糸文文化圏に入り、撚糸文土器の人々が使ったスタンプ型石器が押型文文化圏でしばしばみら

れる。かれらは互いに交流をもちながら併存していたのであろうか。

押型文とは山形・楕円・格子目などを彫刻した丸い棒（木もしくは骨など）を粘土の上に転がして付けた文様である。草創期の押圧縄文・回転縄文など撚った縄を軟らかい土器の器面に押しつけて付けられた文様と、縄を使わない押型文との差異は非常に大きい。ただし、撚糸文が丸い棒の上に縄を巻いて転がしたものであるのに対し、押型文は丸い棒の上に縄を巻くかわりに線や図形を彫刻したととらえればそれらの関連が説明できる。彫刻する図形は時間とともにゆるやかに変化する。すなわち押型文土器群の個々の土器に付けられた文様が、どんな組み合わせで出現するかをみると大まかな時期がわかるのである。中部高地の押型文土器は、これらの文様の細部と各文様が施文された土器の組成比の層位的な差異を基準として立野式・樋沢式・細久保式の順に推移すると考えられている。

現在、近畿地方の大鼻式・大川式などさらに古いとされる型式も指摘されているが、県内の最古型式とされる立野式の文様には格子目文（正格子・斜格子）・山形文・市松文・楕円文（ポジ・ネガ）があり、それらには縄文・撚糸文の土器がともなっている（図22）。川原田遺跡で横方向の山形文、縦方向の山形文、縦方向の楕円文の立野式が合計五片出土した。このほかに塚田遺跡で斜格子目文をもつ土器が出土している（図23）。北相木村栃原岩陰遺跡では斜格子目文土器が表裏縄文土器と相前後する深さから出土しはじめ、異方向帯状施文の樋沢式がそれより浅い位置から出土した。撚糸文土器は斜格子目文土器を含みそれより深い位置から出土している。

写12　繊維を含む塚田遺跡の押型文土器

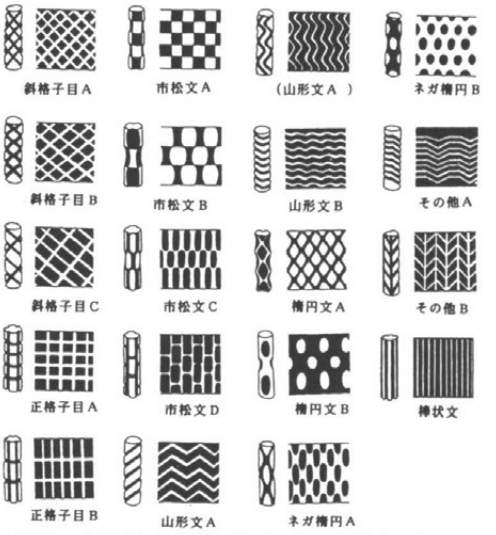


図22　押型文の原体（『長野県考古学会誌』77・78より）

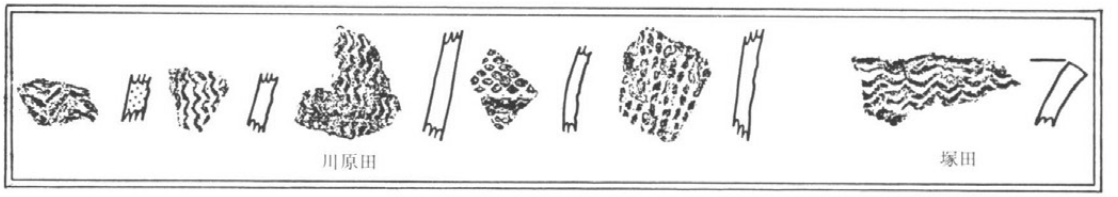


図23　川原田　塚田遺跡の押型文土器

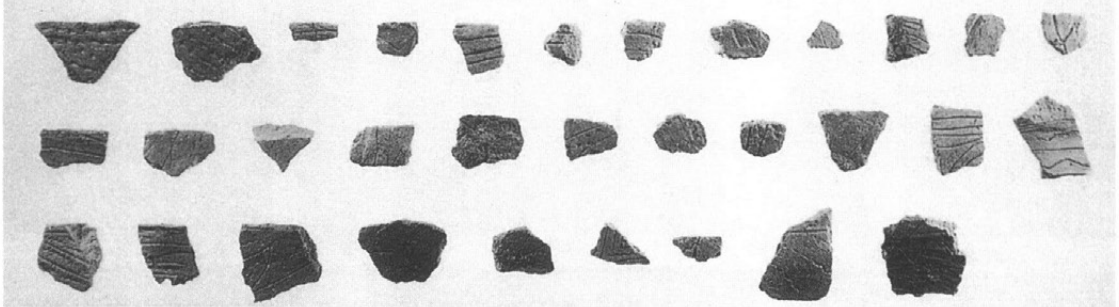
樋沢式は岡谷市樋沢遺跡の下層土器を基準に設定された型式である。口唇部下を横走・縦走する一～二帯の山形押型文（直交する帯状施文）をもつ土器がもっとも組成比が高く文様的にも特徴とされる。岐阜県の沢遺跡で設定された沢式は樋沢式にきわめて類似した文様構成をとるが、胎土に黒鉛を含んでいる点で識別される。県内では塩尻市向陽台遺跡で多数の無文土器とともに沢式がかなりの量出土したが、塚田遺跡の土器のなかには黒鉛を含む沢式に比定できるものが一点ある。同遺跡には横方向帯状に山形文が施文されているものが一点、縦方向帯状のものも二点ある。これらは縦方向密接山形文も含めて樋沢式からつぎの細久保式とされている。樋沢式は佐久地方でも一五遺跡で出土しており、とくに望月町平石遺跡では三二六点が確認されたが、なかには東北地方の日計系の押型文土器の破片が含まれている。逆に福島県竹ノ内遺跡では日計式押型文土器とともに樋沢式が出土している。

細久保式は樋沢式に後続する型式で、横方向に密接して施文される山形押型文と楕円文が特徴とされている。川原田遺跡では両方の文様のものが一点ずつ出土した。

押型文土器の終末は、口縁部にやや大柄な楕円文が密接施文される塞ノ神式、高山寺式を経て、栃原岩陰から出土した半截竹管による押引文と山形押型文をもつ丸底土器を指標とする相木式へと変遷していく。塞ノ神式は胎土に繊維を含むことを特徴としているが、塚田遺跡では密接施文の楕円文をもつ土器が三点出土し、いずれも胎土に繊維を含んでいる（写12）。相木式に類似した文様意匠をもつ土器は次項で登場する下荒田遺跡の沈線文土器にみられ、田戸上層式終末期が相木式と時期的にかなり近接する可能性が指摘されている。

沈線文系土器群　関東地方で撚糸文土器に後続する土器はいわゆる沈線文土器群である。これらには篦や棒状の工具による沈線文と、貝殻の復縁部を内側にやや傾けて縁部を器面に押圧する貝殻復縁文などの文様が付けられる。このような特徴をもつ土器群は三戸式・田戸下層式・田戸上層式の順に変遷する。塚田遺跡では最終末に位置づけられる田戸上層式が八八点出土し（写13）、大岡村鍋久保遺跡・望月町新水A・B遺跡・山ノ内町上林中道南遺跡とあわせて県内を代表する資料群となっている。塚田遺跡の土器は、いずれも破片資料であるが貝殻復縁文が多用されるほか、沈線が一～二ミリ幅で鋭く、繊維をごくわずか含むという特徴をもつ。器形は

△　早期第Ⅰ群土器　（1：4）



写13　塚田遺跡の田戸上層式土器　早期第Ⅱ群土器（1：4）

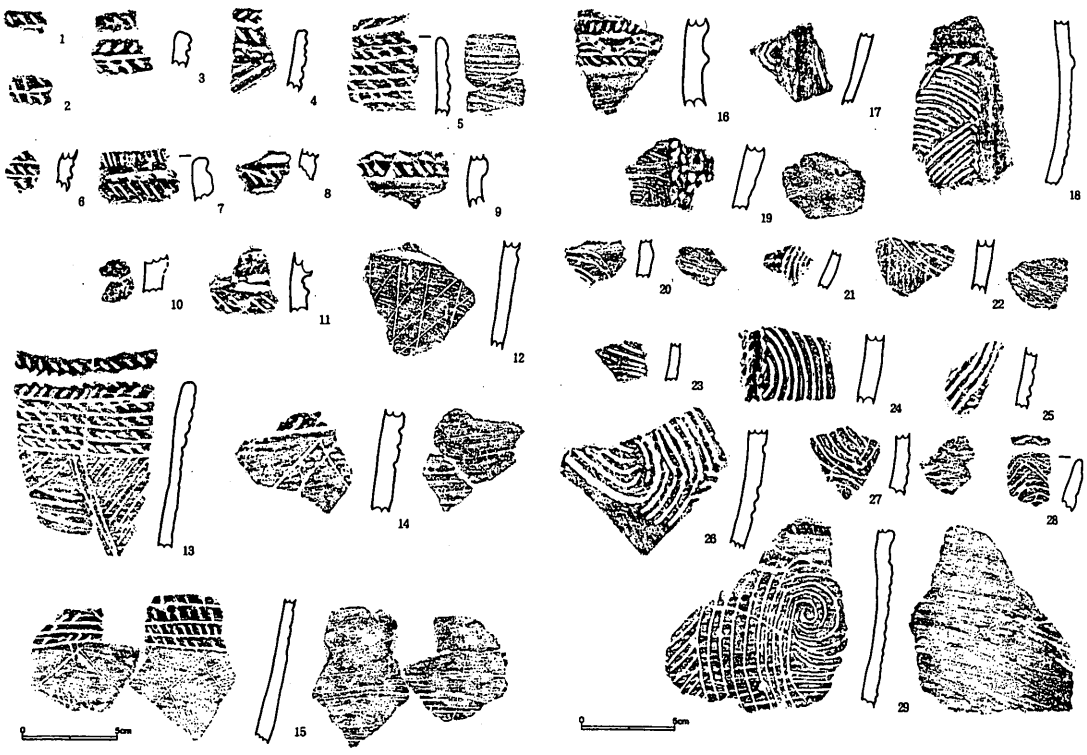


図24　下荒田遺跡の沈線文土器

尖底・丸底深鉢が主体であるが、口縁部が内湾し、頸部でくびれ、胴部が丸みをもつキャリパー形土器が出現する。主要な施文具である貝は内湾に住む海産の二枚貝であり、海岸部から交易品として運ばれてきたものであろう。いっぽう、田戸上層式よりもやや幅の広い沈線が数条並行して渦巻文や幾何学的な文様が描かれるなどの特徴をもった土器群が、下荒田遺跡で一〇〇点（下荒田遺跡早期第1群土器）（図24）、川原田遺跡で一点出土している。このなかには隆帯や並行沈線の間に連続した刺突が施されるものもある。これらには、関東の田戸上層式に本来目立つ隆帯文や刺突文を有する、塚田遺跡の田戸上層式で外面のみであった条痕調整が内外面に拡大する、胎土中の繊維が増加するなど田戸上層式の後半～末に並行する要素がみられる。

いわゆる沈線文土器群と前項の押型文土器群との時期的な関係については、伊那市浜弓場遺跡で押型文土器の後半にあたる細久保式・塞ノ神式が田戸下層式と共伴し、高山寺式が田戸上層式と並行する。また、佐久地方でも新水B遺跡をはじめとして、沈線文土器と押型文土器との共伴が指摘されている。御代田町ではまだ両者の積極的な共伴関係は観察されていないが、東北信地方は押型文土器終末期には関東の田戸上層式を中心とする文化を積極的に受け入れていたようである。

鵜ヶ島台式と「早期第Ⅲ群土器」　沈線文系土器群に後続する型式は、早期後半貝殻条痕文系土器群で、子母口式・野島式・鵜ヶ島台式・茅山下層式・茅山上層式の順に連続する。このうちの鵜ヶ島台式土器は塚田遺跡で二三点、下荒田遺跡で五点出土している。

写14　鵜ケ島台式土器

写15　塚田遺跡早期III群土器

とくに塚田遺跡のD—17号土坑では鵜ヶ島台式の完形土器が一個体押しつぶされた形で出土している(写14)。これは胴部に二段の強い屈曲をもつ丸底土器で、二段にわたって鵜ヶ島台式特有の櫛状の幾何学的な区画が細い沈線で描かれ、平行沈線で充塡されている。区画の交点には円形竹管による刺突もみられる。鵜ヶ島台式の口縁部形態には平縁・波状口縁・把手や突起をもつものなどがあり多様であるが、底部は条痕のみが施される粗製土器以外は前段階の野島式とは異なり、平底になるとされていた。ところが塚田遺跡の土器は文様要素・モチーフともに鵜ヶ島台式の範疇でとらえられるものの、依然として丸底であった。鵜ヶ島台式の資料は佐久市後平遺跡、山ノ内町中道南遺跡、大町市トチガ遺跡、高森町広庭遺跡など県下全域で出土しているが、完形資料はその分布圏である中部・関東・東北南部・東海地方のなかでも少なく、本例は野島式から鵜ヶ島台式の変遷を考える上でも貴重である。このほかの土器の文様要素は、区画が微隆起線で描かれるもの、竹管による区画内の押し引きが行なわれているものなど多彩である。

塚田遺跡の土坑や遺物包含層からは、山梨県古屋敷遺跡で古屋敷遺跡第Ⅳ群土器と分類された野島式と共伴する縄文施文の尖底深鉢に類似した土器が出土した(写15)。これらは塚田遺跡早期第III群土器として分類されているが、口縁部に刻目があり内面に条痕が施文されているなどの点で、つぎの鵜ヶ島台式に組成する縄文施文土器である可能性も否定できない。

絡条体圧痕文土器　早期末には、縄を軸にしてさらにそこに縄を巻き付けることでイモムシのような形になった原体(絡条体)

を土器の口縁部に押しつけた絡条体圧痕文土器が流行する。器形はいずれも尖底の深鉢で胎土に繊維を含む。この土器群はおおまかに四段階にわたって変化する。

第一・第二段階には絡条体を横方向や斜め方向に引いた絡条体条痕が地文となる。とくに第一段階は前項で述べた条痕文土器の最後の型式である茅山上層式に並行する時期とされ、実際に貝殻条痕文を地文にもつ土器も含まれている。この段階に信州の縄文人の使う施文工具が貝殻から縄へとその比重を移していったのである。この段階の土器群は牟礼村丸山遺跡・和田村男女倉遺跡・松本市桜田遺跡・岡谷市下り林遺跡・茅野市高風呂遺跡で出土している。坂北村向六区遺跡でも条痕文の変化をもとに土器群の変遷観が示されている。第三段階は入海II式～石山式並行期にあたり、撚糸文が地文に加わる。絡条体条痕は原体を引きずって付けた文様であるのに対し、撚糸文は原体を器面に転がして付けた文様である。この段階の資料は岡谷市膳棚B遺跡・明科町ほうろく屋敷遺跡などでみられる。そして、ここで登場した「転がす」という行為は、つぎの段階で縄文そのものを原体に置換して受け継がれていく。すなわち第四段階には縄文が地文となるのである。

この段階の土器群は、逆T字状の隆帯や縄文地文の連続性から前期初頭の塚田式の母胎になるとされる。これらは塚田遺跡で一六点、川原田遺跡で三〇点、下荒田遺跡で二点、戻場遺跡で完形土器が一点出土している。このうち川原田遺跡出土土器を概観すると、地文のほとんどが縄文であり、口縁部に隆帯が貼付されているものは縦や斜めに垂下する隆帯上もしくは隆帯に沿って、それ以外は外面横位・斜位・山形・弧状に、絡条体が押圧されている（図25）。これらに組成する沈線文土器も両遺跡で報告されている。県内ではほかに岡谷市梨久保23b住・73住上層、松本市坪ノ内遺跡で類似した土器群が出土し、その広がりは県下全域におよぶ。

絡条体圧痕文土器の時期には東海地方を中心に独自の条痕文土器が作られるが、これらは県内にも波及する。坪ノ内遺跡では入海II式・

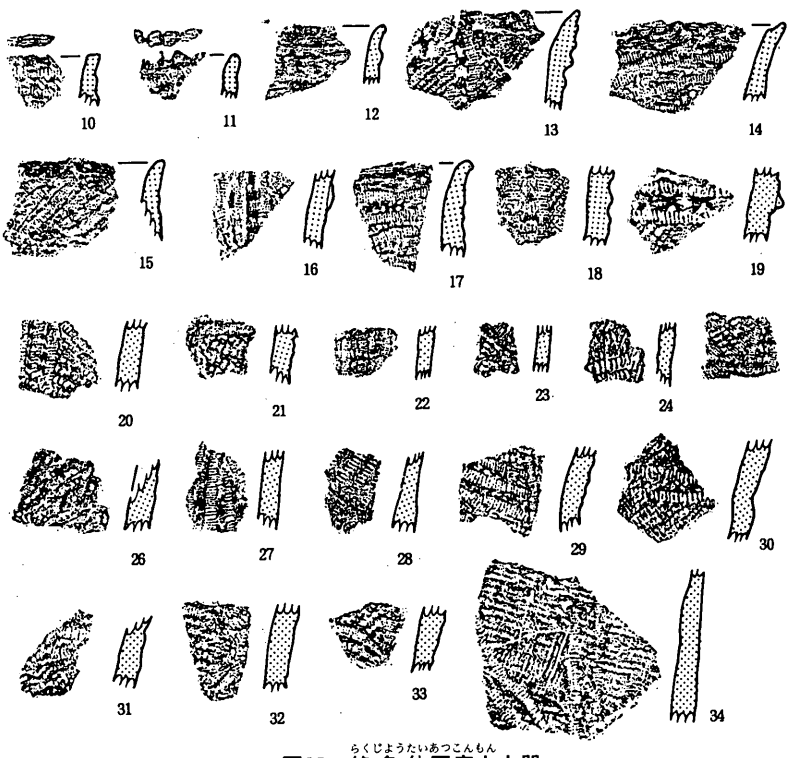


図25　絡条体圧痕文土器

天神山式・塩屋式が出土する。御代田に東海系土器が流入するのは前期からである。いっぽう、絡条体圧痕文土器に組成する沈線文土器に東北南部からの影響が指摘されている。

注1　温暖化は約一万五〇〇〇年前～六〇〇〇年前にかけて徐々に進行するが、一万一〇〇〇年前～一万年前にかけては一時的に寒冷化がおこる。

〈引用・参考文献〉

小松　虔　一九七六　「栃原岩陰遺跡の押型文土器」『長野県考古学会誌』二七

新谷和孝ほか　一九九五　『お宮の森裏遺跡』木曽郡町村会ほか

田中　琢・佐原真編　一九九五　『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』

塚本師也　一九九三　「食料貯蔵」『季刊考古学』44

鶴田典昭　一九九五　「押型文土器及び撚糸文文土器に伴う石器」『長野県考古学会誌七七・七八　表裏縄文から立野式へ』

中沢道彦　一九九四　「塚田遺跡出土早期土器群について」『塚田遺跡』

中沢道彦・贄田　明　一九九六　「長野県北佐久郡戻場遺跡採集の縄文土器について」『縄文時代』七

中沢道彦　一九九七　「縄文早期末「膳棚B式」の設定と「プレ塚田式」の理解に向けて」『川原田遺跡』

長野県考古学会縄文時代（早期）部会　一九九五　『長野県考古学会誌』七七・七八　表裏縄文から立野式へ

長野県考古学会縄文時代（早期）部会　一九九七　『シンポジウム押型文と沈線文』

長野県立歴史館　一九九六　『信濃の風土と歴史』②

馬場保之　一九九五　「立野遺跡の押型文土器」『長野県考古学会誌』七七・七八　表裏縄文から立野式へ

広瀬昭弘　一九九五　「押型文土器及び撚糸文文土器に伴う石器」『長野県考古学会誌七七・七八　表裏縄文から立野式へ』

福島邦男　一九八一　『新水』望月町教育委員会

町田勝則　一九九五　「中部日本における縄文時代石器文化の黎明」『長野県考古学会誌七七・七八　表裏縄文から立野式へ』

安田喜憲　一九八〇　『環境考古学事始』

山田昌久　一九九七　「〝縄文時代〟をとらえなおす」『ここまで解った日本の先史時代』角川書店

綿田弘実　一九九三　「向六区遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』一二

綿田弘実　一九九六　「中部高地における縄文早期末葉絡条体圧痕文土器」『長野県立歴史館研究紀要』二

渡辺　誠　一九八四　『縄文時代の植物食』

第四節　縄文文化の形成―前期

一　前期の遺跡

前期のあらまし　今から約一万年前の後氷期に始まる地球規模の温暖化はさらに進み、やがてヒプシサーマルあるいは気候的最適期とよばれる温暖期を迎える。これは縄文早期の終わりごろから前期にあたり、平均気温は現在よりも二～三度高くなったとみられる。温暖化による急速な海面の上昇にともなって、すでに縄文時代早期の中ごろ（約八五〇〇年前ごろ）には対馬暖流が本格的に日本海に流入するようになっていたが、ヒプシサーマルのころにその流入量と勢いは最高となった。暖流の流入は温暖化と日本海側の多雪化を助長する。このような気候変化の影響を受けて前期（約六〇〇〇年前）の東日本内陸部の大半は、コナラ・クリ・イヌブナ・モミ・ツガなどを中心とする暖温帯落葉広葉樹林におおわれていった。いっぽうで早期前半に九州や四国および本州の南岸に限られていた常緑のカシ・シイを中心にした照葉樹林は早期後半に福井県鳥浜貝塚に達し、その植生を急激に変化させ、前期になると西南日本一円を広くおおっていった（図26）。

東日本の縄文人たちは落葉広葉樹の林の中に住んで、カロリーの高

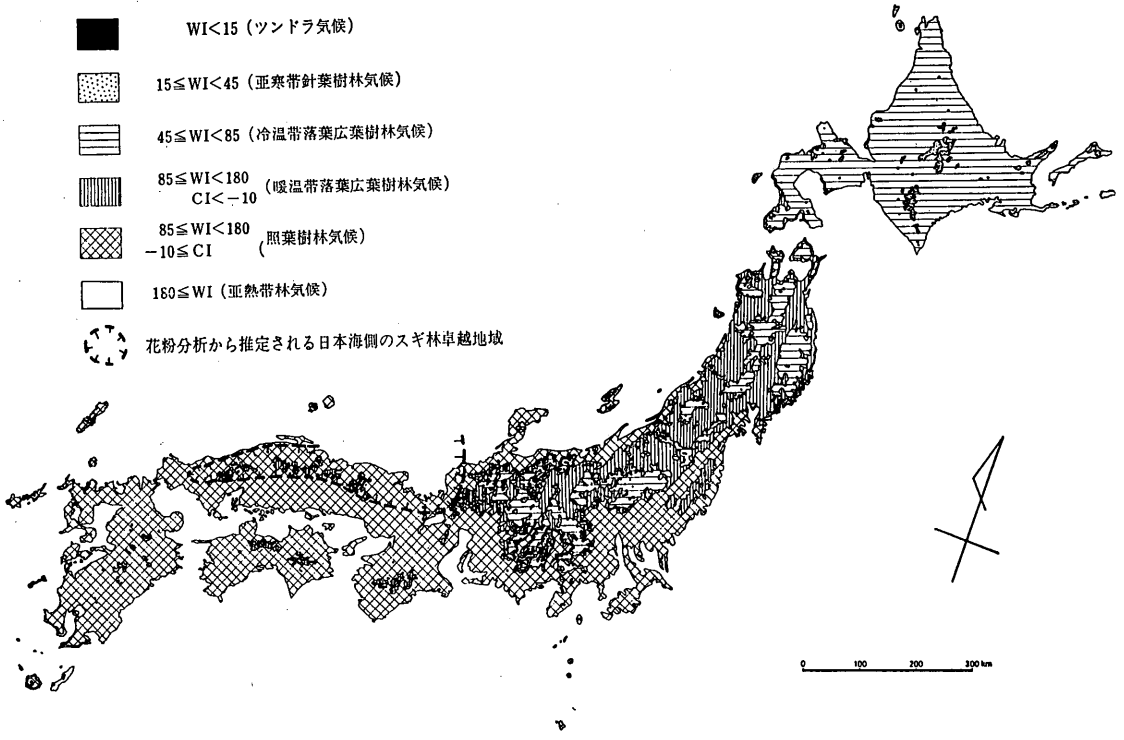
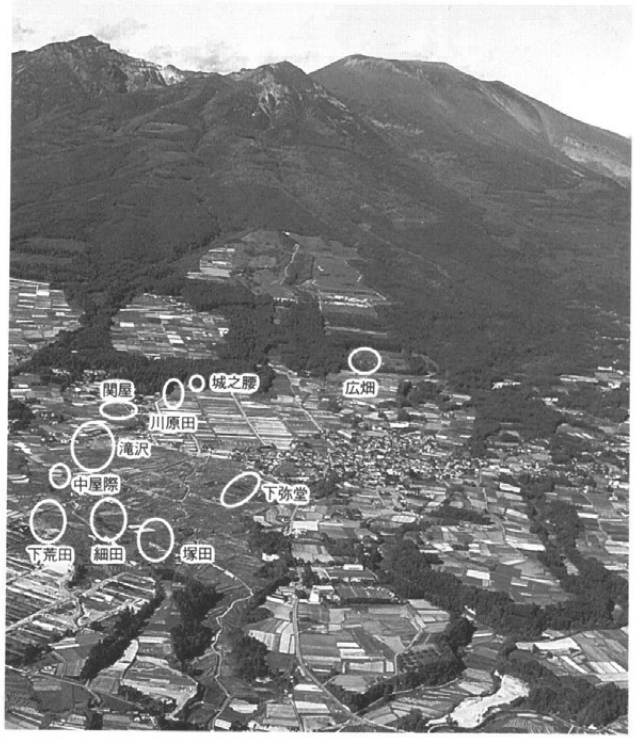


図26　縄文時代前期（6000年前ごろ）の森林帯気候の分布図と日本海側のスギ林卓越地域の分布
WI：暖かさの指数　CI：寒さの指数（『環境考古学事始』より）

い果実を採集し、葉が落ちて見通しの良くなった冬はここを狩場とした。また、海辺では、奥行きの深い入り江が発達したことによって、ヤマトシジミ・ハマグリ・アサリなど生息域を異にするさまざまな貝種からなる貝塚が形成された。

このような豊かな資源に支えられて、食糧を求めての移動の必要がなくなった縄文人は、一か所にしっかりとした住居をつくるようになった。そしてそこに生じた生活のゆとりが急速に縄文的文化を開花させてゆくのである。定住は幾つかの世帯が集まって一か所に住む集住の契機となる。やがて前期も中ごろになると、早くも定型的遺構配置をとる大規模な集落の形成が始まる。大木式土器が主体をなす秋田県上ノ山Ⅱ遺跡では、配石遺構をもつ広場を囲むように大型住居が建て替えたものを含めて十数軒配置されている。これに対し円筒下層式土器が主体をなす秋田県池内遺跡では建物が直線帯状に配置される。このような大型住居が分布する東北地方に対し、長野県の八ヶ岳西南麓では、原村阿久遺跡で竪穴住居からなる集落中央の広場にあたるところに大形の柱穴が四角形に配置されることから、壁立式で平地式の正方形の建物跡と推測される遺構が多数見つかっている。さらに前期の後半には、中央に立石をもつ土坑群と集石群からなるまつりの場が集落中央に直径約一〇〇㍍を超す規模で広がっていた。

一万年の長きにわたる縄文時代の中でも前期のこの発展は、約六三〇〇年前の南九州鬼界カルデラの大噴火のような自然災害を除いては、戦争や搾取という文化の発展を阻害する要因がなかったことも幸いして、環境の変化に勝るとも劣らず急速であったといえる。それではかつて御代田町に住んでいた狩猟採集民はどんな場所に遺跡を残し、どんな生活を送っていたのであろうか。発掘成果にもとづいて見ていこう。



写16　浅間山麓の塩野西遺跡群

塩野西遺跡群

縄文時代早期に塩野地区を生活の場としていた人々は、前期になってついにこの一帯に定住の痕跡を残す。浅間山南麓の独立した尾根の平坦部に広がるこの日あたりの良い緩斜面に立ってみよう。今は良好な水田地帯に変貌しているがおそらく当時は落葉広葉樹の雑木林が広がっていたであろう。地平線を追っていくと、東に森泉山、南に佐久平が広がり、さらにそのむこうに霊

写17　下弥堂遺跡全景　住居跡14軒、土坑16基が発掘された

峰八ケ岳がうっすらと浮かびあがる。ここは今も真楽寺に龍神伝説が残るほどに有名な浅間の第一伏流水が地表に湧き出す地でもある。水場と、薪と食料調達地としての森、この条件を満たす塩野地区はまさに定住村落としての絶好の場であったといえるだろう。

平成二年度から経営の合理化を目的とした県営土地改良総合整備事業にともなって緊急発掘調査が実施され、この地域で計八か所の縄文時代前期の集落が今によみがえった。五年間にわたる調査の結果、連綿とこのあたりに住み続けた祖先の姿が明らかになってきた（写16）。

塚田遺跡

平成三年の調査で、縄文時代前期前葉の住居跡一二軒、土坑二四基、前期中葉の住居跡一二軒が検出された。とくにこの遺跡では二本の撚りの異なる原体を使って縄による鳥の羽状の地文様を表現した羽状縄文が器面に展開し、口縁部に粘土紐が貼り付けられた尖底土器がまとまって出土した。すでに長門町中道遺跡出土土器を標式として設定されている中道式に先行し、関東地方の前期前葉の土器群とは一風変わったこれら一群の尖底土器は、遺跡の名前にちなんで「塚田式」と命名された。いっぽう前期中葉の住居跡からは関山II式と神ノ木式が出土している。

下弥堂遺跡

大字塩野字下弥堂に所在し、標高は八二九～八三三㍍である。平成三年度の調査で、西向きの細い尾根上に縄文時代前期前葉塚田式期の住居跡一四軒、土坑一六基が検出された（写17）。住居跡群は調査区外の台地の縁に向ってさらに連続するよう

図27　下弥堂遺跡の集落景観（想像図）（小山内玲子画）

写18　下弥堂遺跡の調査風景

である。住居跡はまったく重複がない状態で発見されたものの、床面（ゆかめん）に残っていた土器や、人が住まなくなってごみ穴となった時に捨てられた土器の特徴から、全体が二つの時期に分けられることがわかった。その結果、同時に建っていた住居は数軒だけに限定されることが推定される（図27）。また、住居の柱であったと思われる炭化した木片がコナラ属コナラ亜属コナラ節の一種であること、燃料と考えられるものがクリ近似種であることがわかり、遺跡周辺の植生を推定する手がかりとなった。

城之腰（じょうのこし）遺跡

大字塩野字城之腰に所在し、標高は八八三～八九一メートルにわたる浅間山南麓の尾根上に立地する。平成二年度の調査で五軒の縄文前期中葉関山Ⅱ式、神ノ木式期の住居跡が検出されている。このうちJ1号住居跡からは神ノ木式古相の特徴をもつ良

好な一括資料が出土した。

関屋遺跡　大字塩野字関屋に所在し、標高は八六四～八六九㍍である。平成五年度の調査で縄文前期後葉諸磯b式期の竪穴住居が一軒、諸磯a式・b式の土坑が各一基検出された。調査は遺跡の南端部だけであり、集落の主体部はさらに北側へ広がっていると推定された。

東荒神遺跡　平成四年度の調査で縄文前期中葉と考えられる隅丸長方形の住居跡五軒、不整円形の住居跡一軒が検出された。これらはいずれも出土遺物が少なく炉もないが、小ピットが壁に沿って多数掘り込まれていた。遺構外などからは諸磯b式・諸磯c式・十三菩提式土器等が出土している。

中屋際遺跡　大字塩野字中屋際に所在し、標高八三二～八四一㍍である。平成四・五年度の調査で縄文前期中葉と考えられる竪穴住居跡一棟が検出された。遺構外からは、前期前葉の尖底土器・中葉の関山式土器が出土している。

その他の遺跡　縄文中期中葉の拠点集落である川原田遺跡でも前期前葉の住居跡一軒、中葉の住居跡三軒、後葉の住居跡一軒が検出されている。また、縄文後期に主体をもつ滝沢遺跡でも二軒の前期前葉の住居跡が発見されている。

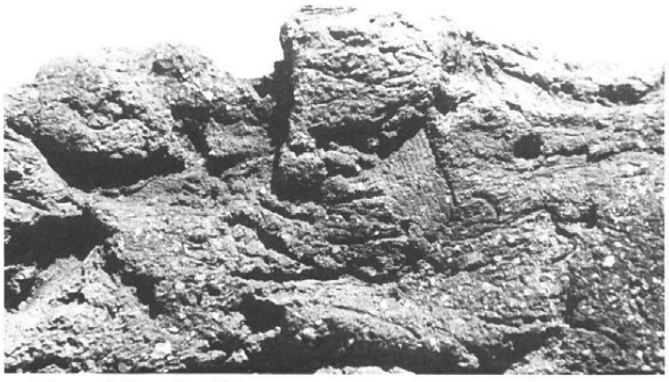
二　生活用具のいろいろ

とんがり底から平底へ　すでにみてきたように縄文早期の土器は総じて尖底土器である（写20・21）。口縁部はゆるやかに外反するか直線的に立ち上がり、全体は砲弾型をしている。ところがその後、前期中葉になると、関東地方におもに分布する関山式も在地の土器とされる神ノ木式も平底になる。そして深鉢形の土器のなかでも、くびれのないカップ状の器形と頸部にくびれをもち朝顔の花びらのような波状の口縁をもつ二つの形が現れる。さらに鉢形土器・椀形土器・台付深鉢・片口土器が登場する。関東地方ではすでに前期前葉の花積下層式で上げ底風の平底土器が大多数を占めるようになっており、浅鉢形土器も登場していた。この器形の分化はさらに進み、関山式では鉢形土器・椀形土器・台付深鉢・片口土器が、前期の後葉諸磯b式になると口縁部が大きく開きそこから内湾する、いわゆるキャリパー形の深鉢形土器が出現する（図28）。

土器を作るための素地となる土（胎土）もこの変化に連動するかのように変化する。縄文早期後半から土器への繊維の混入が始まるが、前期前葉の羽状縄文土器には繊維のみならず岩石鉱物が多く含まれている。前者は、粘土をこねる時やその後の乾燥あるいは焼成の時に、土器にヒビが入ったり、割れたりしないように禾本科植物の細かい繊維をわざと入れたものだといわれている（写19）。前期中葉の関山式で

もこの繊維の混入は継続されるが、含有鉱物がかなり少なくなり、硬質で焼きや器面調整の良い土器が現れる。また、在地の神ノ木式には繊維をまったく含まない土器が登場する。やがて前期の後葉になると繊維土器は作られなくなり、土器の表面に付けられる文様も縄文を転がしたものから竹を割ったような形の竹管状工具を用いたものに変化する。

いっぽう、東海地方では早期末葉から前期にかけて薄手で繊維を含まない尖底土器が作られ前期前葉まで継続する。東海地方に接する南信および中信地方では前期前葉にこの系統を引く無繊維で尖底、かつ縄文を施文せず沈線もしくは粘土紐の添付によって文様をつける中越式土器が成立する。



写19　繊維と岩石鉱物の入った土器

変化の意味するもの　さて、この土器の器形と素地の変化はどんな生活上の変革を意味するのであろうか。そもそも尖底の土器は、外面の炭化物や火を受けたことによる赤色化が胴部の

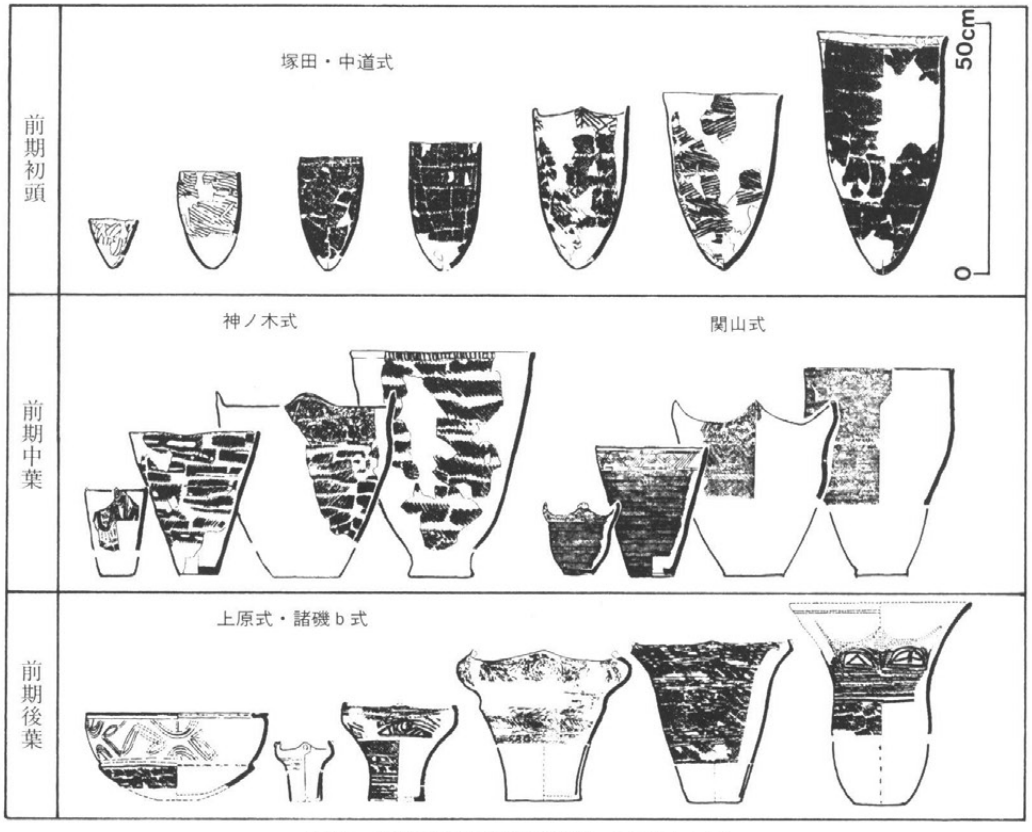


図28　縄文前期の器形の変化（土器1：16）

図29　下弥堂での尖底土器による調理（さかいひろこ画）

中央や上の方に限られること、底が土によって磨滅しており、逆に復元された土器の多くは底が見つかっていないことから、底を土にさした状態で使われていたことが推定される。直立させるにはかならず穴に埋めるか押さえが必要であることを考えると、煮炊きが唯一の用途であったらしい（図29）。中南米には最近も自家製、もしくは土器商から手に入れた土器を用いている人々が多いが、かれらの土器をみると、煮炊き用の土器には花崗岩（ユマ族）・砂岩（モハベ族）など大きな混和材が用いられるという。素地土の中の混ぜもの、すなわち混和材が大きいほど土器は多孔質になるため、外からの熱に耐えやすいというのが混ぜる理由である。また刻みワラ・樹皮片・カンナ屑を入れて、軽くした土器を移動の民であるジプシーが作っていたことも報告されている。前期前葉までの人々は、土器に煮炊きに耐える丈夫さ（岩石を入れる）と作り易さ（植物の繊維）と移動の際に便利な軽さ（植物の繊維）を要求し、形を多様に作りだし、複雑な文様施文をするための柔軟性や器面の平滑さをあまり重視しなかったため、あえて混和材や焼成技法を工夫しなかったといえるのではないだろうか。

ところが前期の中葉になると繊維土器圏の人々も、少しずつ薄く堅い土器を作るようになる。技術革新の背景には、早くから薄手の無繊維硬質土器を作っていた東海地方の技術を、搬入された土器を通じて取り入れたことがあったのかもしれない。しかしながら形の多様さに対する、何が早期にはなかったほかの必要性が生じたのではないだろうか。

前期中葉の関山式期には、城ノ腰遺跡でも塚田遺跡でも柱をもった

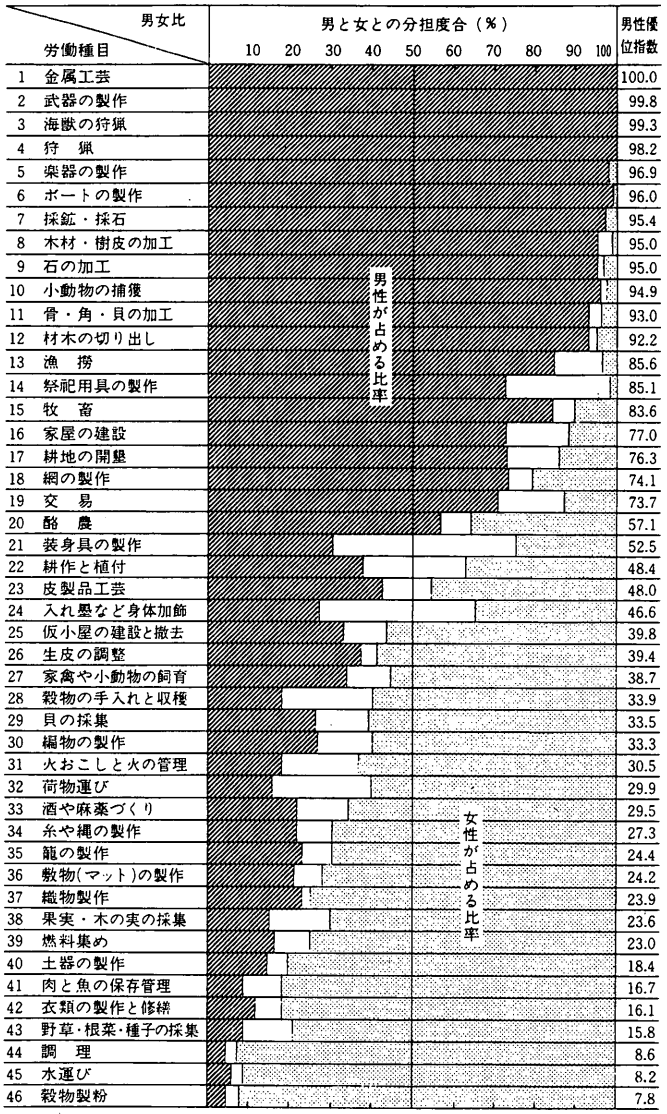


図30　労働の性別分業（マードックの表のグラフ化）

（『日本農耕社会の成立過程』より）

土器をはじめ多様な用途に適した土器が必要になったのだろう。逆に定住によって生活が安定し、他地域の技術を積極的に取り入れたり、独自の形や文様、あるいは混和材の工夫をするゆとりが出てきた。このようないくつかの要素が複雑に絡み合って変化がおこっていったのではないだろうか。

アメリカの人類学者マードックが調査した全世界の民族例によると、土器作りは多くの場合女性の仕事である(図30)。平均寿命が約三〇年といわれる縄文時代の中で、おそらく人生の半分の時間を、子を宿し子育てをすることに割いていたと思われる土器作り人にとって頻繁な移動生活はかなりの苦痛だったに違いない。このような縄文社会の変化にともなって、彼女たちはシンプルな尖底土器を、多種多様な平底土器へと徐々に変えていったのである。そうであれば定住はまさに縄文芸術発展への源であったといえよう。それではつぎに彼女たちの工夫のようすをみていくことにする。

塚田式と前期初頭の土器

御代田町の縄文前期は塚田式土器で幕をあけた。塚田式土器はすでに設定されている中道式土器に先行定型的な竪穴住居が作られ始め、まさに同じころに土器の形もさまざまに分化していくようである。器形の大きな変化はくびれを持った金魚鉢形土器の登場である。現在も土器を用いているフィリピンのカリンガ族の主婦への聞き取り調査によると、くびれのない土器はかき回し易い代わりに保温効果が少ないという答えが得られた。くびれのある土器はその反対である。ここから推測するに、頸部にくびれを持つ土器の登場は土器の用途が煮炊きのみの段階から脱し、ある程度温度を保ちながら貯蔵をするという新しい用途が加わったことを意味するのだろう。おそらく定住が始まり、貯蔵のための動かしやすい平底の

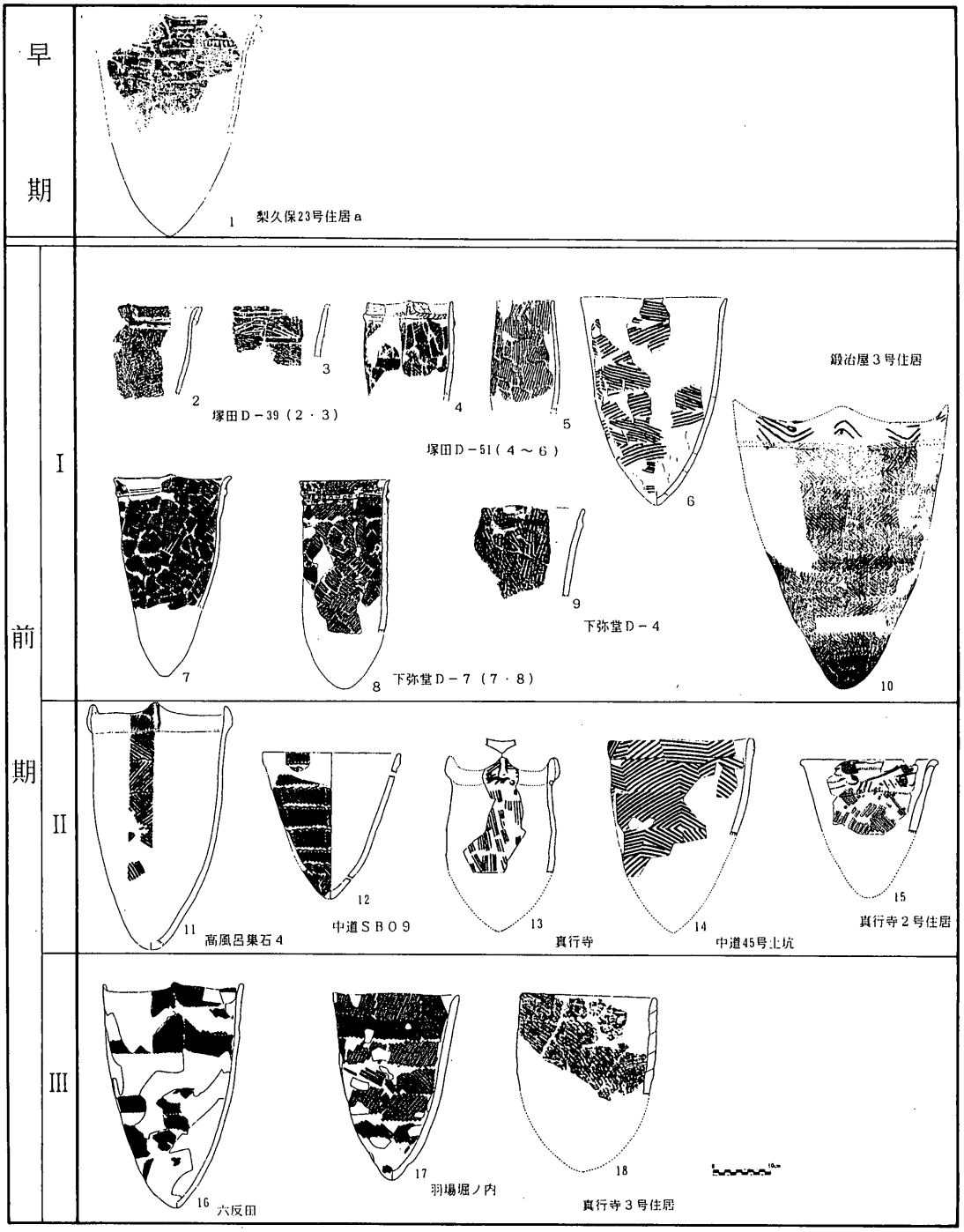


図31　長野県に於ける縄文時代前期前葉の土器変遷図

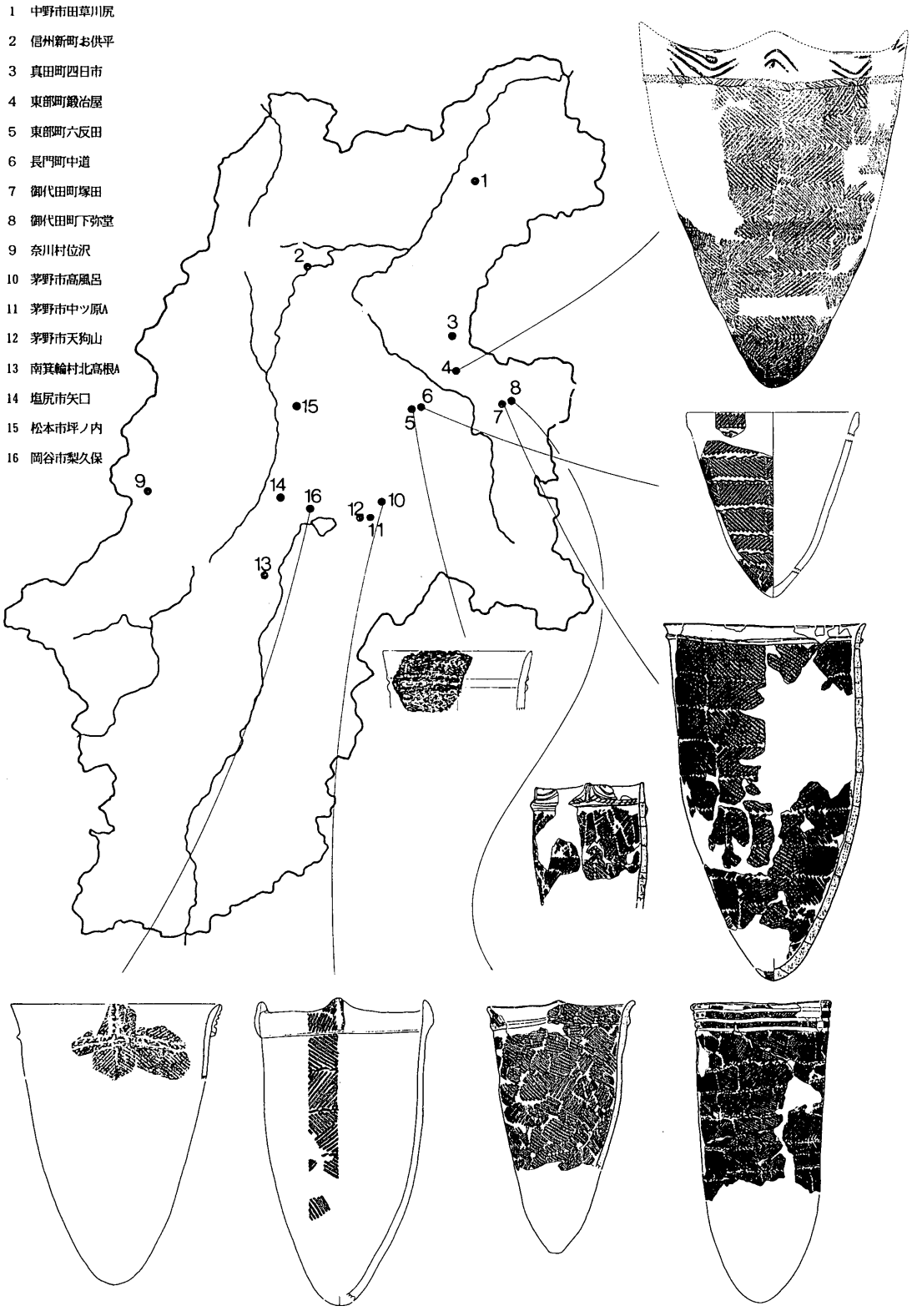
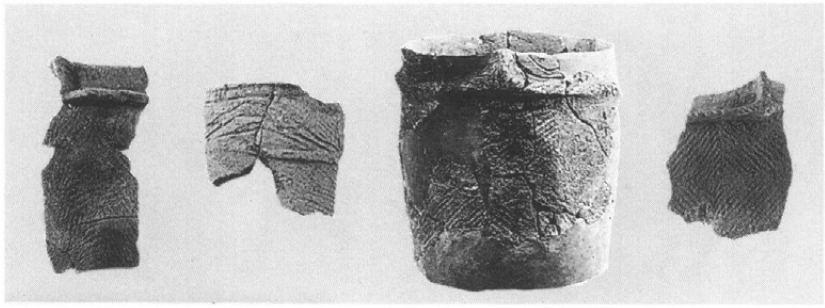


図32　塚田式土器の広がり

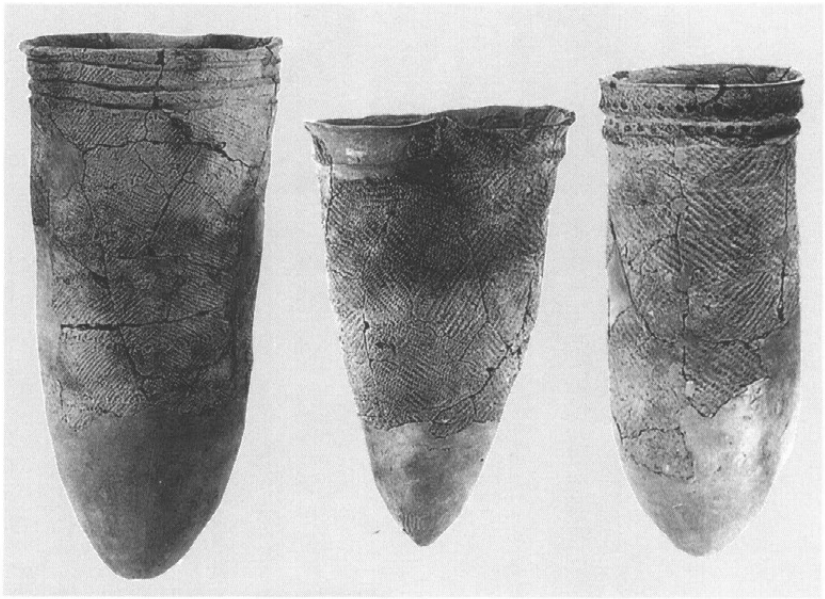
し、下吉井式・花積下層Ⅰ式と並行関係にある（図31）。口縁部に逆T字状などの隆帯を貼り付け、胴部には縄もしくは縄を軸にコイル状に巻いた原体を転がすことを特徴とする（縄文・撚糸文）。塚田遺跡D7・30・34・39・51・124号土坑および下弥堂遺跡J2・7・14号住居、D4・6・7・9号土坑で代表的な土器が出土している。塚田遺跡の土器群（写20）は下弥堂遺跡に多くみられる土器群（写21）よりも隆帯が高く目立つものが多く、時期差を示す可能性がある。東部町鍛冶屋遺跡、長門町中道遺跡をはじめ千曲川水系を中心にした東信地方に濃密にみられるが中・南信までも広がる（図32）。とくに塩尻市矢口遺跡からは一六軒の前期前葉の住居跡が検出され、その大半から塚田式が出土していることは注目される。

塚田式に後続し花積下層Ⅱ式に並行する中道式はやはり羽状縄文をもつ尖底深鉢形土器で下弥堂遺跡J3・6号住居のほか、佐久市栗毛坂遺跡・長門町中道遺跡・東部町真行寺遺跡・武石村江戸窪遺跡・茅野市高風呂遺跡等で出土している。中道式には口縁部が厚くならない尖底深鉢形の土器が後続する可能性が指摘されている。

さて、下弥堂遺跡の尖底深鉢の破片にはベンガラ漆の付着が確認され、国内最古の一例となっている。漆利用に際し、必要な技術をすでにこの時期の人々が身につけていたことは注目される。



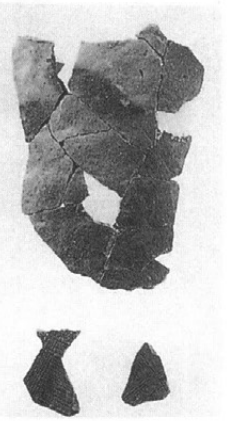
写20　塚田遺跡の塚田式土器



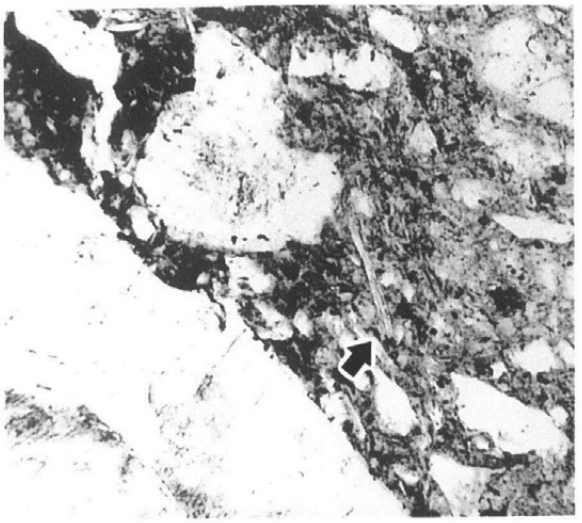
写21　下弥堂遺跡の塚田式土器

東海系土器

縄文時代早期の末葉から前期の中ごろにかけて、東海地方ではたいへん薄く、焼きしまりの強い土器が作られており、中・南信でも文様を異にするものの、同様の特徴を持つ土器が作られた。このような土器が繊維を含み、縄を用いる伝統のある土器群の中に混ざっていると非常に目立つ。塚田遺跡の前期前葉の住居跡から一点、中葉の四軒の住居跡から数点



写22　東海系土器
（塚田遺跡出土）
木島式土器とも呼ばれている。また薄くて硬質なことから「オセンベ土器」の愛称がある。



写23　白雲母の顕微鏡写真
矢印の先が白雲母。中南信から東海地方に広がる領家帯から産出したと考えられる鉱物。白雲母が混じった粘土で焼かれた土器が塚田遺跡で出土した。

ずつ、前葉の土坑から計五点、遺物包含層から三点が出土した（写22）。また、下弥堂遺跡でも六点が出土している。これら東海系土器は東信では東部町の鍛冶屋遺跡、高呂添遺跡などでみられる。前期前葉土器にともなう東海系土器（木島Ⅲ）はやはりたいへん薄く無文で、指先で押したような圧痕やクシや貝殻による斜めの条線がみられる。いっぽう前期中葉までの土器にともなう東海系土器（木島Ⅳ）には擦痕状の調整や格子目状の沈線をもつものがある。それでは塚田遺跡で出土した東海系土器とよばれるものはどこで作られたのだろう。

そこで、塚田遺跡出土の二点の土器の胎土の組成を偏光顕微鏡で調べてみた。顕微鏡をのぞくと、七色に輝く細長い鉱物が十数点ずつ発見された（写23）。これは白雲母といい、中南信から東海地方に広がる領家帯から産出したと考えられる鉱物である。塚田遺跡の人がわざわざ領家帯から混和材を採取して自分の土器に混ぜこんだと考えるよりもこの土器そのものが領家帯のある地域、すなわち中南信を含む東海地方で作られ、はるばる持ってこられたと考えるほうが自然であろう。ほかの土器も肉眼で見る限りは、分析された土器と胎土が類似しているため同様に塩野地区に搬入されたものである可能性が考えられる。

関山式と神ノ木式　城ノ腰遺跡や塚田遺跡で検出された縄文前期中葉の住居跡では、関山式Ⅱ式（組紐盛行期）と神ノ木式が一緒に捨てられた状態で発見されることが多い（図33）。両者は文様施文上の特徴を異にしてはいるが、多くの場合県内の遺跡では共伴している。関山式は、埼玉県の関山貝塚から発見された土器を基準に名付けられ関東地方を中心に分布する土器型式である。県内では佐久市後沢遺跡・望月町平石遺跡・東部町塚穴遺跡・長門町六反田遺跡・明神原遺跡など東北信を中心に分布するが、中南信でも少量出土する。関山式期は長い縄文時代の中でとくに人々が縄の撚り方に凝った時期といえる。縄の極致をきわめようとした人々はおそらく縄の材質にも気を配ったに違いない。縄文時代の縄はたとえば福井県鳥浜貝塚からは大

麻・アカソ・タヌキラン製のものが発見されている。土器の表面を見ると単節縄文のほかに、反対方向に撚った二本の縄を組み合わせたり、四本以上の縄を編んだ組紐を作ったり、縄の末端を利用してループ文を作ったりさまざまに工夫がなされていることがわかる（写25）。また、文様のもう一つの特徴は、縄文の上に竹のような中空の植物の茎を半分に割ったいわゆる半截竹管や棒状工具を用いて菱形等の幾何学的な文様を描くことであった。

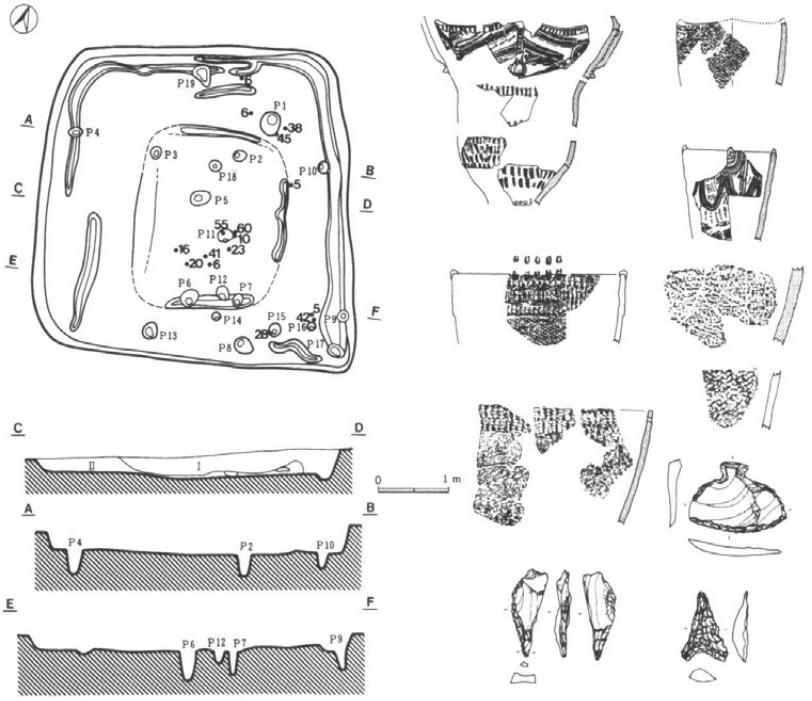
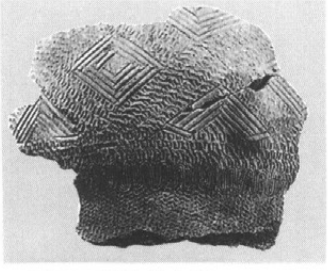


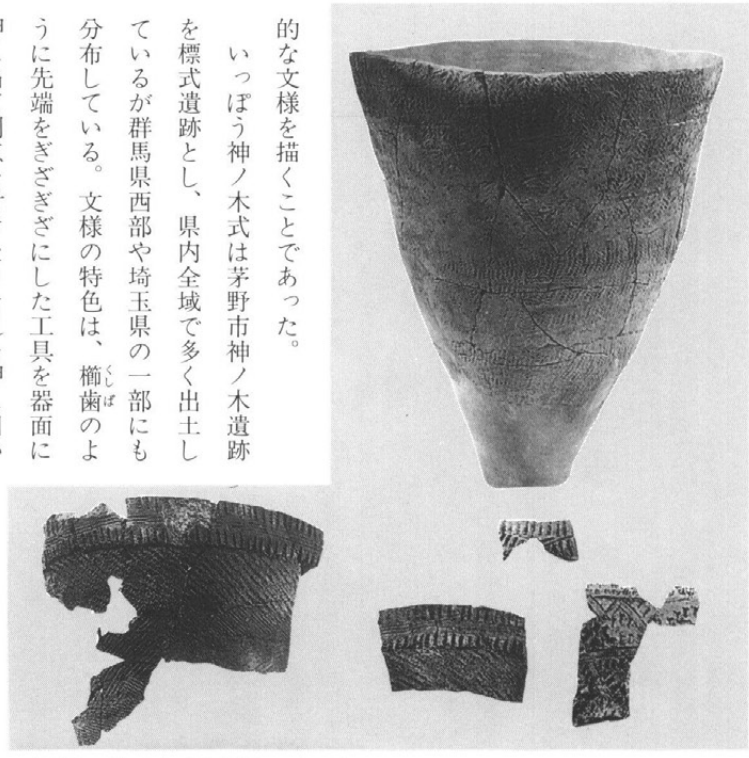
図33　城之腰遺跡のＪ－１号住居と出土遺物

いっぽう神ノ木式は茅野市神ノ木遺跡を標式遺跡とし、県内全域で多く出土しているが群馬県西部や埼玉県の一部にも分布している。文様の特色は、櫛歯のように先端をぎざぎざにした工具を器面に押し当て列点を付けたりそれを押し引いて条線を付けたりすることである。胴部には、撚った縄やそれをさらに束ねた縄が転がされている。しかし器形の変遷、おもな文様を施す位置、半截竹管の採用など関山式に類似する点が多い（図28）。

御代田町の各遺跡では関山式と神ノ木式はなぜ一緒に捨てられているのだろう。



写25　関山式土器



写24　神ノ木式土器のいろいろ

写26　前期前葉土器の内面調整と胎土　左から神ノ木式①、関山式②、両型式の中間③

この時期関東の人々は先に挙げた一部を除いて関山式をおもに作っていた。とすれば関山式はすべて関東から持ち込まれたものなのであろうか。それとも彼女たちは器用にも二種類の土器を作り分けたのだろうか。

塚田遺跡の関山式と神ノ木式は文様以外にも顕著な差異を持っている。それは土器の内面の調整方法（写26）と胎土である。神ノ木式の多くは砂粒を多量に含みナデ調整をしてもザラザラした感触が際だつ。その胎土には浅間火山などを起源とする岩片が含まれることから、この土器は塚田遺跡の人が地元の混和材を用いて作ったものであることがわかった。いっぽう関山式の多くはヨコ方向のナデを基本とし、器面を平滑に仕上げるが、そのナデが丁寧なため光沢を帯びることもある。これらは神ノ木式と比べると際だって岩石鉱物の含有量が少ないものの、地元では産出しない特異な鉱物が含まれていた。さらに関山式の一部と神ノ木式の一部には、両土器型式の中間的なナデ調整、すなわち凹凸が残るような粗雑なナデ調整がなされているものがある。

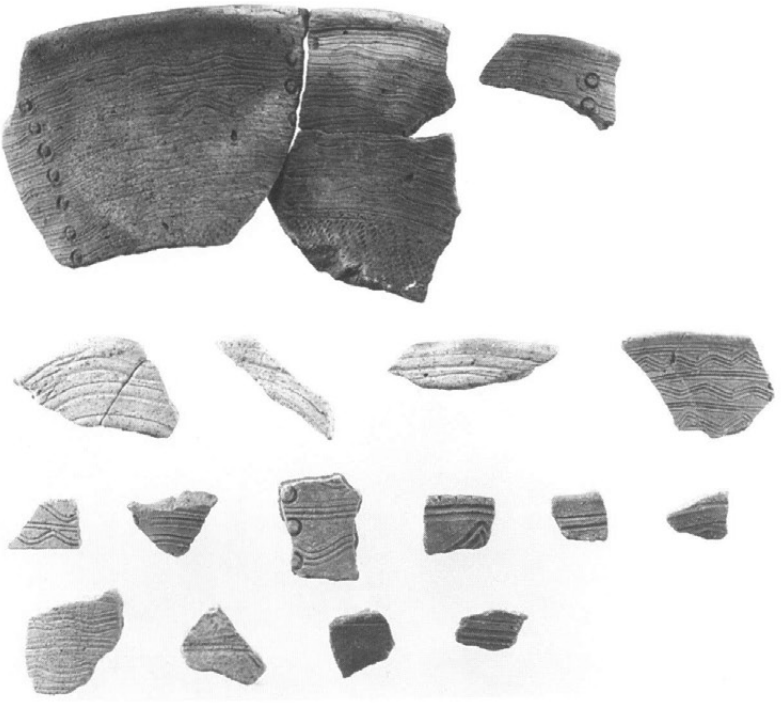
この中間的な調整をもつ土器のうち神ノ木式に属するものの一つは遺跡から一〇㌔以上離れた場所でなければ採れない特徴的な緑色凝灰岩起源の鉱物を多量に含んでいたのである。

ここに地元の人が地元の土で作った神ノ木式、どこか遠くの土で作った関山式、一〇㌔以上先の遺跡から搬入されたか、塚田遺跡の人が一〇㌔以上先まで粘土を採りに行って作った神ノ木式、という三者が確認されたことになる。遺跡全体では、関山式は神ノ木式と同じくらいの比率で出土しているため、すべての関山式が本当にどこか遠くで作られ持ち込まれたかどうかは今後の課題であるが、少なくとも今後、調整と胎土を丹念に比べることによって、将来的には信州のこの二型式並存の秘密に迫って行かれると思われる。

諸磯式

神ノ木式に後続する有尾式は塚田遺跡で一点出土したにすぎないが、続く前期後葉になると関屋遺跡で諸磯a・b式、東荒神遺跡では諸磯c式および前期最終末から中期初頭の土器が出土している。諸磯b式の特色は関山式と同様の半截竹管を押し引いた連続三日月状の文様と細い粘土紐を貼り付けた浮線文、すなわちソーメン状の貼り付け文様の多用である。これらには諸磯a式から連続する櫛歯状工具もしくは半截竹管による波状文をもつ土器がともなう（写27）。この時期になって土器に繊維を混入することはなくなり、このような手の込んだ装飾のほかに、土器への着色が流行する。縄文前中期の朱色はベンガラ（酸化第二鉄）を、黒色は鉄粉または水酸化鉄もしくは炭素を発色源としたと考えられる。山形県押出遺跡で

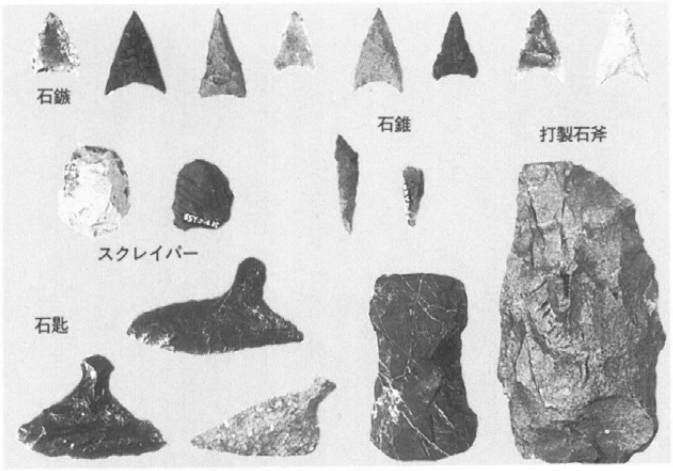
は前期後葉の、鳥浜貝塚では前期前葉から、これらを生漆に混ぜて顔料を作り、土器や木製の櫛、木製の鉢に塗った優品が出土している。そのほか豊猟を祈願したものか、あるいはアイヌの熊のように動物が神格化されたものか、猪などの動物を模した把手を土器に付ける工夫もなされた。器種も深鉢のほかに浅鉢、壺や、口縁部に沿って一列の穴が穿たれた縁孔土器などが登場し、さらに土器がさまざまな用途に分化していったことを物語っている。このように諸磯式期は縄文人の生活がより複雑化し、技術的にも、文化的にもより高度な発展がみられた時期であった。



写27　関屋遺跡1号住居跡の土器

石器の様相

石器は人々の自然資源獲得のようすをよりくわしく示してくれる。生活に即した道具である以上、意図する目的のためにもっとも使いやすい形に作られるのであろうが、元々多様な用途をもっている場合がある。また、使えなくなるまで何度も刃を再生しながら大事に持ちつづける石器もあれば、壊れたらすぐに捨ててしまうものもある。このことを頭に置いて下弥堂遺跡の前期前葉塚田式期の石器をみてみよう（写28）。



写28　下弥堂遺跡の縄文前期前葉の石器群

下弥堂遺跡では、狩猟具である石鏃、なかでも凹形の基部をもつ石鏃がかなり多い。このような形の石鏃はペン先状に切り込まれた矢柄の先に直接はめ込まれ漆などの接着剤によって固定されて矢と

図34　石匙で草を刈る（さかいひろこ画）

なる。狩人たちは石鏃のみならずこの矢柄作りにも時間をかけ大切にしていたため、射損じた矢も何とか探し出してムラに持ち帰ったらしい。そのため小さくなるまで使われ、捨てられた石鏃が集落で多く発見される。石鏃が小さい理由は狩猟がかなり盛んであったことの現れともいえる。石材は主にチャートか硬質頁岩で、前期前葉以降のように黒曜石が使われることはまれである。弓矢の発達は落葉広葉樹の森の中で小型獣や鳥を狩猟対象とする縄文人の食生活を格段に豊かにした。しかし、かれらはそれを決して人間にむけることはなかった。これはその後、まさに現代にいたるまでの人々とかれらのもっとも大きな違いである。

　そのほかの石器では万能ナイフである石匙、スクレイパー、骨や石などを割る際のくさびと考えられるピエスエスキーユ、文字どおり錐としての機能が推定される石錐も一定量出土している。これらは加工具として生活の必需品であったことがわかる。とくに本遺跡の石匙の一つは、刃に残った痕跡（使用痕）の観察からイネ科等の植物を切り取るときに使われたことがわかった（図34）。これらも硬質頁岩で作られることが多い。

　いっぽう調理具では磨石が多く、偏平な石材をそのまま利用した石皿も出土している。落葉広葉樹の森の拡大にともなってナラ・クヌギ・クリなどの植物質食料が増え、木の実採集とそれらをすり潰す作業が盛んであったことを示している。これに対し木材伐採、土掘りもしくは加工具と考えられる打製石斧は三点で、縄文中期に比べるとかなり少ない。このような石器の種類と量の傾向は前期中葉になっても大きくは変わらない。ただ、石皿は中央にくぼみをもった円形のものが塚田遺跡で出土し、敲石も目立ってくる。

石製装身具

　早期末葉から前期に大流行する装身具に玦状耳飾りがある。これは滑石や流紋岩など光沢のある素材で作られた偏平環状の形状に加え、大阪府国府遺跡から縄文前期の女性人骨の両耳部から出土したことから耳飾りであることが確認された。石材が豊富な北陸地方には富山県極楽寺遺跡をはじめ多くの原石や未製品の残された遺跡があるが、長野県内では大町市上原遺跡や松川村有明山社遺跡がこれらの製作工房として知られている。耳飾りの形態は時期ごとに変化し、とくに前期末葉は縦に

写29　玦状耳飾り　塚田出土、遺跡粘板岩製

細長い三角形のものも現れる。形態から推定すると普通で五㍉前後、前期末葉のものは三㌢以上もの大穴を耳にあけなければ装着できない。アジアでも、中国の縄文早期に並行する時期のものを筆頭に各地で出土している上、現在でも日常耳飾りを付けている人が多い。たとえばモンゴルやアイヌの人々の間では、母がまだ小さい娘にピアシングを施すという。さらに南太平洋には徐々に耳飾りを大きくして穴を広げていく慣習もある。耳飾りの装着は入れ墨や抜歯と同様に、苦痛をともなう美の追求であったのだろう。

さて、塚田遺跡の前期中葉のJ9号住居からは、粘板岩製および蛇紋岩製の抉状耳飾りが一片ずつ、検出された(写29)。J9号住居は一二軒からなる当該期集落の中央に位置することからもこれを付けていた人がムラで特殊な性格をもっていたことが推定される。ムラの祭祀をつかさどったシャーマンなどの特殊な女性が住んでいたのだ。そのほか、中屋際遺跡では墓と思われる集石土坑のなかから側面に刻みを持った垂飾品が出土している。

三　集落のようす

浅間山麓　サンライン地帯　軽井沢町は浅間の火砕流に覆われているため小谷ヶ沢遺跡出土土器のよ

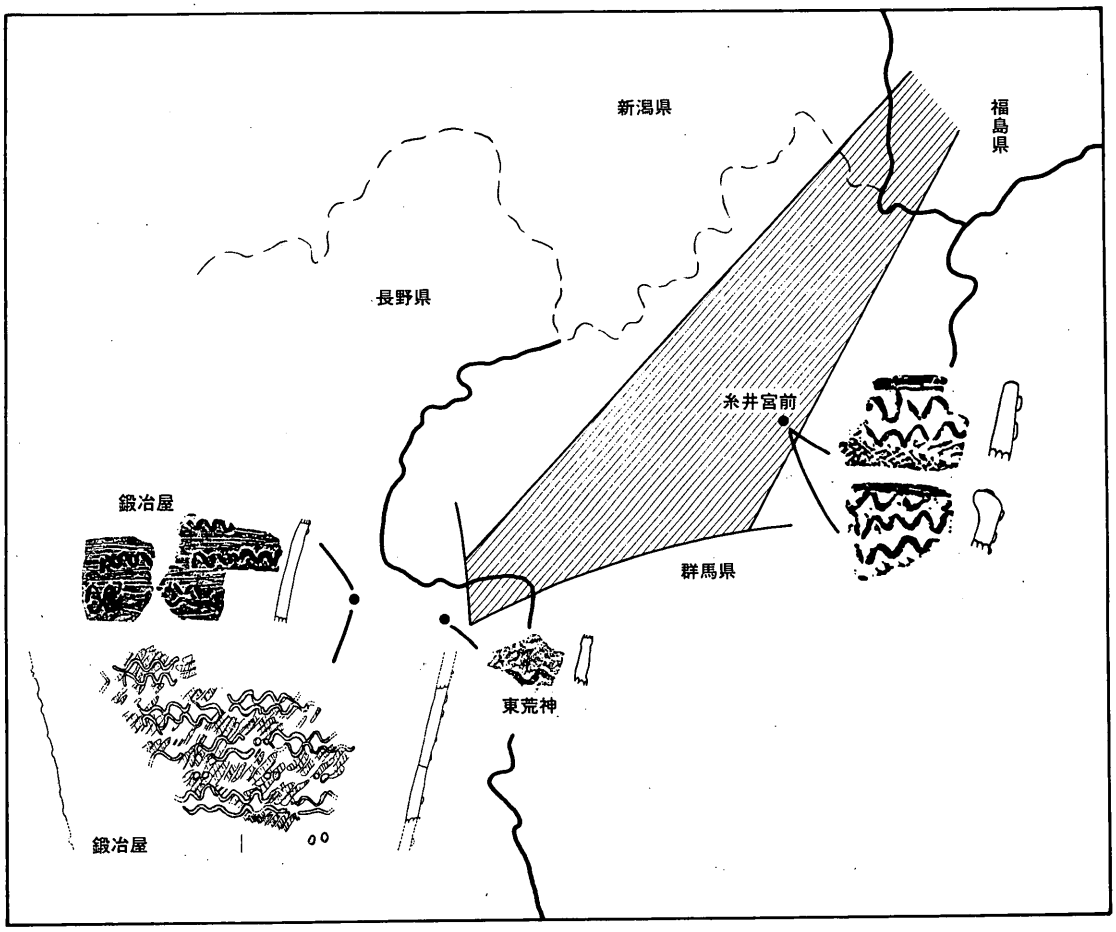


図35　大木5式の流入

うな火砕流下の資料の増加を待つよりほかはないが、御代田町塩野から小諸市郷戸、東部町鍛冶屋、真行寺、大門田、真田町四日市へと続く、浅間をはじめとする東信火山列の山麓の標高六〇〇～九〇〇㍍の地帯は、縄文前期から中期へと続く格好の居住地であった。人々はここで山麓の豊富な湧き水と山の幸、それらの注ぐ千曲川の川の幸を利用し拠点的な集落を作っている。千曲川の水運や北の山々を通じて、浅間の裏側、さらにその北の東北の人々との交流をも行なったらしい。前期後葉の東荒神遺跡の大木5式（図35）、中期の滝沢遺跡の大木7a式・川原田遺跡の大木8a式・西駒込遺跡の大木8b式などの土器そのものもしくは土器作り上の情報の散発的流入はそれを物語っている。

縄文前期の住まい　下弥堂遺跡および塚田遺跡の縄文前期前葉の住居跡は不整円形もしくは隅丸方形で床面のしまりが弱く掘り込みがかなり浅い。このうち塚田遺跡の住居はいずれも炉がなく、規則的な柱穴配置を持たない。下弥堂遺跡のものは中央に地床炉もしくは石囲炉をもつ五から八平方㍍の小型住居と一〇から一五平方㍍の中型住居がある。まれにJ14号住居のように深く規則正しい配置の柱穴を持った二五平方㍍の大型の住居も現れる（図36）。この傾向は群馬県の三原田城遺跡に代表される花積下層期の住居跡でも同様である。このような住居跡の多くにみられる構造上の貧弱さはなにを現すのだろうか。千島からカリフォルニアにかけての北方狩猟採集民の住まいをみると、常に定住せずに移動生活を送る人々はテント式住居に住みつづけるが、冬のみにある場所に定住する人々は寒さを避けるために家を竪穴式にしたり屋根を土で覆う工夫をし夏は簡単なテントや風除け程度の小屋に住む場合が多い。縄文前期初頭のように柱の不明瞭な竪穴住居はドングリや鮭を主食にするカリフォルニアインディアンの冬の住居にみられる。モノ族の「浅い竪穴 shallow excavation の上に棒を円錐型に組んで枠とし、これを柴、樹皮、草等で葺いたもの」な

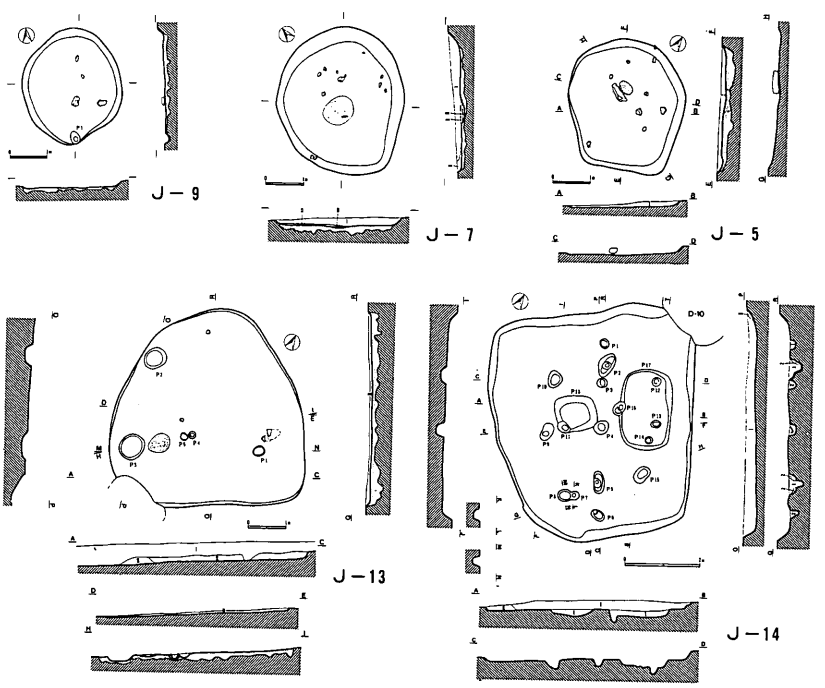


図36　縄文前期前葉の住居跡のいろいろ（下弥堂遺跡）（1／200）

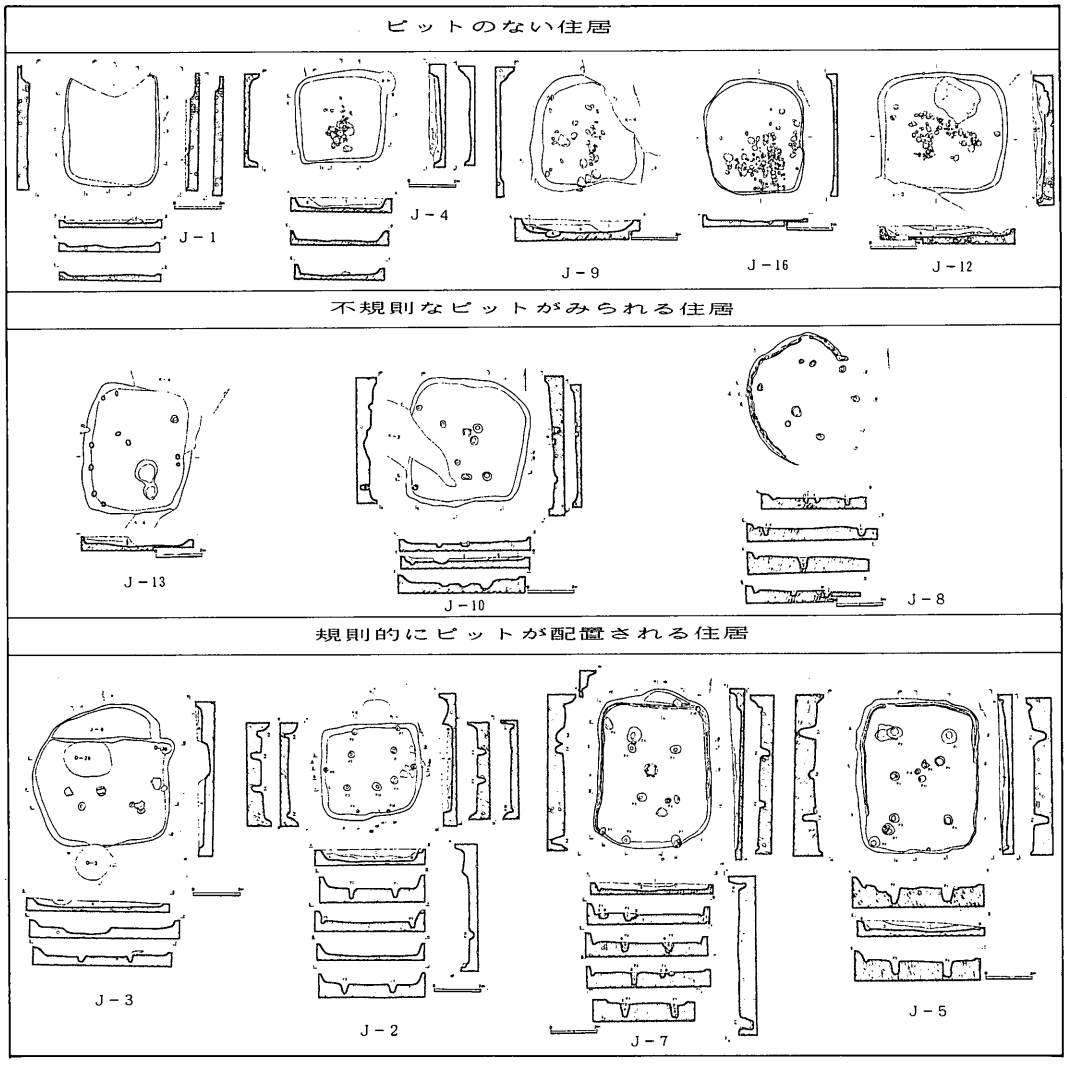


図37　縄文前期中葉の住居跡のいろいろ（塚田遺跡）（1／320）

どはとくに簡素、粗雑な作りである。縄文前期は現在より二、三度気温が高いとはいえ標高八〇〇㍍の冬はやはり寒い。これらの事例から類推すると前期前葉の人々はかれらの簡素な住居が持ちこたえられるくらいの短い期間すなわち冬の定住を始めたのではないだろうか。

内外の民族例から村の建物の種類を観察すると、家族が寝食をともにするいわゆる住居のほかに娘小屋、月経小屋、産小屋、若者小屋、作業所、納屋、集会場などの付帯施設がある。これらは社会の複雑化の度合いや地域の環境によってその有無に差がある。そして機能によって面積や上屋構造、炉などの施設の有無が決定される。下弥堂遺跡の住居跡の形や炉の違いは一定期間の定住にともなって、単に「寝起きする」以外の施設が必要になったことの現れかもしれない。下弥堂遺跡では集落の外縁部を四棟の炉のない住居がとりまくが、これらは通常炉のある住居に住んでいた人が使った付帯施設とも考えられる。

塚田式に後続するとされる中道式期の長

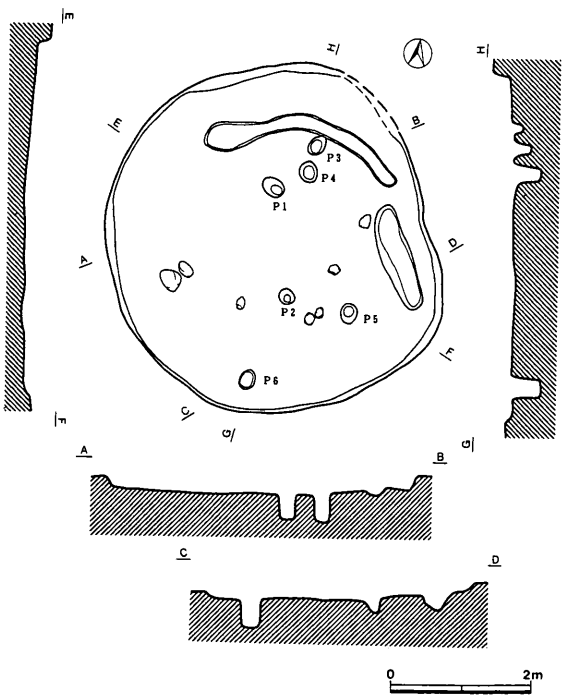


図38　縄文前期後葉の住居跡（関屋遺跡）

門町中道遺跡第9号住居は壁溝と床面を掘りくぼめた地床炉をもち、整った隅丸長方形を呈しているが、同時期の真行寺遺跡や高風呂遺跡でも隅丸長方形の住居跡が増加している。さらに関山式期になると住居跡の形は隅丸方形や隅丸長方形になり、前期前葉よりも掘り込みがかなり深くなる。このことから前期前葉から中葉にかけて住居の形が不整円形から隅丸長方形へゆるやかに変化していることがわかる。塚田遺跡と城之腰遺跡の関山・神ノ木式期の住居跡はやや不整形のものもあるがいずれも隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈し、約五〇㌢の深さのものもある。一部の住居内には壁際の溝が作られる。また、塚田遺跡J7号住居のように石囲炉を持ち、規則的に配置された柱を持つ住居跡も検出されている(図37)。このような主柱穴によって梁と桁を支え、屋根を地面まで葺き下ろす形態のほかに東荒神遺跡では竪穴の内壁に沿って柱を密着して並べ立てている住居が検出されている。これは壁立式住居といわれ、側壁を上方に向けて立ち上がらせる形式である。このような形態は東北、関東地方で前期のはじめから前半を中心に流行する。住居構造の複雑化や集落の拡大は、通年居住を示す可能性が高いと思われる。いずれにしても前期前葉より明らかに住居作りに時間をかけている。

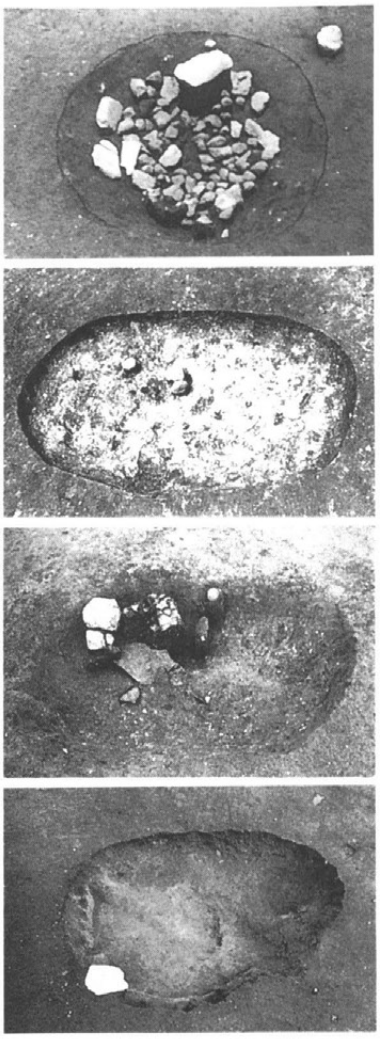
前期の後葉の住居跡は関屋遺跡で、炉を持たないが整った円形のものが一棟検出されている(図38)。そのほか六反田遺跡や丸子町淵ノ上遺跡等、同時期の住居跡もそれまでの方形を目指していた方向性をガラリと変えて、円形を志向するようになる。この時期、群馬県ではかなり集落が増加し中央広場をもつ継続性の高い集落が登場するが、住居の形はやはり諸磯期を通じて隅丸方形、楕円形などに変化していく。諸磯期の土器の文様の多様化が縄文中期への方向性を示すように住居形態も中期と同様の円形に変化し、構造も複雑化していくのであろう。

土坑　塚田遺跡では縄文前期前葉の土坑が二四基、下弥堂遺跡では一六基が検出されている。これらは直径一・五～二・五㍍程度の円形もしくは楕円形を呈し、深さは約四〇㌢と浅めである。それらは塚田式土器が残されているもの（D―3・D―7）、石がぎっしりつまっているもの(D―4)、何も残されていないものなどいくつかの類型に分けられる。とくにD―4号土坑は長軸が二㍍、

深さが四〇㌢前後で拳大の礫が一二〇個あまり詰まっていた。石の表面は焼けておりタール状の付着物も認められることから、食べ物を焼け石とともに穴に埋め込んで蒸し焼きにする石蒸し料理に使われたものと推測される（図39）。

前期の集落の景観

下弥堂遺跡の前期前葉の住居跡から出土した塚田式土器は、I口縁に低隆帯をめぐらすものと、II肥厚口縁のものにわけられるが、これを順に第I期と第II期とすると、第I期は住居七軒に土坑六基、第II期は住居四軒に土坑一基という区分ができる。大まかに尾根上のより外縁部に住居が、内側に土坑が配置されるという構成をとり、小規模ながら数軒の単位で集落が営まれていた景観が復元された（図27）。いっぽう、塚田遺跡の前期中葉の一二軒の住居跡の分布をみると、北群・中央群・南群という三つのまとまりがあるらしい。これらの一部が重複することから一時期にはやはり三～五軒程度のまとまりが想定される。



写30　下御堂遺跡の土坑
上からD－4号、D－1号、D－7号、D－5号

移動か定住か

現在、私たちは一生の間にどのくらい引っ越しをするだろうか。かりに縄文前期の前半になって季節的に移動する生活は終わったとしても、縄文集落の問題を考える場合まずこの引っ越し問題が浮上する。私たちの移動には仕事や勉強の都合があるが、縄文人もやはり移動は資源の消費を適正な規模に抑えるという生活の根幹を左右する要因によって、ある程度の年数の後に移動する可能性が高い。しかしながら私たちが土器型式にもとづいて認識できる時間幅は非常に長くならざるを得ないし、かりに土器型式がどんなに細かくわかれても、人の一生のそれも一年単位を割り出すことは不可能に近い。それではたとえば合計二〇〇年分にあたる三土器型式の住居跡が見つかっている集落は、「二〇〇年の間人々はまったくどこへも行かずに完全に定住していた」と言い切っていいものだろうか。

石井寛は一つの住居が廃絶された後に、その場所に土が流入する間の居住者の動向に着目して移動の可能性を指摘した。また林謙作は十九世紀のアイヌの世帯動向や、秋田県鹿角市の集団墓地遺跡である大湯環状列石群における「埋葬区」の時期的な変遷からムラの人々が、世帯ごとに各々場所へ移動したり転入する事実を見いだした。もし移動が集落の複数の世帯を単位とするならば、ある土器作りの癖をもった複数の土器作り人の単

位が一生の間にいくつのムラに住んだかを、土器の粘土の特徴や土器作りの技術を細かく分析することで割り出すことができればさらに議論がすすむと思う。

詳細は第八節に送るが、日本列島の人々は大まかにI頻繁な遊動生活から、II季節的（たとえば冬の）な定住　III季節を越えた一定期間（たとえば一〇年くらいは一地域に拠点を置く）の定住、IV完全な（ときには数世代をも含む）定住というプロセスで居住形態を変化させてきたと考えられる。このような歴史の流れの中で、縄文前期の少なくとも御代田町周辺地域の居住形態はIIの成立と、IIからIIIへの移行期として位置づけられよう。

図39　石蒸し料理の復元（鳥居亮画）

〈引用・参考文献〉

石井　寛　一九七七　「縄文社会における移動と地域組織」『調査研究集録』2

川崎　保　一九九六　「「の」字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて」『長野県の考古学』

児玉卓文　一九八四　『長門町中道』長門町教育委員会

小林正史　一九九一　「土器の器形と炭化物からみた先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』一

下平博行　一九九四　「塚田式」の設定とその様相について『塚田遺跡』

STEPHEN PLOG　1980　『STYLISTIC VARIATION IN PREHISTORIC CERAMICS』CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS

都出比呂志　一九八九　『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

贄田　明　一九九四　「縄文前期中葉の土器について」『塚田遺跡』

日本考古学協会一九九七年度秋田大会実行委員会　一九九七　『縄文時代の集落と環状列石』シンポジウムI資料集

林　謙作　一九九五　「縄文時代史24　縄文人の集落（4）」『季刊考古学』五〇

水沢教子　一九九四　「塚田遺跡出土土器の胎土について」『塚田遺跡』

安田喜憲　一九八二　「気候変動」『縄文文化の研究』一

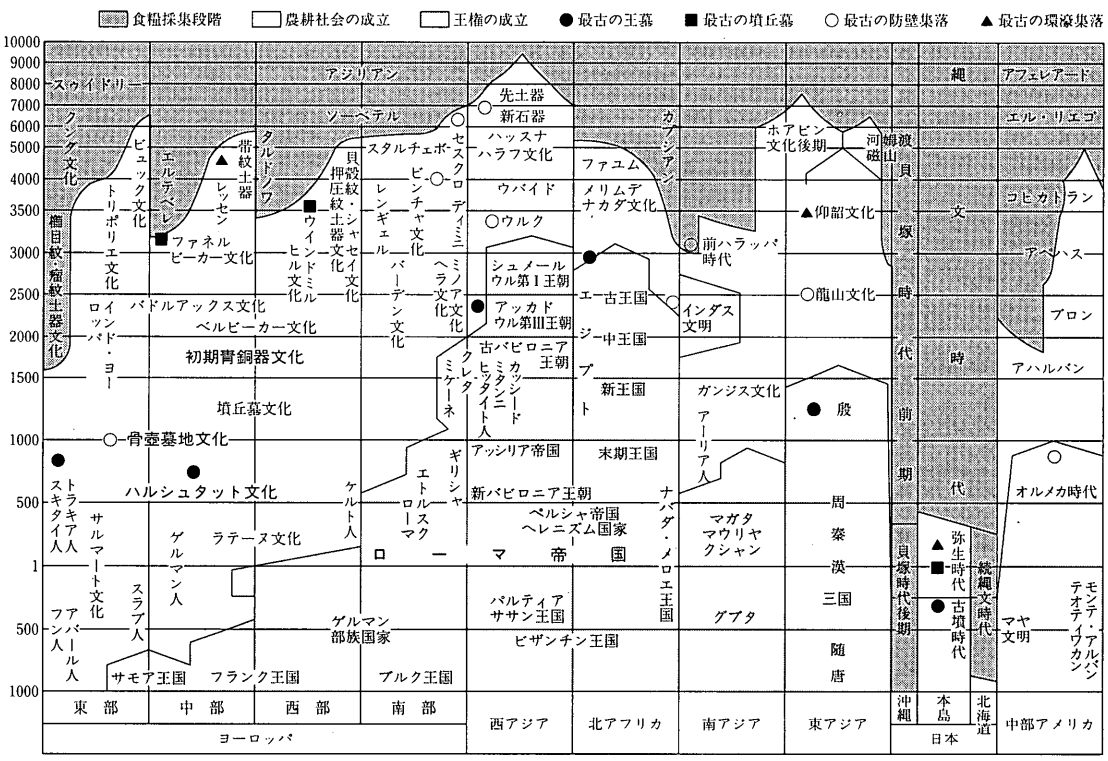
渡部　仁　一九八一　「竪穴住居の体系的分類・食物採集民の住居の生態学的研究（I）」『北方文化研究』第一四号

第五節　縄文文化の爛熟—中期

一　中期の遺跡

縄文中期の視座　縄文中期にあたる五〇〇〇年前からの約一〇〇〇年間は、世界史的には文明の転換期にあたる。メソポタミア地方の都市は王制の開始を機に都市国家となり、それらは領土拡大のために抗争を繰り返すようになる。上下エジプトを統一したメネスが、エジプト古王国の第一王朝を築いたのもこの時期である。そしてインドでは、城壁にかこまれた都市を中心にインダス文明がおこる。

世界史の教科書を開くと、文明の始まりは腕力、ひいては武力をもった人間が王として君臨する社会として姿を現す。かれらの文化はもちろん約一万年前にすでに始まっていた農耕を、おもな生産基盤とする長い定住（ていじゅう）社会の中で、醸成されてきたものであったろう。それでは本来生活環境に即して選択されるべき組織的な農耕の採用だけが、文化の発展の主要因となるのだろうか。また、豊富な食糧資源に支えられた人口増加によって促進された人々の接触は、常に争いと緊張を、そして武力社会を生み出すのであろうか。



世界史のなかの日本列島　食糧採集段階が異常に長かった日本列島は、水田稲作が始まると、環濠集落・墳丘墓がまもなく出現、やがて王権が成立し、最古の王墓が姿を現す。その間は約600年、弥生～古墳時代はまさに日本歴史における「古代化」が急速に進んだ疾風怒濤の時代であった。

図40　世界史年表

同じ五〇〇〇年前の日本列島にも高度な文化が花開いた。これは一万二〇〇〇年前から積み重ねられてきたさまざまな方面の技術が、ゆっくりと洗練され、その基盤の上に展開したものである。そしてこの文化を生みだした社会は、大規模かつ組織的な戦争によって他者に危害を加えたり、一握りの大きな武力をもった人間のために、他の多くの人々が搾取されるような構造をもたない分、日本列島のその後のどの時代よりも個々人に文化的生活を享受させた。

気候の冷涼化と遺跡数の増加　縄文中期のはじまりは、およそヒプシサーマルの高温期の終りの時期にあたる。平均気温は早期末・前期初頭をピークに下降し始め、中期になると現在よりも二度程低くなった(図16)。安田喜憲によると同時に湿潤化がおこり、日本海側では、ブナやスギ林が拡大するが、中部山岳の太平洋側から関東西部にかけては、まだクリ・ナラ主体の落葉広葉樹林が維持されていたらしい。さて、長野県内の遺跡数は一九八一年の調査で前期九九八から中期三一五八へと一挙に三倍以上も増加する。この増加率は全国的にも抜きん出ており、ある意味で縄文中期は中部高地が列島の人々の活動の中心となったと考えられる。ただし活動の中心の意味は、単純に人口が増加したばかりでなく、同一集団が残した遺跡数が多くなったという理解も可能である。

縄文農耕とその可能性　かりに遺跡数の増加を人口の集中、一つの集落内の遺構数の増加を同一集団の占地の継続化と捉えた場合、人々の食糧はクリ・ナラ類を中心とした採集活動だけでまかなえたのだろうか。藤森栄一は狩猟具の稀少化と、土掘り具や除草具と推測される石器の増加、貯蔵用土器の発達など道具の組み合わせにも注目し、この時期すでに農耕が行なわれていた可能性を指摘した。ところが当初は、植物の種実そのものや農耕を裏付ける遺構の検出がこの縄文農耕論の大きな課題とされた。しかしながらその後、低湿地遺跡の調査や水洗フルイの導入によって植物の検出例が急増している。大石遺跡・荒神山遺跡のエゴマをはじめとし、ヒョウタン・リョクトウ・オオムギなどは中期以前にさかのぼれる。また縄文前期の千歳市美々貝塚北遺跡では、畑の跡と推測される遺構が樽前山火山灰の下から発見されて話題をよんだ。

さらに青森県三内丸山遺跡では円筒下層式土器が現れ始めるころに、ブナ・ミズナラを主とする落葉広葉樹林が、クリを主としヒョウタンなど外来系の栽培植物を含む植生に変化する。辻誠一郎はこれを火入れなどによる人為的な自然の改変と位置づけている。かつて中尾左助は「農耕」には、品種の選択・改良などの半栽培から灌漑をともなった大規模な農耕にいたるまでいくつかの段階があるとした。三内丸山の事例は、人間が食糧調達のために自然環境にテコ入れするという点で、まさにこの農耕の一つの段階として位置づけられよう。

このように縄文農耕論はいまやその存否が論議される段階から、それが遺跡全体の景観の中でどう位置づけられ、どのようなカテゴリーでとらえられるか、また列島の地域ごとにどのような特性があるかを論じる段階にいたっているといえよう。御代田町ではまだ栽培を特徴

づける素材は未発見であるが、本節では豊かな資源に支えられて高度な文化を開花させた縄文時代の爛熟期ともいえる中期中葉を中心にした人々のようすを、近年豊富に発見されている遺物や遺構からみていくことにしたい。

中期の塩野西遺跡群　昭和九(一九三四)年東京大学の八幡一郎によってまとめられた『北佐久郡の考古学的調査』は北佐久郡の考古学研究史上の黎明を告げる。ここで早くも氏は小沼村「塩野」「瀧の澤」「乗瀬」「向山」「村内」で縄文土器を発見し、「小沼村出土の胴部の一破片は」「稍太い隆線文を中心に連点、鋸歯線が配されている」として、古い段階の焼町土器の拓本を掲載している。

このように古くから畑地を中心に遺物の採集を行なうことのできた旧小沼村(現在の塩野地区)は、平成二(一九九〇)年度から始まった圃場整備にともなう発掘調査によって、佐久地方の縄文文化を代表する遺跡が集中する地域として知られるようになった。このうち中期の遺構が検出された遺跡は、標高の高い方から城之腰遺跡・川原田遺跡、距離にして約三〇〇㍍下がった位置に滝沢遺跡がある。また、城之腰遺跡の東約五〇〇㍍の浅間山の尾根上に西駒込遺跡が立地する。

滝沢遺跡　滝沢遺跡は大字塩野に所在し、浅間山南麓の独立した細い尾根の平坦部に立地している。標高は八五二㍍内外である。平成四・五年度の発掘調査で縄文前期の竪穴住居跡が二軒、土坑一基、同中期が七軒、土坑八基、後期が五軒、土坑七基が検出された。このうち中期前葉の住居跡は三軒である。また、J―10号敷石住居を含む四軒の住居跡からは加曽利E3・4式期の土器が多数出土した。また称名寺並行期から堀之内2式期までの土器棺収納土坑や墓坑も検出されている。詳細は第六節に譲るが、とくにD―30号土坑においては、一次葬から―骨あげ―二次葬―祭祀行為―骨焼き行為―焼骨埋納にいたる埋葬過程が復元されている。

川原田遺跡と城之腰遺跡　川原田遺跡は大字塩野に所在し、その標高は八七二～八八二㍍である。城之腰遺跡はその北側に隣接し、いずれも浅間山南麓の尾根上に立地する。発掘調査は平成二年に約六か月かけて行なわれ、縄文前期の竪穴住居跡六軒、土坑二基、縄文中期の竪穴住居跡四六軒、土坑一八基、掘立柱建物跡一基などが調査されている。とくに縄文中期中葉においては、全国的にもまれな焼町土器を主体とした住居跡が一六軒も検出され、集落の主体部が調査範囲となったため、その全貌が確認されたことは、ひじょうに貴重な成果となった。これらは放射性炭素による年代測定により、ほぼ四六〇〇～四七〇〇年前という数値が計測されている。いっぽう中期後葉の住居跡も五軒検出され、この浅間山麓の地域が最初は曽利・加曽利E式文化の影響を受けながら、やがて唐草文系土器が波及し、さらに加曽利E式の中に包括されていく現象が読みとれ、関東・東北・中部高地の文化の接触点であり、とくに関東からの文化の入り口である当地域の重要性が改めて認識された。

城之腰遺跡は前期前葉を主体とする遺跡であるが、中期中葉の住居

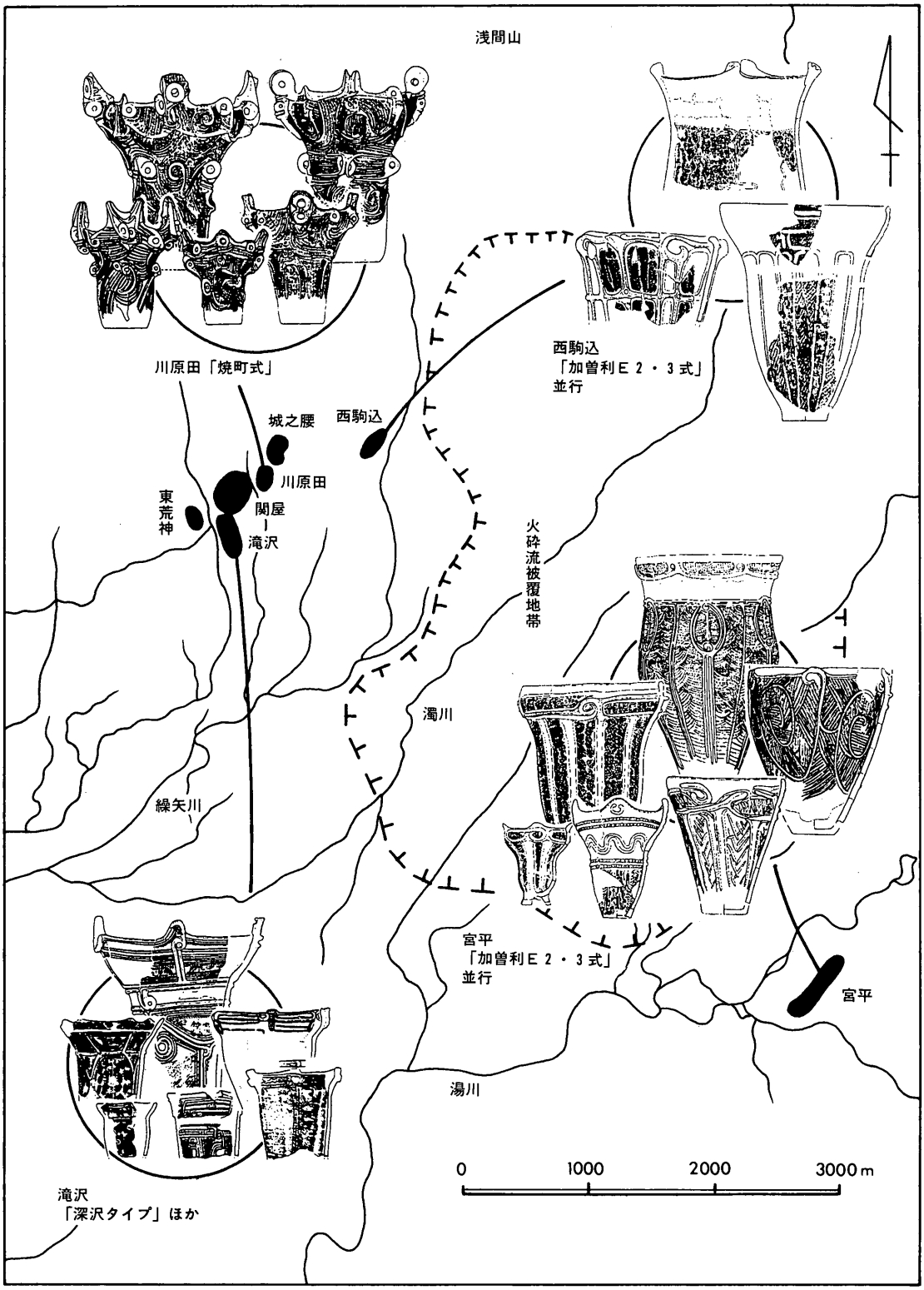


図41　御代田の縄文中期の集落と土器

跡一軒（J3号住居）、中期後葉の住居跡二軒（J4・5号住居）も検出された。

西駒込遺跡　西駒込遺跡は大字塩野に所在する。第四節で記したように他の塩野西遺跡群の諸遺跡が土地改良事業を調査原因とするのに対し、本遺跡の調査は現在「浅間サンライン」とよばれる広域農道の建設工事にともなうものであり、平成三年度に調査が行なわれた。標高は九二〇㍍に達し、縄文集落の中ではもっとも高所に立地する。これは加曽利E式期には集落が高所まで広がるという八ヶ岳西南麓に類似した様相である。ここでは縄文中期後葉加曽利E2～加曽利E4式並行期の住居跡二軒と土坑五基が検出された。1号住居からはとくに大木8b式の変容した深鉢が発見され、県内ではその後千曲川水系において、小諸市郷戸遺跡・真田町四日市遺跡・更埴市屋代遺跡群と平成六年度まで連続する、大木系土器発見ラッシュの口火となった。

そのほかの遺跡　塩野西遺跡群のうちそのほかの遺跡としては、東荒神遺跡でD22号土坑に唐草文系土器が正位で埋設されており、D19号土坑や包含層でも唐草文系土器が出土している。

関屋遺跡では土坑から中期前葉の大型深鉢が、包含層から焼町土器、唐草文系土器の破片が出土している。西荒神遺跡・下大宮遺跡など後期を主体とする遺跡からは中期の土器は出土していないのに対し、東荒神遺跡・関屋遺跡など前期を主体とする遺跡には中期の土器が含まれており、半径〇・五㍍に収まる塩野西遺跡群のなかでも微妙に遺跡の継続時間や立地に差異が認められることがわかった。

森泉山の東と西　軽井沢町の標高一三〇〇㍍の白糸の滝付近に発する湯川は、浅間山麓の小河川を集めながら御代田町の南部へと流れ下る。森泉山から八風山へと連なる尾根の先端部の台地と、湯川を挟んでその対岸には、御代田町豊昇から軽井沢町茂沢へと連なるもう一つの縄文遺跡の集中地区が存在する。代表的な遺跡は軽井沢町茂沢南石堂遺跡と御代田町宮平遺跡である。時期はいずれも縄文中期末から後期にかけてが主体である。ただし茂沢南石堂遺跡では、焼町土器・勝坂式・阿玉台式、加曽利E1式・唐草文系I段階などの中期中後葉の土器も出土している。

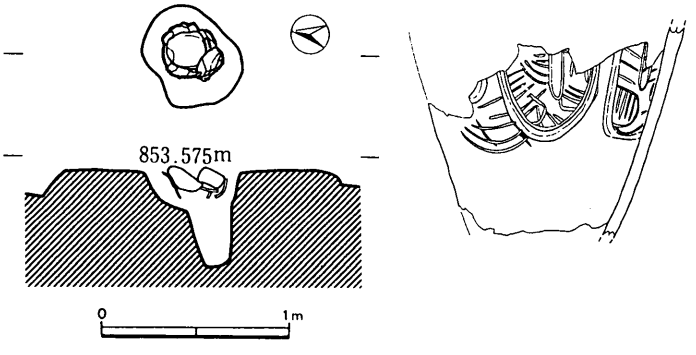


図42　東荒神遺跡D22号土坑と埋設土器（1：8）

二　縄文中期中葉の土器

深沢タイプと中期前葉の土器　幕を開ける。これらは大きくⅠ・Ⅱ段階に大別されているが、全時期を通じて半截竹管（円形中空の竹管状の原体を半分に割った工具）や棒状工具を多用する沈線文系土器と地文に縄文をもつ縄文系土器があり、地域的にその比率に違いがあるものの、両者が併存し組み合わさった形で土器群全体を構成する。上田盆地以東の千曲川上流域におけるこの時期の遺跡としては、その新段階に並行する和田村細尾中道遺跡・丸子町下久根遺跡・同渕ノ上遺跡・東部町大川遺跡・同久保在家遺跡・望月町竹之城原遺跡・同上吹上遺跡・佐久市丸山遺跡・小海町小原遺跡などがあり、資料は比較的充実している。

滝沢遺跡では、J12・14・15号住居から梨久保・五領ヶ台式最終段階にあたる土器が出土した。とくにJ12号住居では良好な一括資料が報告されている（図43）。埋甕炉の炉体土器である1は縄文系土器で口唇部にゆるい山形の突起をもち、口縁部文様帯の重三角区画文は下端部が頸部から体部にかけてY字状に垂下する。また、隆帯の脇に沿って細い半截竹管による沈線文が、四本ずつ描かれている。このような類型は諏訪湖盆から千曲川上流域に多く見られ、梨久保ⅡC・五領ヶ台Ⅱの新しい段階と推測される。ほかの土器は床面から浮いた状態で出土しているが、このうち2・7は深沢タイプといわれる土器で、飯山市深沢遺跡を標式遺跡として、千曲川水系から新潟県南部にかけて分布する。

長野県史では深沢遺跡の土器は三類に大別される（図44）が、このうち二類は地文に縄文を有し、胴部が膨らむ器形と直線的に外傾する器形に分かれる。さらにそれらは口縁部が内湾気味に立ち上がるものと、屈曲するものに細分される。三類は体部の縄文が消失するとされ、器形は後者を踏襲するようである。二類の口縁部文様帯は水平方向の隆帯や半截竹管による沈線で区切られ、その間にU字文や縦位の短沈線、水平方向の交互刺突などが施文される。胴部は通常四単位の縦方向の継ぎ手状隆帯が垂下する。その隆帯の脇に半截竹管による半隆起平行沈線が沿うもの、単位文間にU字状・C字状・コの字状の沈線文が描かれるものなどがある。三類は交互刺突から発展した水平方向の蛇行隆帯の部分化、体部の垂下隆帯文間を埋める沈線文部分の拡大化に特徴づけられ、三単位が多くなるとされる。

滝沢遺跡図43の2は口縁部の開き方がかなり大きく、口唇部の突起から二本の隆帯が垂下して継ぎ手状のモチーフを構成する。体部は同様な二本隆帯の脇に半截竹管による半隆起平行沈線が沿う。ここで注目されることは、第一に頸部から上が強く外反し口縁部にかけてゆるやかに内湾する器形が深沢三類により近いこと、第二に胴部上半に深沢タイプの本来のモチーフから逸脱した連孤文と、そこから垂下する隆帯の存在、第三にそれらが二本一対で描かれていることである。この二本隆帯は三類に連続する後出の要素とされ、実際に明神原遺跡出土例でも深沢三類とみられる深鉢に用いられている。

7は口縁部がやや外反し、くびれ部をもたない。このような器形や口縁部の文様構成は、深沢三類の図44―16や新潟県西戸野花立遺跡出

土土器に類似する。体部文様は隆帯＋半隆起線という基本構成と、その間を埋めるモチーフが渦巻きと逆U字状区画からなるという構成で図44―13に共通する。このように滝沢遺跡J12号住居で共伴した土器群は深沢遺跡出土土器と比較して、かりにその一類から二類、さらに三類という変遷が認めうるならば、二類後半から三類にかけて並行するものと推定される。

このほかに深沢タイプが梨久保・五領ヶ台式に共伴する遺構は現在のところ、和田村細尾中道遺跡第2号住や同第5号住など少数にとどまり、千曲川中流域の更埴市屋代遺跡群、東部町桜畑遺跡、小諸市東丸山遺跡などの分析が今後期待される。滝沢遺跡の深沢タイプは文様構成のみならず半截竹管の使い方が佐久の在地の土器とは異なるため、これらが在地で製作されたとするよりも、千曲川のより下流の地域から搬入された可能性も浮上するが、これは今後の課題である。しかしながら中期前葉の終末に深沢タイプが実際に土器組成の中に組み入れられていたことは、つぎの段階で在地の主要な土器となる「後沖(うしろおき)式」への影響関係を考える上でも貴重な発見である。

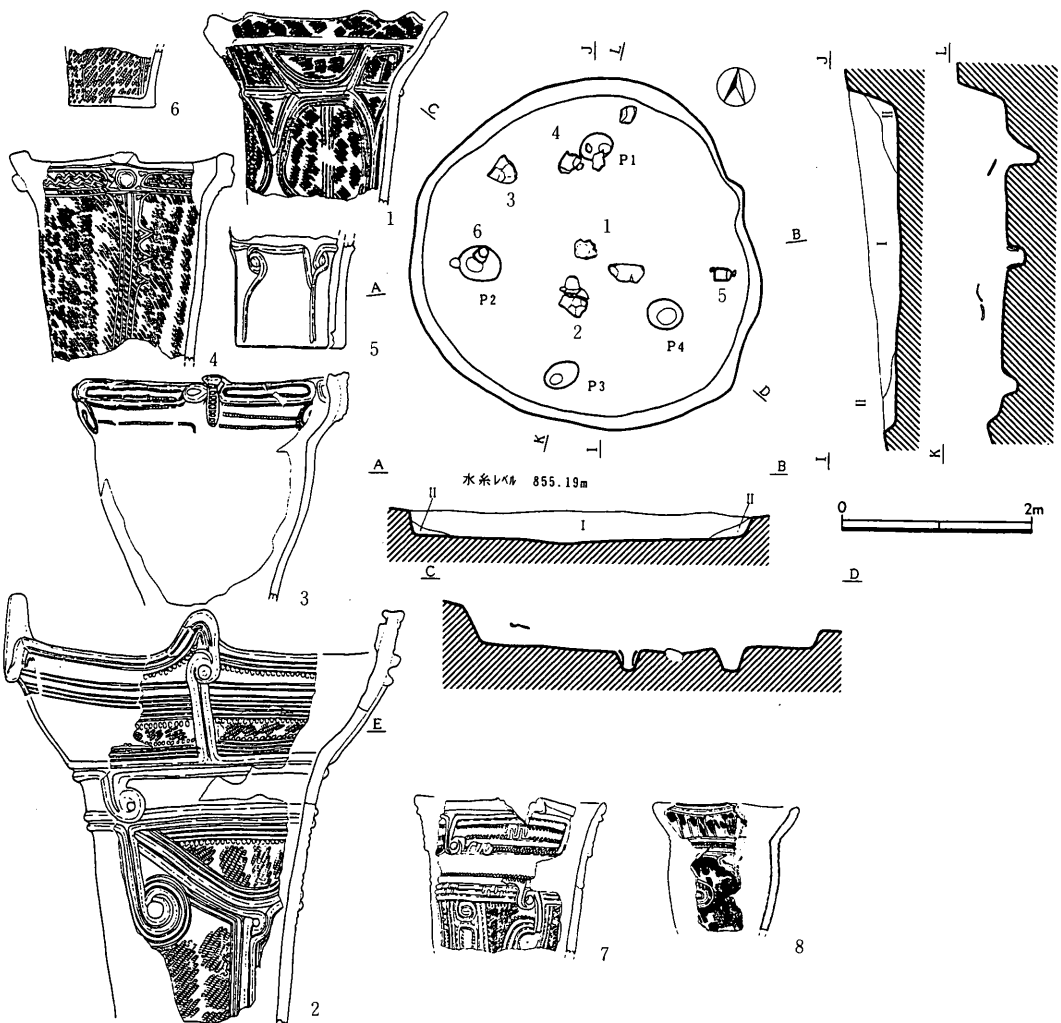


図43　滝沢遺跡J12号住居跡と出土土器

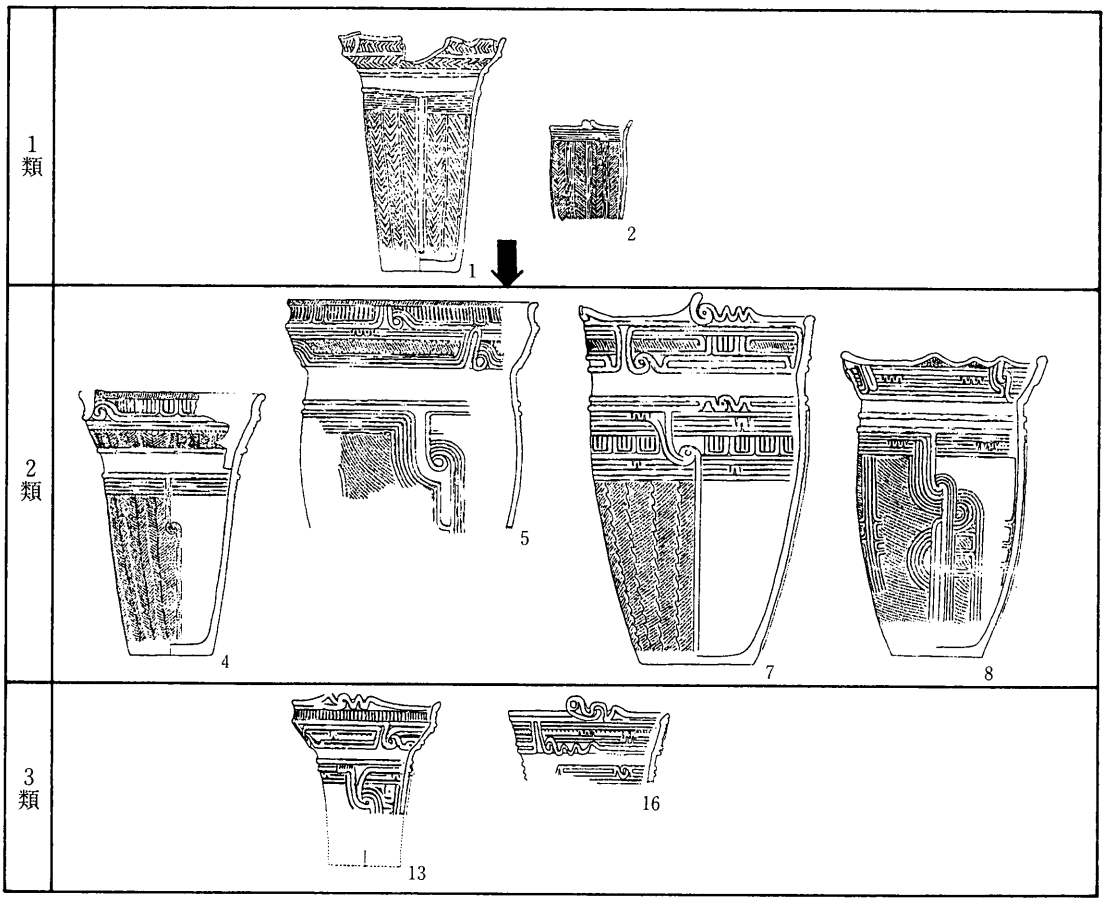


図44　深沢タイプの三類（1：12）番号は『長野県史』考古資料編東北信に共通

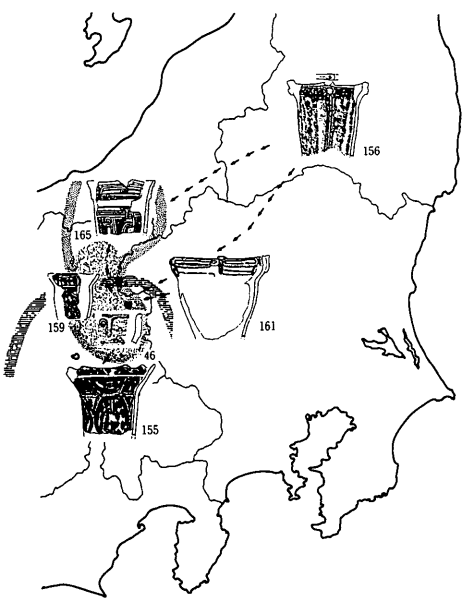
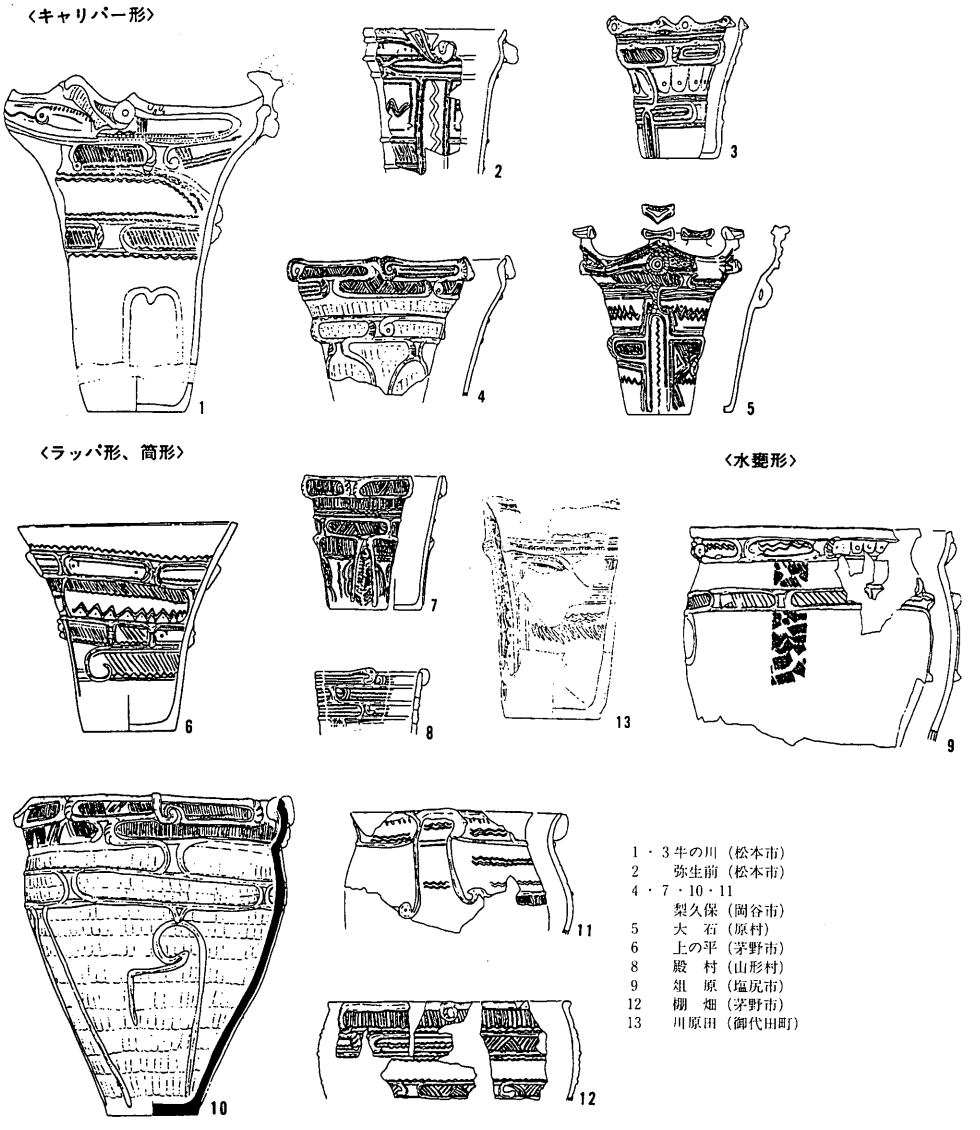


図45　滝沢遺跡J12号住居出土土器の出自概念図　土器装飾要素の出自（原郷）を示すもので、製作地を示してはいない。

またJ12号住居の4は、東北南部に中心をおく大木7a式が、群馬県などの中間的な要素を取り入れながら変化した土器と考えられる。中期前葉は東日本全体で土器型式間の類似性が高いため、4のみならず大木7a式と縄文地文の梨久保・五領ヶ台式の個々の文様要素・モチーフの類似度は基本的にかなり大きい。しかし双方ともその内部には、たとえば千曲川上流域と諏訪湖盆などのゆるやかな小地域差が存在する。また個々の土器を比較しても瓜ふたつといえるような土器は少ない。おそらくこれは、土器が各戸もしくは集落単位で製作され、土器作りを担った人々が、小単位ごとに分立していた様相を示すものと考えられる。そしてこれこそが、中期前葉社会の特色となっている。中期中葉になると、このゆるやか

な類似性が崩れ、地域ごとに差異が顕在化し、個々の土器間に斉一性が生まれている。

焼町土器以前　縄文中期の中葉になると、それ以前には地域差をはらみながらも同一歩調で変化をとげてきた各地域の土器群は、それぞれ独自の方向へ動き出し、等質性の高い土器型式圏を生み出す。佐久地方の中期の中葉は、寺内隆夫によって土器型式設定への方向性が示されている。勝坂式とも阿玉台式とも似ているようで似つかない独自の土器群である斜行沈線文土器（「後沖式」）（図46）で幕を開ける。この土器群は東北信から中信地方におもに分布するが中心は佐久地方にあるらしい。器形は胴部が直線的なキャリパー形、口縁部がやや外反するもの、口縁部が外反もしくは内湾し頸部にくびれをもち胴部最大



1・3牛の川（松本市）
2　弥生前（松本市）
4・7・10・11　梨久保（岡谷市）
5　大石（原村）
6　上の平（茅野市）
8　殿村（山形村）
9　俎原（塩尻市）
12　棚畑（茅野市）
13　川原田（御代田町）

図46　斜行沈線文土器における器種・器形・容量の分化
（『長野県の考古学』を改変）

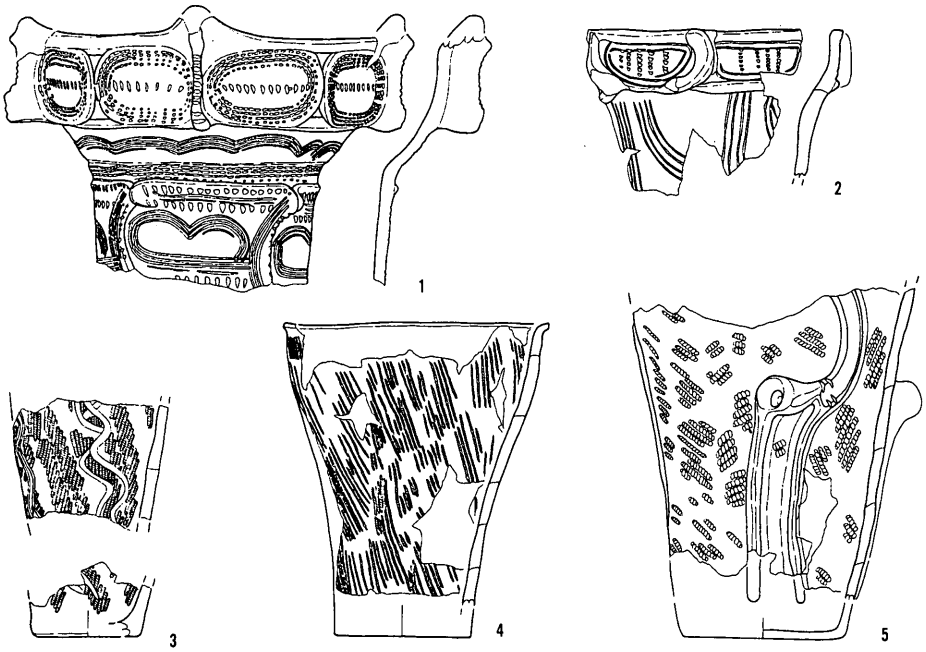
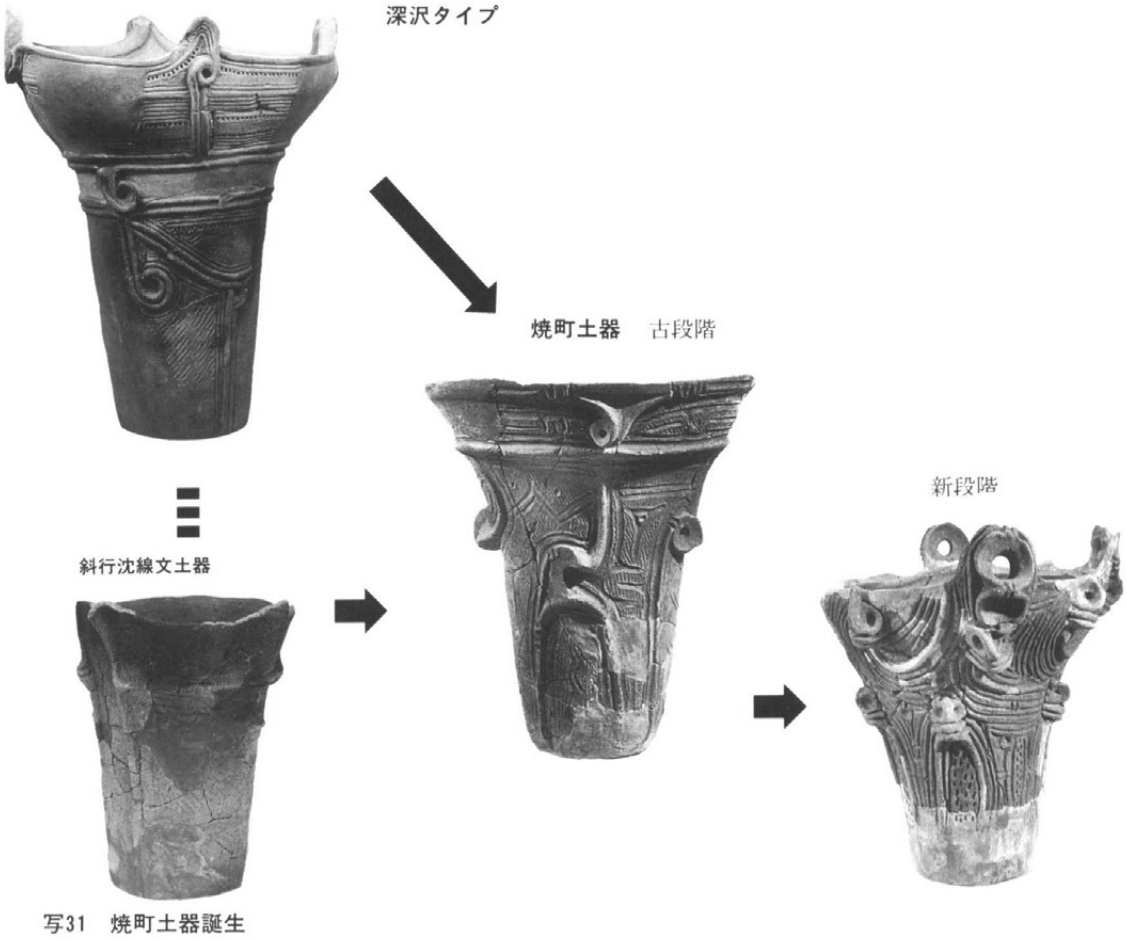


図47　川原田遺跡J50号住居出土土器（1：6）

径がやや上にあるものの三形態が主体である。文様構成はまず口縁部文様帯を二分割し、区画文を配すること、頸部直下から逆U字状の懸垂文が垂下することでその独自性を発揮している。主要な文様要素には、勝坂式よりも幅が狭く細長い隆線楕円区画と、梨久保・五領ヶ台式期から多用されていた半截竹管の背の部分を用いた横帯区画内の斜行する沈線文や沈線脇もしくは沈線内の連続刻み目文がある。そのほかには体部下半に展開する隆帯による逆U字などさまざまな形の懸垂文、左右対称の懸垂文、波状沈線文、指頭圧痕文などがあり、阿玉台式と共通する要素も多い。このような点から斜行沈線文土器は、在地の土器の装飾を脱落させつつも受け継ぎ、隣接するほかの土器型式の文様構成や要素を取り入れて成立していることがわかる。これらは勝坂Ⅰ式段階では阿玉台式の要素が多く入り込むものの、勝坂Ⅰ～Ⅱ式段階になると勝坂式との関連が強くなっていく。たとえば沈線を施文してからその中に刺突を施すなど勝坂式の押し引き文に、わざと似せたような文様施文技法さえ出現する。

さて、滝沢遺跡J12号住居出土の土器のうち5（図43）は隆帯によって継ぎ手状の装飾を表出しながらも、隆帯の脇に沈線が沿わない。このような隆帯装飾に斜行沈線文土器特有の懸垂文の要素が加わるため、勝坂Ⅱ式並行期になると川原田遺跡J50号住居（図47の5）やJ51号住居（図50の1）のような結節部をもつ、継ぎ手状の懸垂文が現れる。ただし、J51号住居1・2など体部上半に最大径を置く甕形の器形は、深沢タイプではわずかに確認されているにすぎないが斜行沈線文土器では、望月町後沖遺跡、岡谷市梨久保遺跡例のように阿玉台



写31　焼町土器誕生

Ⅰb式の要素が、顕著にみられる前半段階から認められる。東信地方では阿玉台式土器は、群馬県側よりは分布が希薄であるもののⅠa式からみられ、川原田遺跡では、阿玉台Ⅱ・Ⅲ式が「焼町土器古段階」にともなう。したがって阿玉台式の土器に関する情報は一時的ではなく、順次段階的に取り入れられてきたのだろう。

焼町土器誕生　川原田遺跡では斜行沈線文土器が少量ながら出土し、さらに焼町土器の古段階（新巻類型）の土器群へと変遷をとげる。沈線系の装飾要素の多くは、斜行沈線文土器から焼町土器に引き継がれている。また、隆帯脇に沈線を多重に沿わせる手法が深沢タイプから取り入れられた。ここに曲隆線が文様の根幹に据えられている土器群、すなわち焼町土器が誕生するのである。

「火の国」の土器、焼町土器　大きな環状の突起、縦横に延びる曲隆線とそれに沿って幾重にも重層する沈線。浅間焼けのエネルギーを象徴するかのような赤焼きのこの土器群がムラ一円で使われているようすを、東北北部の円筒上層式土器や南部の大木式土器のような地味な土器しか知らない人々が見たとしたら、どんなに驚いたことだろう。隆線に沿って多用される沈線文や

突起の華やかさから、縄文土器の象徴としてしばしば登場する土器群に千曲川・信濃川の中下流域に分布する火焔型土器を含む一群があり、焼町土器とほぼ同時期にあたる。しかしながらこの火焔形土器を含む一群が大木8a・8b式の一割ほどを占めるにすぎない特殊な土器であるのに対し、焼町土器は少なくとも川原田遺跡の場合、遺跡全体の約五～七割を構成する主体的な土器である。火焔型土器を含む一群が、華やかさと素地の白さと含有鉱物の少なさから雪国の情熱を示した土器と表現できるなら、焼町土器は火の国の躍動を表した土器であろう。外来の諸要素を取り入れながら地味な変化をとげてきた佐久地方にあって、在地の伝統に立脚し、それを進化させて独自の土器を作り上げた最高傑作がこの焼町土器といえよう。そしてこの土器が多量に出土した御代田町こそは焼町土器の発信地といっても過言ではない。それではこの焼町土器の成立と発展、そして衰退の様相を川原田遺跡の土器群の中に見てみたい。

焼町土器成立期　焼町土器とは、塩尻市焼町遺跡第1号住出土土器を標式資料として付けられた名称であり、その型式学的な検討から、その類例をも含めて焼町土器とよばれている。しかしながら最近までの資料を概観すると中南信から群馬県全域、北は飯山から千曲川・信濃川中流域に分布し、その分布圏のほぼ中心に川原田遺跡が存在していることがわかってきた。この焼町土器分布圏の東側である群馬県では新巻遺跡・房谷戸遺跡出土資料を中心に一九八〇年代に阿玉台式に直接的な影響を受け発展したとされる新巻類型が山口逸弘により設定されていた。川原田遺跡では、焼町土器が主体となる勝坂III式以前の勝坂II式からIII式にかけて、この新巻類型が遺跡全体の土器組成の中で主体を占める。そこで焼町土器に先立ってこれらを見ていこう。

川原田遺跡ではJ9・20・24・25・50・51号住居から新巻類型が出

写32　新潟県笹山遺跡出土の火焔型土器群（十日町市教育委員会提供）

写33　御代田町川原田遺跡の焼町土器群

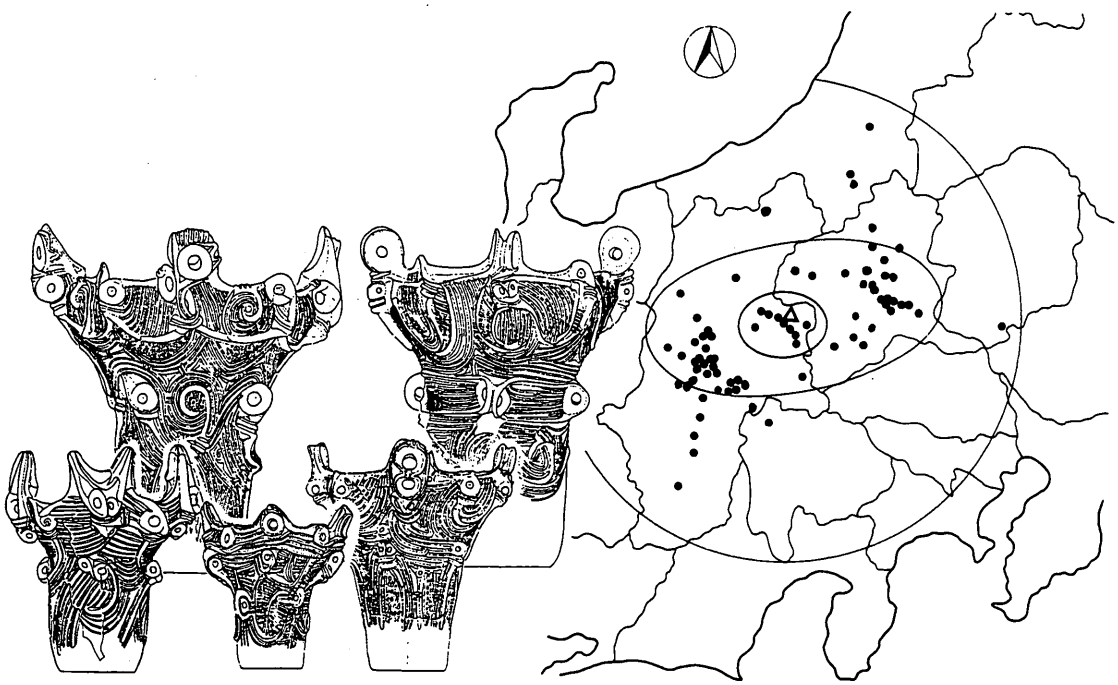


図48　焼町土器の分布　△は御代田町の川原田遺跡

土し、阿玉台式II式・勝坂II・III式との共伴が確認された。

J51号住居は調査区の東側に少し離れて検出された竪穴住居跡であるが、ここから良好な一括資料が出土している。図50の1は下半が埋設された状態で検出され、2は炉体土器として使われていた。床面遺物は6だけでそのほかは埋土からの出土である。すなわち1と2だけが住居が使われていた段階の遺物である。1は口縁部に継ぎ手状の隆帯をもち、口縁部から体部にかけて隆帯文が連続する。その結節部には環状突起が貼付されている。いっぽう2は口縁部文様帯と体部文様帯が隆帯によりしっかりと区画され、口縁部文様帯に、横長の沈線区画をもつ。やはり体部には曲隆線が展開するが、隆帯の脇に沈線が沿う。3・4は埋土下部から、阿玉台III式の5は埋土の中央やや上部から出土した。4は口縁部文様区画内のモチーフは横方向に曲流展開し焼町土器へ繋がる要素となる。地文はいずれも縄文である。

さて、川原田遺跡におけるこのような土器群の器形には、斜行沈線文段階の基本器形と同様に、口縁部が内湾するキャリパー形：器形I（図50—4）、口縁部が内湾する樽形：器形II（図50—2・3）、平縁

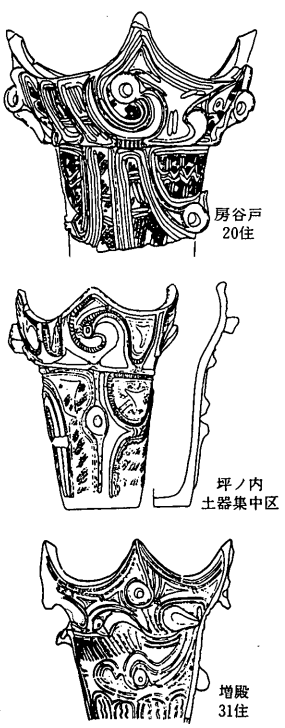


図49　新巻類型

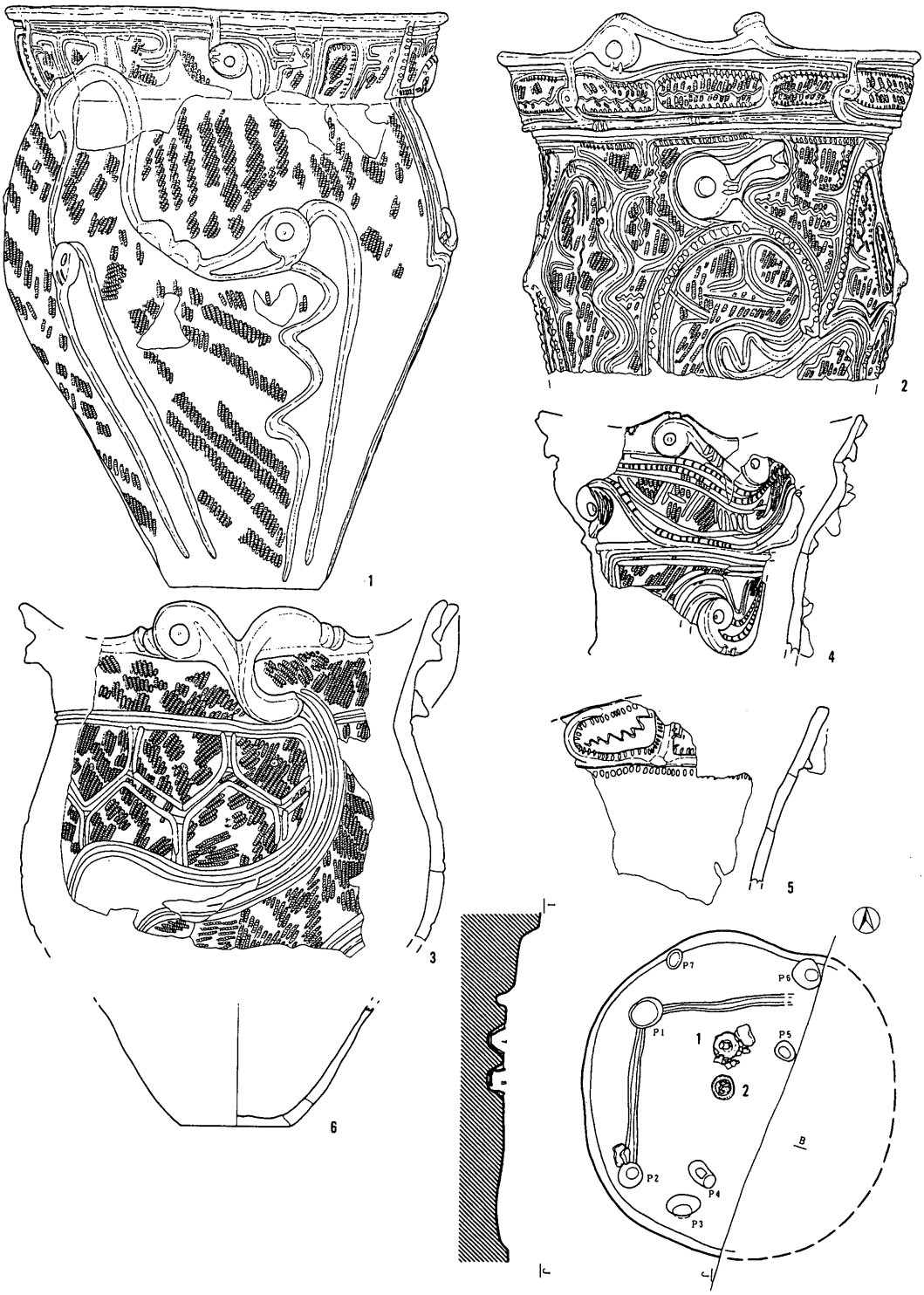


図50　川原田遺跡J51号住居と出土土器（住居跡1：100、土器1：6）

で口縁部がラッパ状に外形する器形：器形III（写31中央）の三種類があり、群馬方面に多くみられる大波状口縁があまり発達しない。IとIIは器形そのものが、器形IIIの土器は文様帯構成が、焼町土器に継承されていく。さらに縦横方向に流動する曲隆線とその結節部分の貼付文、隆帯に沿った沈線も同様に連続する要素である。この変遷過程の中で沈線部分の拡大による縄文地文の消失、器形Iの比率の増加といった変化がおこる。

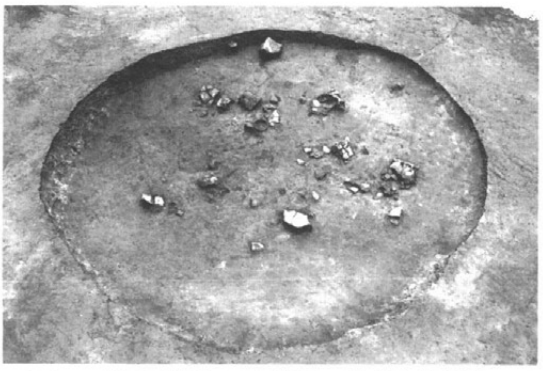
このような点から、かつてこれらこそが勝坂式や阿玉台式にみられる分割・区画という構成を脱し、焼町土器として設定された一群の祖形となる流動する曲隆線を装飾の根幹に据えた土器群であることがわかる。さらに群馬県の新巻類型は一遺跡に数個体みられる程度であるが、川原田遺跡では同時期の土器群の中でこれらは勝坂II・III式前半には主体を占める土器群で、胎土も焼町土器に似通っている。すなわち組成比率上も素地作成技法上も、焼町土器に連続していく要素を備えている。このことからこれらが主体になる段階をもって、川原田遺跡では焼町土器の成立期、すなわち焼町土器古段階とよぶことも可能であろう。

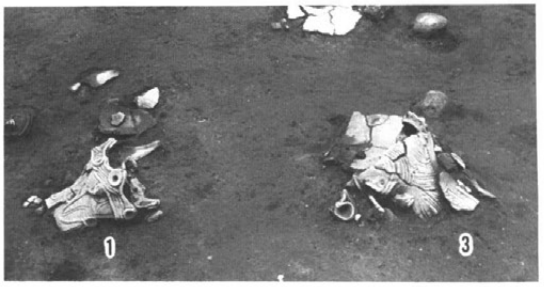
さて、これに類似した土器群は新潟県五丁歩遺跡でも出土し、縄I系列とされ狢沢・新道式に並行する時期にあてられている。また、類似した文様構成をとるものの地文に縄文がみられない土器群は、五丁歩遺跡のほか、東部町久保在家遺跡、新潟県芋川原遺跡などでもみられる。

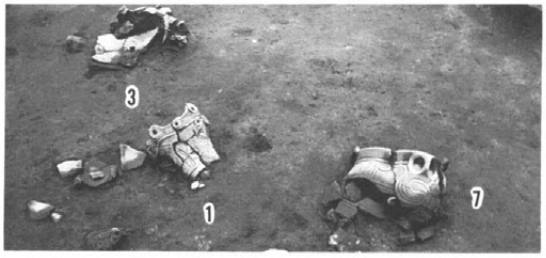
川原田遺跡の焼町土器　いよいよ勝坂IV式を中心に展開する焼町土器新段階の検討にはいろう。川原田遺跡で焼町土器と勝坂式との良好な伴出関係がみられる住居はJ2・J4・J5・J11・J12号住居である。とくにJ11号住居では床面で、焼町土器と勝坂IV式古段階の土器（図51—7）がおしつぶされた状態で出土しており、両者の共伴関係がつかめる。いっぽうJ12号住居では、まず「焼町土器」（図52—3）が炉の囲いに使われ、住居が廃絶されて土が少したまってからそこで火が焚かれた。その後に、焼町土器（図52—1・2・4）や勝坂IV式新段階の土器（図52—5・6）などがまとめて捨てられたことがわかった。

さて、川原田遺跡の焼町土器には大きな口縁部がゆるく内湾するキャリパー器形I（図52—1）のものと頸部にくびれをもつ樽形の器形II（図52—3）の二種類があり、前者が圧倒的に多い。

器形Iの土器を器面分割の方法から分類すると、まず頸部のくびれ部に区画線があって口縁部文様帯と胴部文様帯が区切られるA類型が設定でき、これはさらに口唇部に無文帯をもち胴部の区画が楕円となるA—1（図52—2）と、口唇部無文帯以外の分割線が消失したA—2（図51—2）に細分される。A—1は焼町土器の最盛期である勝坂IV式並行期に増加する。A—1と同様な文様構成をとる周辺地域の土器のうち、口唇部文様帯がやや広く横方向の沈線や把手などが付く一群が五丁歩遺跡の隆IIa系列の土器とこれが発展・定型化した火焔型土器である。またA—1と同様な区画を有するものの、口唇部が溝状に狭い一群は隆IIb系列や王冠型土器となる。つぎに口縁部にやや幅







写34　川原田遺跡Ｊ11号住居の遺物出土状況

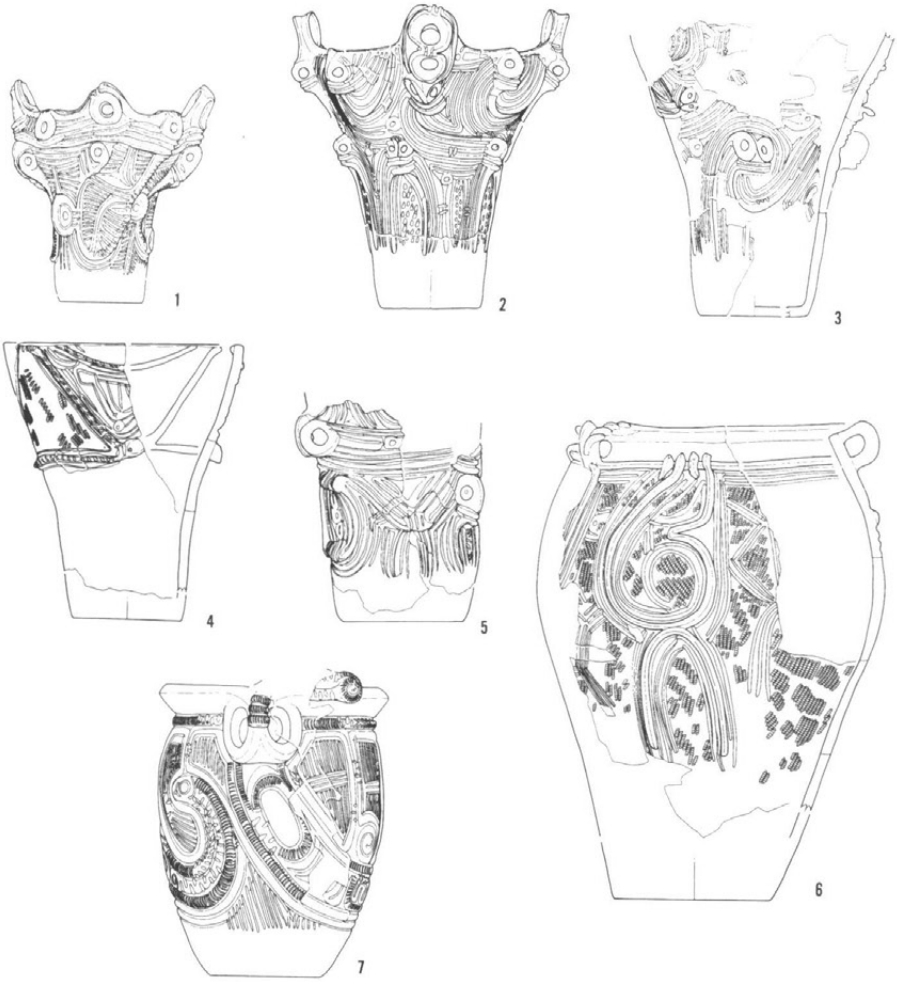


図51　川原田遺跡Ｊ11号住居の出土土器（1：8）

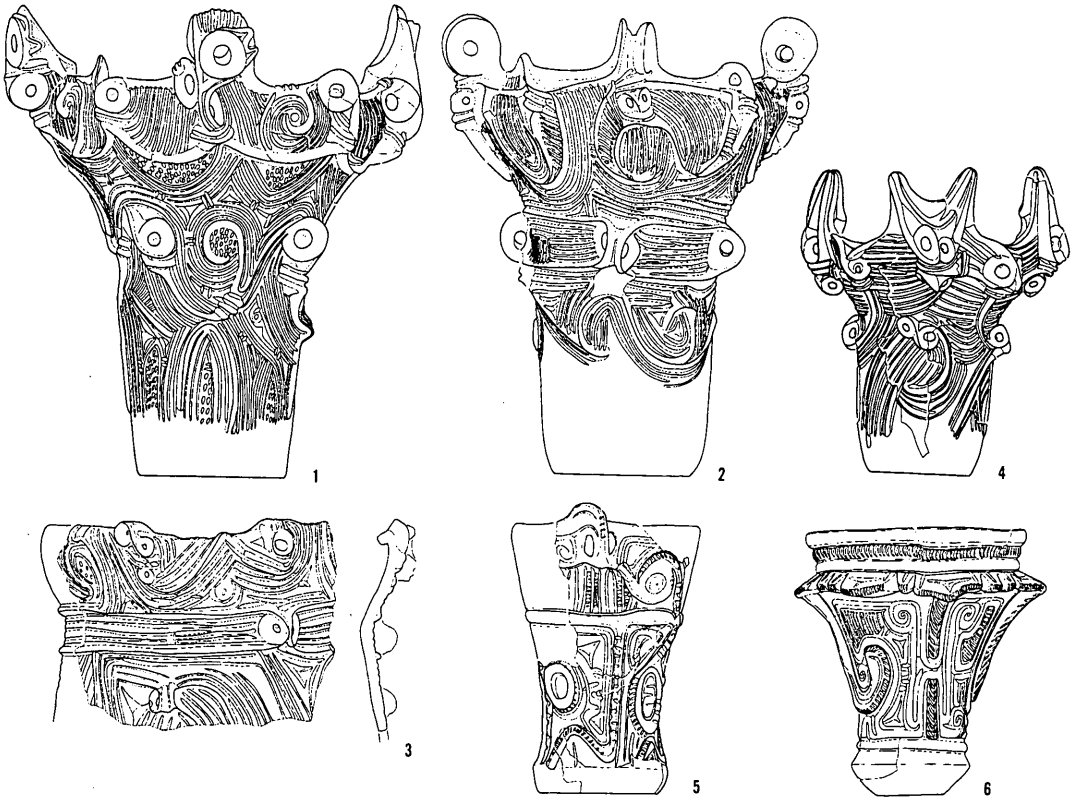


図52　川原田遺跡J12号住居出土土器（1：8）

川原田遺跡ではJ11・12号住居から良好な焼町土器のセットが出土した。とくに、J11号住居では床面に密着し、土の圧力で押しつぶされた状態で、4つの焼町土器が出土した。また、J12号住居の炉には、上図の3の土器が用いられていた。両住居出土の土器は今後、焼町土器の象徴的な資料として、研究されていくだろう。

の広い文様帯をもつ一群（図52―1）をB類型とすると、その祖形は焼町土器古段階の器形IIIの土器にさかのぼれよう。勝坂III式後半～IV式期には分帯線は弧状に変化していく。

器形IIの土器の多くは容量が大きいせいか、炉体土器になる場合が多い。J12号住居の3（図52）の文様構成はA―1に類似する。また、D77号土坑の228（図53）のように平縁で「口縁部文様帯が狭く、以下の胴部文様帯が縦に切れ目の無い構成をもつ。隆帯上部に刻みは施されず、眼鏡状把手が付される」という特徴をもつ新潟県塩沢町五丁歩遺跡の隆Ib系列に類似するような土器も出土している。

焼町土器の装飾の中で中心になるものは、横方向に流れる曲隆線とよばれる隆帯装飾と、その結節部分に付けられる眼鏡状もしくは斜め8字状の添付文、口唇部から上方向に発達する大型環状の突起である。曲隆帯に沿う沈線は焼町土器古段階から焼町土器新段階へと数を増していく。施文技法は古段階には半截竹管の背の部分で浅く引いていたが、それが徐々に細く深くなり、J12号住居を中心とする勝坂式IV式後半期にはひじょうに彫刻的な

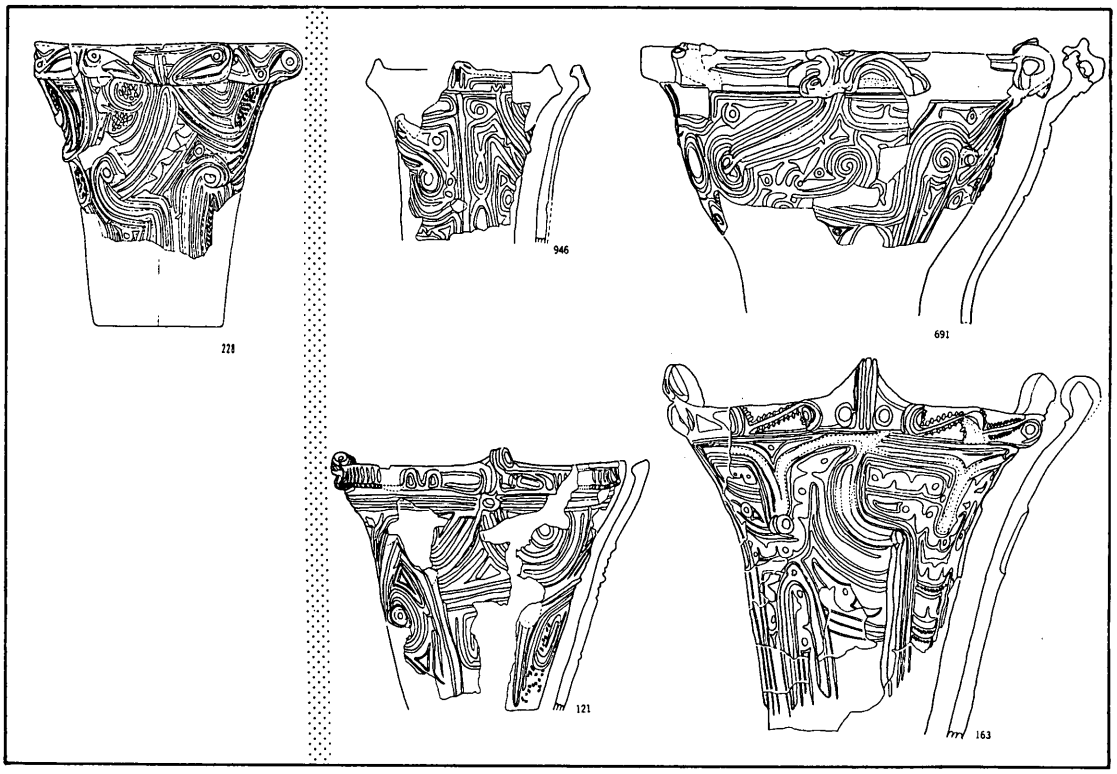


図53　川原田遺跡D77号土坑出土土器とその類例　右の4つは五丁歩遺跡隆Ⅰb系列の土器

印象を与えるようになる。土器の大きさも、新しくなるにつれて大型化する傾向にあるが、この段階でピークに達する。焼町土器の終末段階になると半截竹管の腹の部分を用いた鋭い沈線が定着してくる。

焼町土器の衰退　川原田遺跡の焼町土器の終末段階は勝坂Ⅴ式並行期にあたる。この時期になると大形の土器は少なくなり、把手も退化し、地文に縄文が復活する(図58)。つぎの段階には加曽利E式や曽利式土器が流入し始め、独自性を誇った焼町土器にとって代わり、ふたたび佐久地方は、他地域の土器型式に塗り替えられてしまう。

最後に少し視野を広げ、千曲川流域・群馬・新潟県南部を含め焼町土器の出自を考えてみる。広域で似通った様相をもちながら、個々の斉一性に乏しい梨久保・五領ヶ台式・大木7a式系土器が、解体する縄文中期前葉末に小地域差を抱えながらも浅間山をとりまく地域に成立したのが五丁歩縄Ⅰ系列や同隆Ⅲ系列・新巻類型・久保在家式などといわれる曲隆線に象徴される土器群である。これらは新潟県では北陸の要素を取り込み、千曲川水系では在地の斜行沈線文土器・深沢タイプからの系譜を引きながらも総体としては比較的類似した様相を呈していた。このような土器群を母胎として中葉の千曲川・信濃川中流域の人々の一部は、五丁歩遺跡に特徴的な隆帯系列の土器群や、さらにそれらを極端に定型化させた火焔型土器を含む一群を生み出した。いっぽう佐久地方を

中心にした地域の人々はそこから焼町土器を成立させていったのであろう。千曲川・信濃川中下流域ではその後、ほかの日常食器は大木8a・8b式が主体となるが、それでもこの古い面影を残した火焔型土器を極端に変容させることもなく守り続けていった。それに対し勝坂III・IV式期の川原田遺跡の人々は、勝坂式をさりげなく日常食器に取り入れながらも、生活の主体となる食器や炉体土器は、在地の焼町土器を作り発展させていったのである。そこに焼町土器をもって、中期中葉の土器型式「焼町式」を設定しうるゆえんがある。

三　縄文中期後葉の土器

加曽利E式・大木式土器　川原田遺跡では勝坂V（井戸尻III）式期になると焼町土器の装飾がかなり単純化し、大型の把手もなくなる。この後、御代田町周辺は加曽利E式・曽利式の土器型式圏に取り込まれるようになる。

加曽利E式とは、大正十四（一九二五）年に小金井良清、八幡一郎、山内清男（やまのうちすがお）らによって調査された千葉県加曽利貝塚出土のE地点の土器を標式として命名された土器型式である。同年、山内は仙台へ居を移し、今度は東北地方の土器編年に着手する。松島湾に面する宮城県大木囲貝塚（だいぎがこい）を調査し、そこでの上下関係や、地点別共伴関係から大木1式から10式を設定したのである。山内清男の「縄紋土器型式の細別と大別」に先立つ、昭和四（一九二九）年の縄文土器編年表によると、加曽利E2式と大木8式との並行関係が明確に記載されており、その類似性から両者は遠隔地における前後の土器間の並行関係を推定するてがかりとなっている。このように当初から大木式とは加曽利E式と姉妹関係にある土器型式なのである。さて、東北の中期大木式は7a式から10式まで型式学的にほぼ連続していくものの、関東から中部地方に分布する勝坂式はその後器形や施文原理が異質である、加曽利E1式にとって代わられる。その結果、加曽利E式が関東地方から中部高地にかけて分布するのに対し、大木式は秋田市から岩手県の宮古市を結ぶラインを北限に、南は千曲川・信濃川中流域から北関東までに分布するようになる。かりに加曽利E式の成立を大木式と関連づけられるとすれば、中期中葉に形成された小型式圏はこの大木式の南下によって消滅し、やがて大木・加曽利E式大型式圏[注1]が成立するのである。少し遅れて大木8b式は東北北部の円筒土器文化圏まで北上していく。

曽利式土器の分布　曽利式は、八ヶ岳西南麓の井戸尻（いとじり）遺跡群の富士見町曽利遺跡で検出された住居跡の切り合い関係から、曽利I式から曽利V式までの五段階が編年されている。その後の調査から八ヶ岳西麓から諏訪湖盆・伊那谷・木曽谷など中南信地域は唐草文土器が多く分布し、曽利式はむしろ井戸尻遺跡群周辺が西限で山梨県方面が主要分布圏であることが明らかになってきた。大木式と加曽利E式の場合と同様に、曽利式と唐草文系土器も姉妹関係にある。

諸文化の受容　小地域性が崩壊する中期中葉から後葉にかけての移行期において御代田町には山梨県方面から佐久地方を通

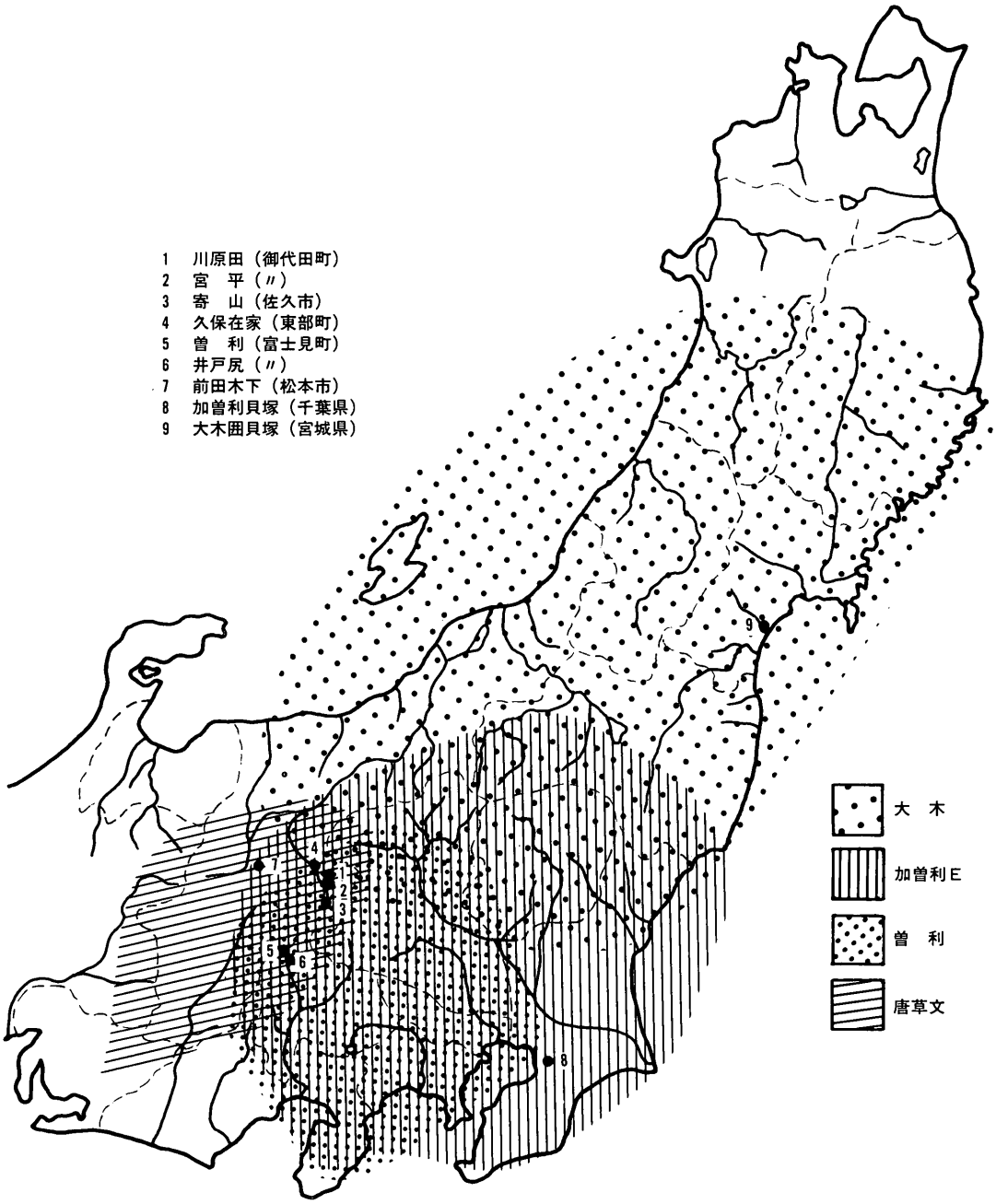


図54　縄文中期後葉の土器型式分布概念図

縄文時代中期後葉の東日本は北から大木式、加曽利E式、曽利式、唐草文系土器など、異なる形状、文様をもつ土器が作られていた。図はその分布状況を示す。アミが幾重にも重なっている部分は数型式が混在する地域である。長野県の東信から、諏訪盆地にかけては加曽利E式、曽利式、唐草文系土器が入り混じった地域であったことがわかる。

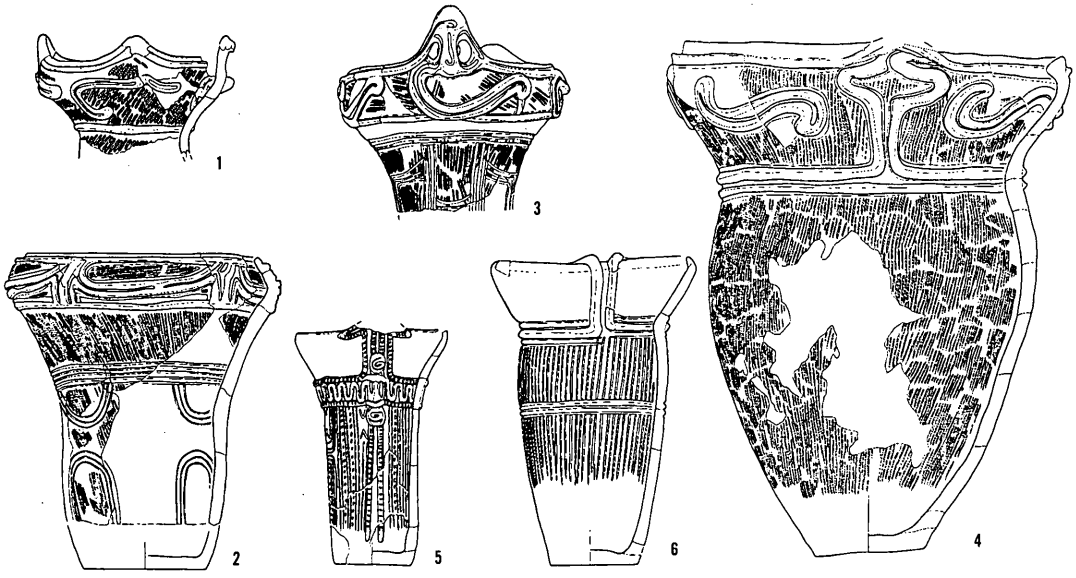


図55　川原田遺跡Ｊ７号住居、Ｄ91号土坑出土土器（１：８）

って曽利式が流入し、関東地方から加曽利Ｅ式が流入し、浅間山を越え、あるいは千曲・信濃川をさかのぼって大木式の情報が流入する。後葉の中ごろになると唐草文系土器が流入し、一部加曽利Ｅ式と折衷する様相が浅間山の北麓の群馬県とともにみられる。唐草文系土器はⅠ段階とⅡ段階のヒアタスが大きく、第Ⅱ段階には器形・文様構成ともに大木８ｂ式との類縁関係を強める。その変容過程を考えるにあたって、これらの諸文化が接触した御代田町を含む東信火山列西南麓地域は、重要な位置を占めていることになろう。かつて焼町土器を生み出し、各地へ文化を発信していた人々は、この時期になると寛容に各地の文化を受け入れるようになっていった。その姿を記してみる。

加曽利Ｅ１・曽利古式Ⅰ段階　川原田遺跡Ｊ７号住居からは、曽利古式Ⅰ段階と加曽利Ｅ１式[注2]期の良好な一括資料が出土している（図55）。５は箆状工具による刻みをもつ隆帯と細い半截竹管による二本一対の沈線によって文様が描かれる。６は５よりも幅広く深い半截竹管による沈線が、胴部中央に横方向に三本併走し、その上下を縦位の沈線が埋める。沈線の様相は、焼町土器最終段階の半截竹管による半隆起線に類似する。これらが曽利古式Ⅰ段階からⅡ段階への変遷過程を示すのか、焼町土器の技法を用いての模倣過程（５→６）を示すのかは課題となるところである。

Ｊ７号住居ではこれらと同様のⅠ層から１、２、３の加曽利Ｅ式土器が出土した。このうち１・２は撚糸地文やクランク状モチーフから大木８ａ式最新段階に並行する加曽利Ｅ１式である。ただし３は口縁

部の隆帯の脇に沈線が沿う隆沈線が成立し、棒状工具による頸部や胴部の垂直方向の三本の沈線がみられ、そこから横方向にのびて下方へ屈曲する規格渦巻文モチーフをもつことからやや新しい要素が付加されている。そのほかの加曽利E1式段階の資料には、川原田遺跡D91号土坑の大型深鉢（図55—4）、D186号土坑の撚糸地文の小型深鉢や滝沢遺跡の包含層出土土器、佐久市寄山遺跡H9住、同勝負沢遺跡出土土器などが掲げられる。とくに寄山遺跡D207号土坑から加曽利E1式深鉢と、大木8a式最新段階の深鉢が共伴していることは、きわめて注目される。

加曽利E2式古・曽利古式II段階（唐草文系I段階）　曽利古式II段階住居にあたる資料は、川原田遺跡J27・45号住居の炉および下層から出土している。この段階の特色は頸部の斜格子文と半截竹管状工具による体部の半隆起状平行沈線文、半截竹管による連続爪形文である（図56上段）。同様なものは寄山遺跡H46号住居・H69号住居や東部町久保在家遺跡、松本市前田木下遺跡1・2号住居などに代表され、唐草文系土器のI段階にあたる。とくに前田木下遺跡では、大木8b式古段階のA類型の土器が伴出する。さて、J27・45号住居の上層からはこのほかに渦巻つなぎ弧文土器が出土している（図56—5・6）。これらに類似した渦巻つなぎ弧文土器が、どこまでさかのぼるかは課題となるところであるが、破片ながらJ21号土坑ではつぎの段階にあたる唐草文系第II段階の矢羽状細沈線を地文にもつ土器にともなう。J27号住居・J5号住居の層位的な見解からも、後続する可能性が高いものの、今後の共伴例に注目したい。

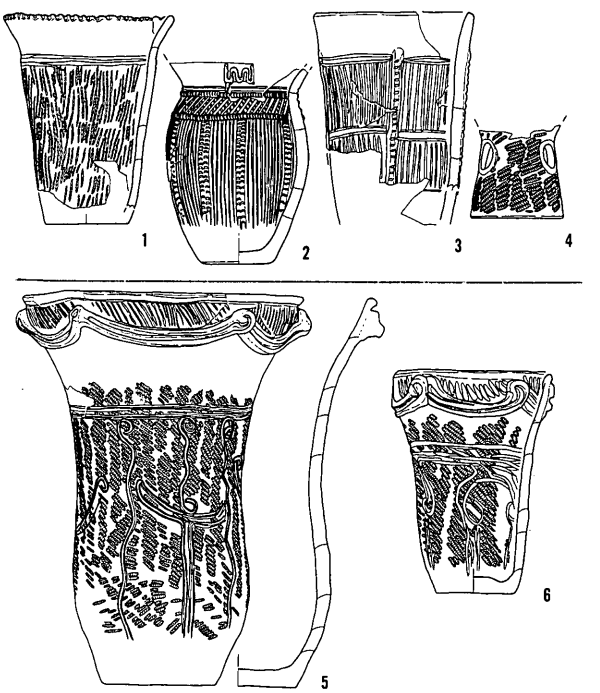


図56　川原田遺跡J45号住居出土土器と渦巻つなぎ弧文土器

加曽利E2式新・唐草文系II段階　川原田遺跡のJ13・J19・J21号住居では、唐草文系II段階でも後半にあたる土器がまとまっている。西駒込遺跡のJ1号住居では、体部モチーフが曽利式的に変化している大木8b式のB類型を含む一括資料が出土している。また、滝沢遺跡の遺物包含層では、唐草文系II段階を中心にIII段階にかけての土器の把手が出土している。真田町四日市遺跡では、この段階の良好な一括資料が53号住居跡埋土で確認された。ここでは宮平例に類似した頸部無文帯をもつキャリパー形土器が、唐草文系II段階の樽形の

土器とともに廃棄されている。

加曽利E　3式古　この時期から集落の主体が塩野から豊昇に移ったので あろう。良好な土器資料は豊昇に多い。とくに宮平遺跡では、加曽利E3式段階の資料が豊富に出土している。とくに図88の3は、口縁部の楕円区画の間に渦巻文が表出される典型的な加曽利E3古段階の土器で、体部の磨り消し帯はまだあまり広くない。西駒込遺跡の土坑やグリッド出土土器、滝沢遺跡のグリッド出土土器にも本段階に属する資料が多い。

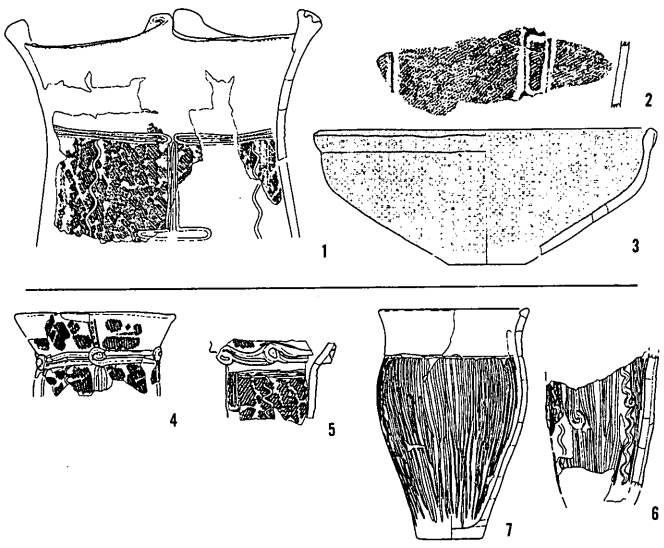


図57　唐草文系　II段階並行土器
上段　西駒込遺跡J1号住居
下段　川原田遺跡J19号住居

加曽利E　3式新　加曽利E3式新段階に属する加曽利E式土器は宮平遺跡出土の5・6（図88）や滝沢遺跡J10・J13号住居などに代表される。いずれも口縁部の区画帯はかなり崩れ、渦巻きの中に縄文が侵入し、幅の広い沈線で文様が表出されている。体部の垂下沈線の間は磨り消されたり、蕨手状の懸垂文が描かれる。とくに宮平遺跡の台付深鉢（図88―6）は高さ一〇㌢程度で、くびれ下の内面に煤が付着している。この段階には4のように断面三角形の細い隆線によって、渦巻き文様が表出される唐草文系III段階の土器がともなう。5のように区画内に矢羽状細沈線が崩れて拡大した地文を有する佐久系深鉢形土器が共伴する。

加曽利E3式土器の手法の一部はE4式に継続されていき、やがて中期も末葉をむかえる。宮平遺跡・滝沢遺跡での土器出土状況もふくめた中期後葉～末葉土器群の細かな検討は、第六節にゆずることにしたい。

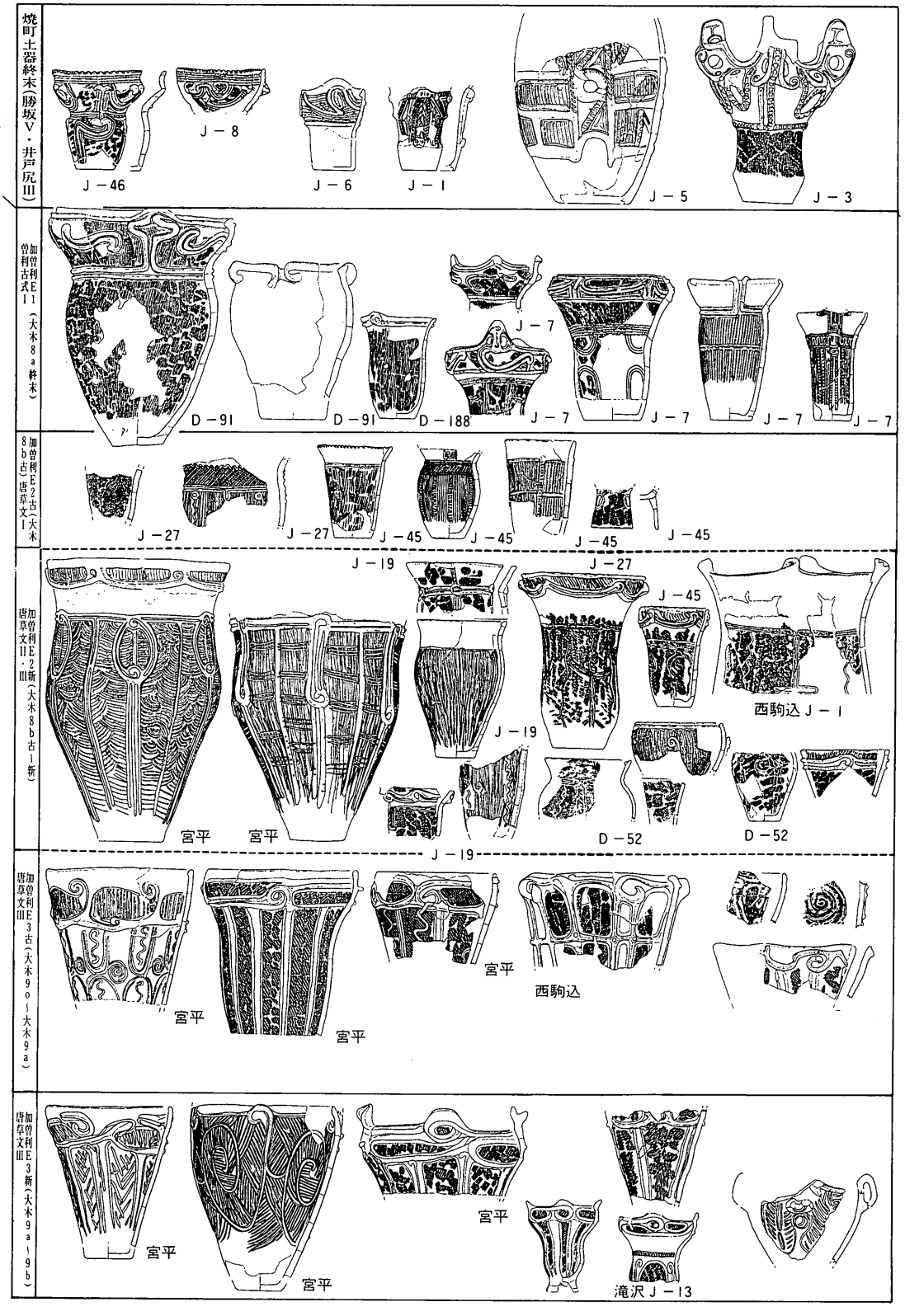


図58　御代田町出土の縄文中期後葉土器のいろいろ（1：14）（遺跡名付してないものは川原田）

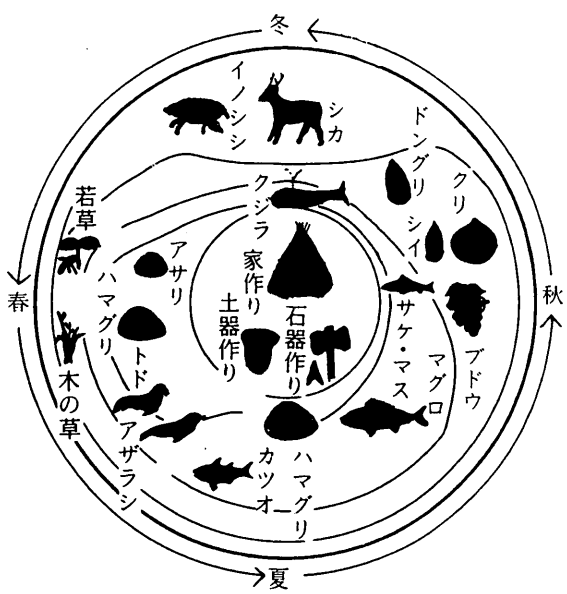
四　縄文中期の石器と生業

食糧の調達　縄文中期になると、大規模で定着性の高い集落が各地に出現する。つまり土器型式で数型式間連続し、一時期の住居数が多いという意味で大規模で、かつ一般的な竪穴住居以外に貯蔵穴や別の機能が推定される小型竪穴施設など生活に必要なさまざまな付帯施設をもつという点で、定着性が高いということが推測できるわけである。このような集落の人口を長期間維持していくためには、計画的に食糧を調達して貯蔵しておき、今度はそれらを計画的に消費していく必要がある。現代における米のように計画的な共通する主食をもたなかった縄文時代の人々は、各地域の環境に根ざした資源（図59）を選択して利用し、地域独自の食物リストをつくっていたと考えられる。

縄文人の食物リスト、すなわち何をどれくらい食べていたかを推定する方法としては、現在おもにつぎの三つの方法が採られている。

① 遺跡から出土した食べかすの量や種類を調べる
② 直接当時の人間の骨から何を食べていたかを割り出す
③ 遺跡から出土した食糧獲得や加工用の道具の種類・量・使用の痕跡を調べる。

これらを順に解説していくことにする。



空間固定型資源

時限性	通時性
ドングリ類、クリ、果実類、木芽　など	貝類、浅海性魚類　など

空間移動型資源

時限性	通時性
トド、アザラシ、クジラ、カツオ、サケ、マス　など	シカ、イノシシ、カモシカ、ツキノワグマ　など

図59　縄文人の生業構成と食料資源類型（『季刊考古学55号』より）

食物残滓の調査　貝を食べれば殻が、魚の肉を食べれば骨が残る。縄文時代の食生活を復元するために、遺跡から出土した食物の残りかすの量や種類を調べるという研究が東北・関東地方の貝塚を中心に古くからなされている。最近の一例をあげると、縄文晩期の例ではあるが宮城県遠田郡田尻町の中沢目貝塚の調査では貝層のすべての土壌を一ミリと五ミリ目の篩で水洗することで（H I 3区で329層）、一括投棄されたゴミの内容の全貌とその時期的な変化が明らかにされた。ここで確認された貝類はオオタニシ、イシガイ・ヌマガイなど淡水性の貝に加え海産のアサリなど3綱3目32科41種、魚類はコイ科を中心にギバチ、ウナギ、ドジョウなど淡水魚を中心に2綱18科15種、鳥類は湖沼域に飛来するカモ類が六割を占めマガン、ヒシクイ、オオハクチョウ、キジなど9目10科8種、哺乳類はイノシシ・ニホンジカが八割を占め、ノウサギ、イヌ、キツネ、ネズミ科など5目9科13種にも上る。アサリの貝殻成長線の分析や回遊魚・渡り鳥などの情報と層の堆積順序を検討することで、これらのうちあるものは通年、あるものは季節ごとに、さまざまな組み合わせを取りながら食卓にのったことがわかった。海から三〇キロ離れた東北の湖沼地帯の縄文人は四季を通じて湖沼丘陵地、あるいは海岸部の安定した資源を有効に活用し基幹集落を存続させていたのである。

それでは浅間山麓の縄文人はどうだったのであろうか。川原田遺跡D84号土坑の内部からは、焼土・土器片とともに多量のトチノキの果皮が出土した。この土坑は最終的にゴミ穴として使われたと考えられる。このほか、同遺跡J12号住居からはオニグルミ・クリ、前期にあたるD160号土坑からもオニグルミ、J53号住居からはコナラ属の炭化種実が出土しており、縄文人がこれら堅果類を利用していたことがわかる。

動物遺存体としては滝沢遺跡の後期の住居跡・土坑・屋外埋甕からはニホンジカ、イノシシ、小型の鳥類の骨が出土している。周辺では小諸市石神遺跡でこれらにオオカミ、キジや淡水産のイシガイ、ドブガイ、鹹水産のハマグリなどが、戸倉町円光房遺跡ではノウサギ、タヌキ、ツキノワグマが加わる。また、第三節で述べたように北相木村栃原岩陰では内陸の貝塚ではサケ科魚類の椎骨十数点や、その幼生がサケ科魚類のエラに寄生するといわれているカワシンジュ貝が出土している。サケは、平安中期にまとめられた『延喜式』に鮭楚割・氷頭・背腸鮭子が信濃の中男作物として記載されており、信濃での鮭漁がさかんで特産物として珍重されていたことがわかる。前述の中沢目貝塚

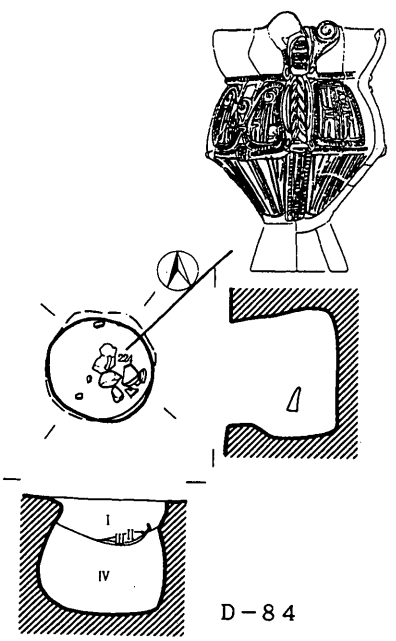


図60　川原田遺跡D84号土坑
（1：80）

ではサケの椎骨が季節を問わず各層でまんべんなく出土していることから、これらは遡上する秋に限定的に捕られたものの、加工することによって通年にわたって消費されていたことが推定されている。市川健夫によれば千曲川・犀川のサケの漁獲量高は昭和十一（一九三六）年に西大滝ダムができる以前は一万八五〇〇貫（六万九三七五㌔）に上ったとされる。おそらく御代田町を含む千曲川水系の縄文人たちも秋に千曲川で集中的にサケ漁を行ない、保存食糧として貯蔵していたのではないだろうか。

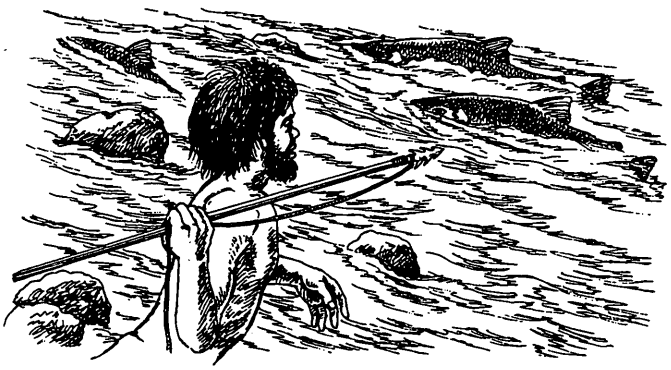


図61　縄文時代のサケ・マス漁
（『図説　長野県の歴史』より）
縄文時代遡上するサケ・マスは縄文人にとって重要なタンパク源であった。図は銛でサケをねらっている縄文人の想像図。

骨から見た食物　当時の人々の骨からコラーゲンというタンパク質を抽出し、そこに含まれる炭素と窒素の同位体比を測定することによって、生前摂取していた食物の傾向を割り出す方法は軽元素食性分析法とかアイソトープ食性解析法とよばれる。長野県内では明科町北村遺跡の縄文中期末から後期前半にかけての五体の人骨に基づく分析結果が公表されている（図62）。それによるとクリ・ドングリ・トチ・イモなどいわゆるC3植物に依存する割合が七四・二㌫とかな

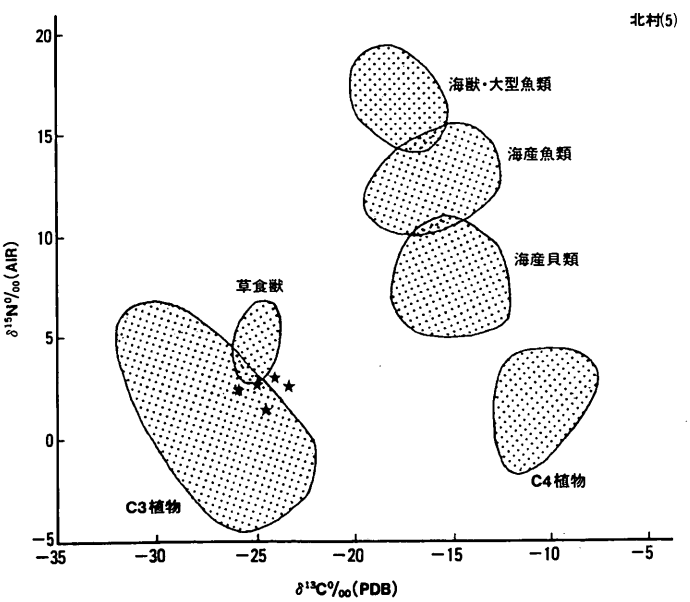


図62　北村縄文人の炭素・窒素安定同位体分布結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム　人骨の同位体分析結果は食物の同位体比に補正して示す（『北村遺跡』より）

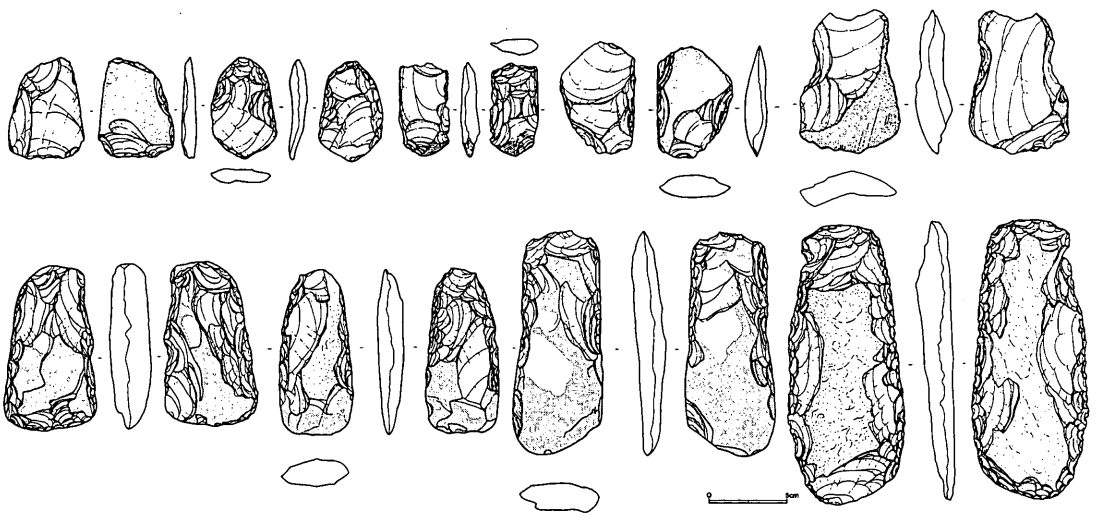


図63　川原田遺跡の打製石斧

川原田遺跡では前期よりも中期の方が、石器全体に対して、打製石斧の占める割合が高かった。発掘で出土した総数105点の中期の打製石斧は竪穴住居など諸施設の土掘りに役立ったほか、ヤマイモなどの植物を掘り出すのにも重宝したと考えられる。石斧と名づけられているが、実はスコップや、鋤の役割を果たしていたのである。

り高いという結果が得られた。これはオットセイやアザラシなどの海産大型動物に依存する北海道縄文人はもとより、関東や東北の縄文人よりもC3植物の利用度が高く、逆に動物や魚介類への依存度が低いことがわかった。このような植物資源への偏重がいつから始まるのかは、現在の人骨調査例から判断することはむずかしいが、石器組成からその推移をかいま見ることができる。

川原田遺跡の石器装備　動植物資源を獲得もしくは調理加工するための道具から、縄文中期の食糧の確保について考えてみる。川原田遺跡の縄文前期（中道・関山Ⅰ・諸磯式期）と縄文中期（五領ケ台Ⅱ式期～加曽利E2式新段階）の石器装備の構成を比較すると、打製石斧の割合が〇・五㌫（製品の五・九㌫）から三・九㌫（製品の一七・五㌫）に上昇する。中期に打製石斧の多い状況は、塩野西遺跡群全体を視野に入れても同様で、この傾向は後期まで存続する。素材にはおもに安山岩や頁岩が用いられる。このほか石鏃、石匙、石錐、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、磨石などが比較的多い器種として掲げられる。

打製石斧の機能　打製石斧の機能は土掘りとされる。土掘りといえば竪穴住居や土坑など多様な施設の構築がまずあげられる。しかしながら、はたしてそれだけであろうか。中期になって打製石斧が多くなる地域は中部地方から関東地方西南部へと連なり、磨石が多く打製石斧の少ない地域に、関東地方東北部があげられる。そしてそ

の両地域を比較すると、打製石斧の多い地方ほど大型の貯蔵穴が少ない。ここから今村啓爾は打製石斧を根茎類採集のため多用した人々は、ジネンジョ（自然薯、ヤマイモ）のような深い根を張り植物自体が栄養を貯蔵しているような植物をおもに採集していたため、貯蔵穴を多くは保有しなかったのではないかという説を唱えた。たしかに川原田遺跡では、関東地方東北部や新潟県でみられるような大型のフラスコ状土坑はなく、やや底部が広がる直径一メートル前後のD―84・D―115が貯蔵穴の可能性を有するにすぎない。(注3) また、もし中期の人々がイモを多用し始めてその傾向が後期まで連続したとしても、クリ・ドングリ・トチなどの堅果類と並んでイモもC3植物に含まれるため、北村遺跡で示された後期のアイソトープ食性解析結果とも矛盾しない。川原田遺跡で出土した中期の打製石斧一〇五点のうち約半数は安山岩製であり、比較的近距離で入手できる石材を用いている。そしてとくに中期の打製石斧は土掘りを象徴するかのようなトロトロとした激しい摩滅をともなうことが前期とは異なる特徴とされる。詳細は第八節へ譲るが、この前期と中期の磨滅痕の違いを、伐採加工具から土掘り具への転換としてとらえる可能性も示唆される。

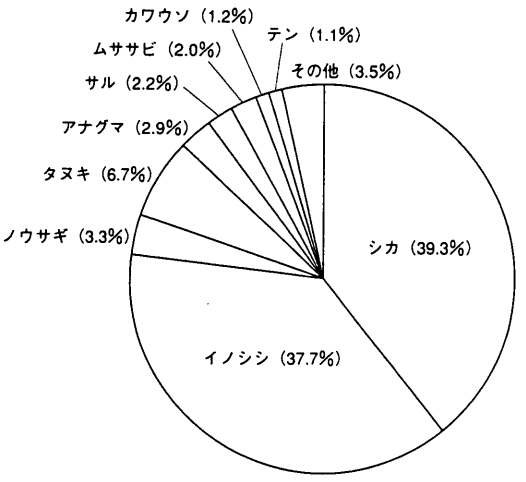


図64　縄文時代の陸獣狩猟の割合

一般に縄文遺跡では、シカ・イノシシの骨の出土率が高く、縄文時代の狩猟対象獣は主にシカ・イノシシなど中型獣であったとみられている。こうした中型獣の狩猟には弓矢猟やおとし穴猟などの罠猟が用いられた。事実、国内各地の縄文遺跡からおとし穴遺構が発掘されている。

石鏃と狩猟

縄文時代の狩猟対象獣は、動物遺体の内容の集計からはシカとイノシシが全体の七七パーセントを占めるとされてきた。ところが大規模な拠点集落とされる青森県三内丸山遺跡では、イノシシ二・七パーセント、シカ一・四パーセントにすぎずムササビとノウサギが全体の

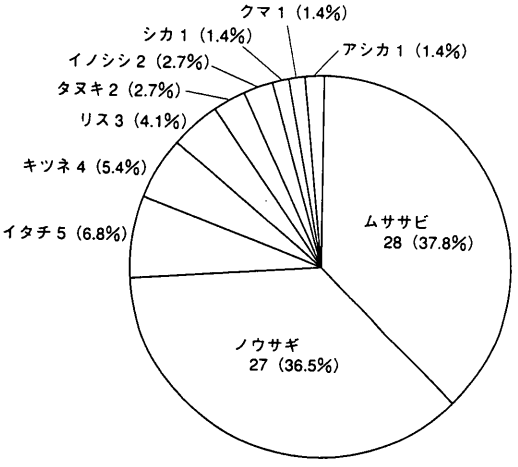


図65　三内丸山遺跡の哺乳類の割合

（動物名の後の数値は資料数）（『縄文人の時代』より）

三内丸山遺跡では通常縄文遺跡から見つかるシカ・イノシシの骨があまり見つからなかった。三内丸山人はあまりシカ・イノシシを食べなかったのだろうか。しかし骨が出土しなかったからといって、それらの肉が食べられていなかったということにはならない。この点に、当時のメニューを推定する難しさがある。

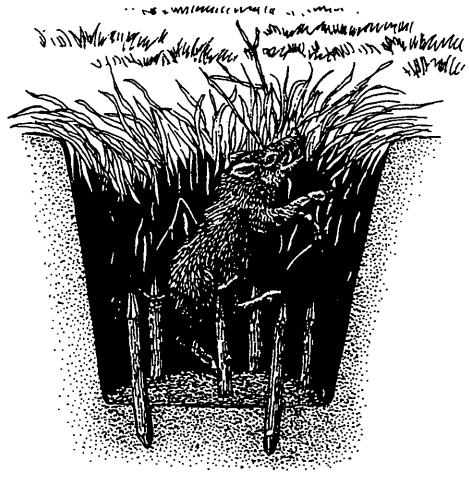


図66　おとし穴にかかったイノシシ
（『図説　長野県の歴史』より）
おとし穴をしかけっぱなしでは、動物はつかまらない。おそらく、集団でシカやイノシシなどの動物を、追い落としたのであろう。

七四㌫を占めるという結果が報告されている。ここから食料組成を遺跡出土の動物遺存体から導き出し、地域ごとの様相を把握することの必要性が高まったわけである。

このような中・小型獣の狩猟に用いられた道具が弓矢である。矢の先にはおもに黒曜石製の石鏃が装着され、それが住居跡から出土している。石鏃の出土量は川原田遺跡では前期・中期ともに二・八㌫（製品の一二・七㌫）と変化なく、住居跡平均で一～二個が出土していることになる。対象獣は前述した滝沢遺跡の例や原生の町域に生息する哺乳類を概観した限りでは、ニホンジカ、カモシカ、イノシシ、コガモ、マガモなどが推測される。現在のイノシシ猟の聞き取り調査からは、猟師二人から五人程度で行なう集団猟と単独猟があり、単独猟を行なうには集団猟であらかじめ修練を積む必要がある。イノシシのすみかを密かにつかみ、逃走経路を予想して待機するなど緊張の連続である猟の過程では、どの場面でもイノシシの生態を熟知していることが必要である。また、足跡を見つけたり直接格闘する役割を担うイヌは非常に重要な狩猟の成員であったとされている。諸動物の中でイヌだけが丁寧に埋葬され、しかも傷を治癒したようすがわかるものもあるほど大切にされていた理由はこのような役割によるものであろう。ただしこの例は鉄砲を使った猟での話であり、どう猛なイノシシに弓矢だけでとどめが刺せたかという疑問も投げかけられている。シカ猟にもやはりシカの習性を巧みに利用し、シカの声の疑似音によってシカをおびき寄せるシカ笛はひじょうに有効であることが指摘されている。いずれの猟にも動物の生態の把握と道具の整備、そして狩場の地形環境を熟知することが重要なファクターとなったことは間違いない。

磨石（すりいし）・石皿（いしざら）　川原田遺跡ではこのほかに磨石が全体の約三分の一軒の住居跡から出土している。石皿は七点にすぎない。敲石も二点である。石材は安山岩が主体である。この傾向は土坑・遺物包含層の石器でも同様である。土坑などから出土したドングリ・トチはいずれもアク抜きを要する。にもかかわらず、このような礫石器が少ない背景には、アク抜きの工程上でも食物加工の際にも、つき砕いたりすり潰すような加工方法があまり取られなかったことが考えられる。ドングリ、トチは粒食で、ワラビなどもすり潰さずに摂取したのだろうか。あるいはこのよう石器を世帯間で共用し、さらに伝世させるような可能性があるのだろうか。

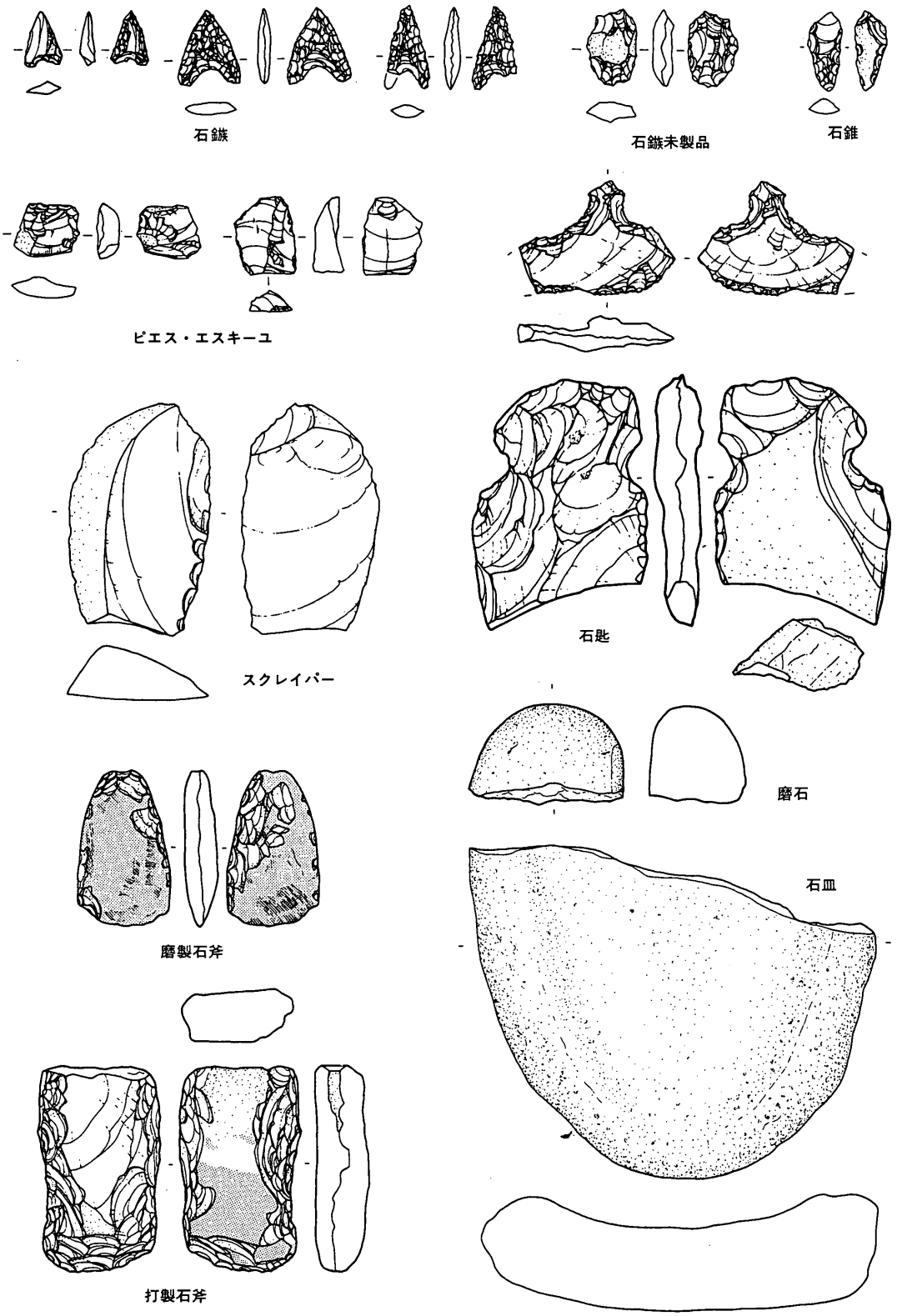


図67　川原田遺跡J12号住居の石器組成

表1　川原田遺跡の縄文中期の石器組成（住居跡別：点数）

器種 / 住居跡	石鏃	磨製石鏃	石鏃未成品	石匙	スクレイパー	ピエス・エスキーユ	石錐	リタッチド・フレイク	微小剥離痕のある剥片	打製石斧	磨製石斧	礫器	磨石	凹石	石皿	敲石	石核	原石	盤状石皿	円盤	石棒	棒状石製品	削器	小皿	剥片	その他	合計
J－1	1		1		1					4						1									10		18
J－2				1	1	2				1	1		1					1							5		13
J－3	2			2		4				1															50		59
J－4			1		3	7				10	1		3				3	3				1			99		131
J－5	6		6		6		2			4			2			1	4	2	1	1					171	1	207
J－6	2			1	2	2	1			4			3		1		2								85		103
J－7					1					2															1		4
J－8	1					2				3															8		14
J－9	1		1			4				1					1		1								27		36
J－10	2		1										1				5								6		15
J－11	2		4	1	1	3				5	1						5								97	1	120
J－12	6		3	3	3	6	1			9	1		1		1		4			1					29		68
J－13	5		8			10	2			6	2		1												177		211
J－15	6		3	1	9	6	1			4	2	2					8	3							124		169
J－16	5		3		1	1				4			2				3								79		98
J－17						2																			162		164
J－19	2	1	2			2	2			2															61		72
J－20	6		1		4	8	2			1			1		1		7								209		240
J－21	2		3		3	8	2			5			2				3				1				137		166
J－22	5		2		2	4				6							3								53		75
J－23										1							1								7		9
J－24	7		3		6	12	2			5	1		4				4	1		1					152		198
J－25						1				1							1								7		10
J－27	1		1		3	2	1			4	1		3				1								41		58
J－28			1		1								1												10		13
J－29	2		1	1	2	4	1			6			3				4										24
J－30	1				1	1				2					1			1							35		42
J－31	1					3	1								1		3								32		41
J－32										1										1							2
J－33						1																			15		16
J－34	4					4		1					1				1								29		40
J－35			1			3							2		1										7		14
J－36				1	2	2	3			2															10		20
J－38						1																			4		5
J－40																									3		3
J－41																									1		1
J－42	1				1	1											1							1	8		13
J－43						1	1			2															2		6
J－45			2			3	1							1											8		15
J－46				1						1															8		10
J－47	1				2	4				4							1	2		1			1		54		70
J－48						1																			3		4
J－49					2	1														1					1		5
J－50	2		1			3	2	1	1	3			2				1	2					1		56		75
J－51	2			1						1	1							1							7		13
J－52					1																				8		9
合　計	76	1	49	13	58	119	25	2	1	105	11	2	33	1	7	2	66	16	1	6	1	1	2	1	2,098	2	2,699
組成(%)	2.8	0.1	1.8	0.4	2.1	4.4	0.9	0.1	0.1	3.9	0.4	0.1	1.2	0.1	0.2	0.1	2.4	0.5	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	77.7	0.1	100.0

五　縄文中期の集落

大木8b式期の変容　縄文前期から中期にかけて東北地方を二色に塗り分けた円筒土器文化と大木式土器文化の境界は、日本海側の秋田市から田沢湖を通って太平洋側の宮古市を結ぶラインである。この境界が揺らぎだし、かつては円筒土器だけが作られていた地域でも、大木式やそれに類似した土器群が作られ始めるのが中期後葉の大木8b式期である。岩手県御所野遺跡では、この時期に中央の墓域を中心に、その周辺に竪穴住居が分布するような環状の構成に変化することが確認されている。このような集落景観の変化は、単純に土器の拡散・移動に留まらず人の移動を示唆するものである。同時期の環状集落に山形県西海淵遺跡、大木8a～8b式期には岩手県西田遺跡などの環状構成をとる大集落が確認されている。大木9～10式段階以降に各地の大集落は解体し、小規模な集落に分散するようになるが、この時期以降、後期にかけて分散した人々の統合のシンボルのように環状列石が作られ始める。

みかけの環状構成　発掘調査によって明らかにされる景観は、発掘調査面積や調査区の形に左右されることが多い。西田遺跡のように調査区が環状構成の中央部にあたった場合や、三内丸山遺跡のように五万平方メートルを面的に広げるような調査では、集落景観がかなり明らかになってきている。それではかりに、私たちが縄文時代のある瞬間にタイムトラベルした場合、このような直線ないし環状といった建物群がみられるのだろうか。縄文中期集落研究グループ宇津木台地区考古学研究会による東京都の多摩地域の遺跡群の分析では、床面に廃棄された土器によって、住居の廃絶された相対年代をしっかりとつかんだ。その上で各住居を比較すると、一時期に同時に存在した可能性のある住居は、多くても数軒にすぎないという結果が出された。

さきに述べた集落景観とは多年にわたり住居が建てられては廃絶され、また建てられては廃絶された結果の集積だったわけである。ただし中央に家を建てないとか、そこを墓域にする、あるいは長方形の掘立柱建物はこの場所、一般の住居はこの場所というような代々の集落景観を維持するための取り決めはあったようである。そこにこそ土器型式をこえて継続しているみかけの環状構成の特殊性がある。

八ケ岳西南麓の集落　このようなみかけの環状構成は、中部高地の縄文中期集落である塩尻市俎原遺跡・原村大石遺跡や茅野市棚畑遺跡の双環状構造（図68）にも現れている。さて、後二者を含む八ケ岳西南麓は大小多くの河川が八ケ岳を源として諏訪湖盆地へ流れ下る。このような河川によって浸食された沢を挟んで、尾根上には大小一四二の中期の遺跡が確認されている。遺跡は標高八〇〇～一〇〇〇メートル付近を中心に一二〇〇メートル付近まで広がる。この地域では中期前葉から後葉まで継続する大規模な集落や、数型式程度連続する小集落が一定間隔をあけて同一尾根上に分布している。勅使河原彰によって一つの集落が同一尾根上の別の集落へ移村することや、谷をへ

図68　茅野市棚畑遺跡の環状集落

だてて隣り合う集落が母村と分村の関係をもっていた可能性が指摘されている。このように住居跡が累積してみかけの密集を呈する前に、人々が資源を求めて居住地を移すこともあったわけである。また、小集落は二キロの間隔をおいて点在することで資源の維持が行なわれたとされている。一で述べたように縄文中期の長野県域には前期に比べて遺跡数が三倍にふくれあがるが、とくにこの八ケ岳西南麓の遺跡数の増加と、後期にかけての急激な減少はかなり顕著である。

浅間山麓の塩野西遺跡群　浅間山から黒斑山・籠ノ登山・烏帽子岳へと続く浅間火山列から発する小河川は千曲川へと流れ下っていく。そしてそれらに刻まれた南向きの斜面には、八ケ岳西南麓のように多くの縄文時代中期の遺跡が確認されている。これらのなかには小諸市郷戸遺跡、小諸市から東部町にわたる戌立(いんだて)遺跡、東部町久保在家遺跡、真田町四日市遺跡など基幹集落が点在している。

このうち塩野西遺跡群は、今のところ浅間の火砕流に阻まれることなく検出された遺跡のなかで東端部にあたる。ここでは浅間山に源を発する濁川・繰矢川・久保沢川が湧水を集めながら放射状に広がり、それらに挟まれた台地上に縄文集落が立地している。さらに